

# 百間川沢田(市道)遺跡発掘調査報告

1992年3月

岡山市教育委員会

『百間川沢田（市道）遺跡発掘調査報告』正誤表

頁	行	誤	正
53	32	備前焼き	備前焼
83	5	盛用	盛高
	14	看守	看取
	31	図220-3	図128 3
89	19	(36)	削除
	20	(37)	(36)
	21	(38)	(37)
	22	(39)	(38)

## 序

岡山市は近年の広域合併の結果、わが国の古代社会において中核地域の一つでありました吉備国の中核を占めるようになり、古墳を始めとした多種多様な遺跡が多数所在しており、その密度は全国的にも有数地の一つと思われます。これら埋蔵文化財の保護保存は現代社会の経済成長に伴う宿命的な社会問題となっており、行政課題として文化財保護行政の中心的な施策であります。

岡山市教育委員会は、都市開発や地域開発が増加の一途を辿る今日的状況の中で、埋蔵文化財の保護保存と諸々の開発との調和を図るために、この数年来各種の遺跡の発掘調査を実施しておりますが、その社会的要求の増大の一途に対して有効な行政的保存施策を苦慮しながらも、その重要性を痛感して鋭意取り組んでいる次第であります。

此度報告致します百間川沢田（市道）遺跡は、旭川放水路（百間川）改修工事に伴って岡山県教育委員会が十数年前から実施しています発掘調査の成果を受けて、百間川沢田遺跡の地統きで改修工事の一環として施工された市道新設箇所を指しております。百間川沢田（市道）遺跡の保存対策は、この改修工事に伴う埋蔵文化財の記録保存の施策の趨勢に従うもので、市道新設用地の発掘調査を昭和62年度に実施致しております。

発掘調査につきましては、発掘調査対策委員の諸先生方のご指導と関係者各位や発掘参加者のご支援を受けて実施され、弥生時代を中心とする遺構と遺物を検出致しまして、百間川沢田遺跡の一隅の実態を明らかに致しております。発掘調査の成果は発掘に際しての関係者皆様方のご指導とご支援の賜物であり、皆様方を始め調査担当者各位に対しまして、心から謝意を表する次第であります。

この報告書にまとめました調査成果につきましては、ご検討、ご批判を頂き、少しでも岡山地方の原始・古代史の研究に寄与できますならば幸に存じます。

平成4年3月31日

岡山市教育委員会

教育長 奥 山 桂

## 例　　言

1. この報告書は、岡山市教育委員会文化課が昭和62年10月から昭和63年2月にかけて実施した、市道百間川堤防3号線新設工事に伴う岡山市沢田地内の発掘調査に関するものである。
2. この報告書の作成は、岡山市教育委員会文化課が実施し、その執筆は第一章を草原が、第二章を神谷・草原が、第三章を草原が、第四章を神谷が、第五章を草原が担当した。
3. 報告書の作成にあたって、溝17出土の赤色顔料の理化学的分析を戸田工業株式会社に依頼した。
4. 遺構実測図の浄写、遺物の整理と実測、遺物実測図の浄写、遺物の写真撮影は草原が、編集には神谷と草原があたった。
5. この報告書に用いている高度値は、標準海拔高度である。
6. この報告書に用いている方位は、磁北である。



## 目 次

第一章 位置と環境.....	1
第二章 調査の経過.....	3
第三章 遺構と遺物.....	10
I 弥生時代後期.....	10
II 弥生時代前期・中期.....	21
III 古代・中世.....	52
IV 近世.....	53
V 水田及び他の遺構.....	54
VI 出土土器観察表.....	61
第四章 自然科学的分析.....	71
第五章 結 語.....	75
1 弥生時代後期.....	76
2 弥生時代前期・中期.....	78
図 版.....	第1～第10

## 挿図目次

第1図	周辺遺跡分布図	2
第2図	発掘位置図	6
第3図	発掘区域図	7
第4図	西壁土層図(1)	8
第5図	西壁土層図(2)	9
第6図	西壁土層図(3)	10
第7図	弥生後期遺構配置図	11
第8図	弥生前・中期遺構配置図	22
第9図	P 29実測図	10
第10図	P 29出土遺物	10
第11図	P 33実測図	12
第12図	P 33出土遺物	12
第13図	住1実測図	12
第14図	住1出土遺物	12
第15図	柱穴③実測図	12
第16図	住2実測図	13
第17図	住2出土遺物	13
第18図	P 22実測図	14
第19図	P 22出土遺物	14
第20図	建物実測図	14
第21図	建物出土遺物	14
第22図	P 88実測図	15
第23図	P 88出土遺物	15
第24図	P 139実測図	16
第25図	P 139出土遺物(1)	16
第26図	P 139出土遺物(2)	17
第27図	井戸実測図	18
第28図	井戸出土遺物(1)	18
第29図	井戸出土遺物(2)	19
第30図	P 127実測図	16
第31図	P 127出土遺物	16
第32図	P 136実測図	17
第33図	P 136出土遺物	17
第34図	P 201実測図	20
第35図	P 201出土遺物	20
第36図	P 129実測図	20
第37図	P 129出土遺物	20
第38図	P 52実測図	21
第39図	P 52出土遺物	21
第40図	P 58実測図	24
第41図	P 58出土遺物	24
第42図	P 59実測図	23
第43図	P 59出土遺物	23

第44図	P 60実測図	25
第45図	P 60出土遺物	25
第46図	P 71. P 72実測図	25
第47図	P 71. P 72出土遺物	25
第48図	P 79実測図	26
第49図	P 79出土遺物	26
第50図	P 86実測図	27
第51図	P 86出土遺物	27
第52図	P 87実測図	28
第53図	P 87出土遺物	28
第54図	P 89実測図	28
第55図	P 93実測図	28
第56図	P 93出土遺物	28
第57図	P 96実測図	28
第58図	P 96出土遺物	28
第59図	P 101実測図	29
第60図	P 101出土遺物	29
第61図	P 120. P 125. P 128実測図	30
第62図	P 120. P 125. P 128出土遺物	30
第63図	P 132実測図	30
第64図	P 132出土遺物	30
第65図	P 133実測図	31
第66図	P 133出土遺物	31
第67図	P 131. P 134. P 135. P 138. P 140. P 141実測図	32
第68図	P 131. P 134. P 135. P 138. P 140. P 141出土遺物	32
第69図	P 146実測図	33
第70図	P 146出土遺物	33
第71図	P 149実測図	34
第72図	P 149出土遺物(1)	34
第73図	P 149出土遺物(2)	35
第74図	P 151実測図	35
第75図	P 151出土遺物	35
第76図	P 161実測図	36
第77図	P 161出土遺物	36
第78図	P 174実測図	36
第79図	P 174出土遺物	36
第80図	P 176実測図	37
第81図	P 176出土遺物	37
第82図	P 177実測図	37
第83図	P 177出土遺物	37
第84図	P 186実測図	38
第85図	P 186出土遺物	38
第86図	P 198実測図	39
第87図	P 198出土遺物	39
第88図	P 200. P 203. P 204実測図	39
第89図	P 200. P 203. P 204出土遺物	39
第90図	P 209実測図	40

第91図	P 210実測図	40
第92図	P 216実測図	41
第93図	P 216出土遺物	41
第94図	P 219実測図	41
第95図	P 220実測図	42
第96図	P 50, P 51実測図	42
第97図	P 50出土遺物	43
第98図	P 51出土遺物	44
第99図	P 225実測図	45
第100図	P 225出土遺物	45
第101図	溝17実測図	46
第102図	溝17出土遺物	47
第103図	溝18実測図	48
第104図	溝18出土遺物	48
第105図	溝19、溝22実測図	49
第106図	溝19出土遺物	50
第107図	溝22出土遺物	49
第108図	溝24実測図	51
第109図	溝24出土遺物	51
第110図	古代・中世遺構図	52
第111図	溝6・溝14・溝16出土遺物	53
第112図	近世遺溝図	53
第113図	溝1・溝15出土遺物	54
第114図	水田実測図	55
第115図	水田出土遺物	56
第116図	河道実測図	57
第117図	河道出土遺物	58
第118図	包含層出土遺物(1)	59
第119図	包含層出土遺物(2)	60
第120図	X線回析表	72
第121図	S E M写真及びE D X分析写真1	73
第122図	S E M写真及びE D X分析写真2	74
第123図	出土弥生後期土器分類図	76
第124図	百間川遺跡群弥生後期遺構数割合図	77
第125図	出土弥生前・中期土器分類図(1)	79
第126図	出土弥生前・中期土器分類図(2)	80
第127図	出土弥生前・中期土器分類図(3)	81
第128図	ヘラ描沈線文条数分布図	83
第129図	墓壙長軸方向分布図	84
第130図	弥生前・中期時期別遺構分布図	85
第131図	土壤墓図(1)	86
第132図	土壤墓図(2)	87
第133図	土壤墓図(3)	87
第134図	土壤墓図(4)	87

## 第一章 位置と環境

百間川沢田（市道）遺跡は、県下三大河川のうち、延長140kmと最長である旭川の下流に形成された沖積平野である岡山平野の東岸域に位置する。調査区付近では旭川の増水から岡山城下を守る目的で、寛文九年（1669年）から貞享三年（1686年）にかけて津田水忠らによって掘削された放水路である百間川が、南北方向から操山山塊に沿って東に向きを変えている。

さて岡山平野で遺跡形成が活発になるのは縄文時代晚期から弥生時代前期以降で、それまでは操山で旧石器が、沖積地面付近で縄文時代中～後期の遺跡などの存在が若干確認されているだけである。縄文時代晚期から弥生時代前期にかけて津島遺跡<sup>1)</sup>、津島江道遺跡<sup>2)</sup>、上伊福九坪遺跡<sup>3)</sup>、南方遺跡<sup>4)</sup>、雄町遺跡<sup>5)</sup>、百間川遺跡群<sup>6)</sup>など多数の遺跡が平野部に形成されており、発掘調査によって稲作受容期の水田と集落の多様な形態が明確になりつつある。弥生時代中～後期になると遺構の数も増加し、赤田遺跡<sup>7)</sup>、乙多見遺跡<sup>8)</sup>、鹿田遺跡<sup>9)</sup>、天瀬遺跡<sup>10)</sup>などが新たに形成されており、検出される遺構、遺物の量も多量で、生産力と集落規模の飛躍的な増大があつたことが予想される。ただこの時期、畿内地域や北九州地域などの各地では大規模な環濠集落が存在するが、現在までの知見に関する限り、当地域では前期段階以降には形成されない。また特殊器台形埴輪を伴う前方後円墳が周辺山塊に築かれているにもかかわらず、弥生時代後期の特殊器台を伴う墳丘墓の様相が明確ではない。

古墳時代は前期から、湊茶臼山古墳<sup>11)</sup>、神宮寺山古墳<sup>12)</sup>、金藏山古墳<sup>13)</sup>の全長100m以上の規模を持つ大形前方後円墳が築かれているが、中期以降は大形墳の建造は見られなくなる。しかし中、小形の古墳は前期から後期の古墳時代全般にわたって築かれている。古代以降、東岸部では備前国府推定地を中心に5ヶ所ものの古代寺院が展開しており、さらに国府関係の倉庫跡とも考えられている百間川米田遺跡などがあり、備前國の中枢地としての有り様がうかがわれる。

中世から近世の遺跡の調査も進んでおり、特に近世岡山城下の様相も、二之丸遺跡<sup>14)</sup>、三之曲輪遺跡<sup>15)</sup>、岡山城関連（石間町ホテル）遺跡<sup>16)</sup>、二之丸遺跡<sup>17)</sup>、二日市遺跡<sup>18)</sup>などの調査から具体的になりつつある。

以上の遺跡の基盤となる沖積地の形成環境についての調査が、南方釜田遺跡<sup>19)</sup>、三之曲輪遺跡<sup>20)</sup>、二之丸遺跡<sup>21)</sup>の下部で行われ、縄文海進期の海水準を示すカキ礁の形成された波蝕台や、縄文海進期の汀線、浅海と推定される海底の生痕内で赤ホヤ火山灰（B.P. 6千～6.5千年）や、さらに下方でA.T.火山灰（B.P. 2.1～2.2万年）のプライマリーな堆積を確認した。これらの調査で採集した土壤サンプルのデータ分析や市街地域のボーリングデータを使って様々な関連分野の視点から岡山平野の古地形、古環境の解析が成されつつある。

（草原孝典）



第1図 周辺遺跡分布図

- 註 (1) 鎌木義昌・近藤義郎・西川宏・間壁忠彦・高橋護・葛原克人・伊藤晃編『岡山県史』第18巻考古資料岡山県1986年及び各遺跡の報告書による。
- (2) 1988年岡山市教育委員会調査
- (3) 出宮徳尚・根木修・間壁忠彦・間壁寛子・水内昌康『播磨多摩寺発掘調査』岡山市教育委員会1975年1989年岡山市教育委員会調査
- (4) 正岡睦夫『岡山市乙多見における溝改修工事に伴う出土土器』『岡山県埋蔵文化財報告3』岡山県教育委員会1989年
- (5) 井上弘他『百間川当麻遺跡2』岡山県教育委員会1982年
- (6) 河本清他『岡山城二の丸跡』岡山県庁舎増築工事に伴う発掘調査』岡山県教育委員会1991年
- (7) 乗岡実『岡山市域における最近の発掘調査成果』『古代吉備』第12集1990年
- (8) 乗岡実『岡山市域における最近の発掘調査成果』『古代吉備』第13集1991年
- (9) 出宮徳尚『岡山県二日市遺跡』『日本考古学年報35』1985年
- (10) 福武書店本社建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査委員会『岡山平野発見の火山灰』『古代吉備』第11集1989年

## 第二章 調査の経過

### 調査に至る経過

岡山市沢田（市道）遺跡の発掘調査は、建設省の施工している旭川放水路（百間川）改修工事の一部である堤防の改修事業による、左岸堤防上の道路整備に伴い、国道2号線と堤防上道路とを接続する市道百間川堤防3号線道路新設工事を岡山市が計画したことに端を発している。この接続部分が民有地であったため、岡山市建設局土木部は、1985（昭和60）・86（昭和61）年度の2ヵ年でまず道路用地の取得を計画した。そして、その用地の取得に関連して「埋蔵文化財に関する調査について（依頼）」を1985（昭和60）年8月12日付けで文化課長あてに依頼した。この依頼を受けた文化課は、用地内の踏査と百間川河川敷における岡山県教育委員会の発掘調査の成果から判断して、当該地は埋蔵文化財の包蔵地内であり、当該事業の施工にあたっては事前の発掘調査が必要な旨を回答した。回答を受けた岡山市建設局土木部は事業計画の見直しを行ったが、接続関係から大幅な路線変更は困難でありかつ小幅な計画変更では本質的な埋蔵文化財保存措置が講じれないため、当初の計画路線で実施することに決定した。そして、1986（昭和61年）11月29日付けで岡山市長から岡山市教育長あてに、1986年（昭和61年）年度での発掘調査の依頼があり、続けて1987（昭和62）年3月31日付けで土木部建設課長から「遺跡調査について」の提出があった。府内での文書手続きは順調に進み、当該地での発掘調査に向けて準備は整いつつあった。ところが、実施設計の段階で用地内的一部分に調査困難箇所が生じたため、1987（昭和62）年4月16日付けで土木部建設課長から「埋蔵文化財に関する調査区域の決定について」が提出された。その内容は、東側隣地との比高差が3.5mもあり、土木管理面と労働安全上から隣地側に法勾配を施す必要が生じたため、法面盛り土部分293m<sup>2</sup>の発掘調査が実施不可能となったと言うものであった。この調査困難箇所は、設計変更等により工事実施時にも埋蔵文化財に影響ないようにすることで両課が合意し、当初の1110m<sup>2</sup>から817m<sup>2</sup>に発掘調査区域は縮小されたが、これで最終的な調査対象地が確定した。そこで、発掘調査の着手に先立ち、1987（昭和62）年9月19日付けで岡山市長から文化庁長官あてに、文化財保護法第57条の3第1項に基づく「埋蔵文化財発掘通知」が提出され、続いて1987（昭和62）年9月21日付けで岡山市教育委員会教育長から文化庁長官あてに、文化財保護法第98条の2第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘通知」を提出了。此度の発掘調査の経費は、岡山市土木管理課の土木費を岡山市教育委員会が委託を受けて執行した。

以上の経緯に基づく市道百間川堤防3号線道路新設工事に伴う発掘調査は、1987（昭和62）年10月19日から開始され、延べ103日間にわたる調査を経過して1988（昭和63）年2月29日に無事終了した。2月13日には、現地説明会を実施し、約100名の見学者があった。

発掘調査組織

発掘調査主体者 岡山市教育委員会教育長 奥山 桂  
発掘調査対策委員 榎田孝司（岡山大学文学部助教授）  
鎌木義昌（岡山理科大学教授）  
近藤義郎（岡山大学文学部教授）  
西川 宏（山陽学園教諭）  
西原礼之助（岡山市文化財保護審議会会长）  
岡壁忠彦（倉敷考古館館長）  
水内昌康（岡山市文化財保護審議会委員） (五十音順)

発掘調査担当者 八木正春（岡山市教育委員会文化課長）  
三宅輝次（岡山市教育委員会文化課長補佐）  
出宮徳尚（岡山市教育委員会文化財係長）  
根木 修（岡山市教育委員会主任）  
藤井文子（岡山市教育委員会主事）  
神谷正義（岡山市教育委員会文化財保護主事）  
草原孝典（岡山市教育委員会文化財保護主事）

発掘調査作業員 秋山克己 有安 章 安藤千秋 井上康太郎 井上立身  
内山齊一 大森広彦 小川照正 金田慎一 高橋伸二  
永井己之助 服部 弘 浜田昌一 松本包房 松本賢治  
井上八重子 服部勝得 出原喜美子 明坂善美 山下喜美子  
(五十音順)

発掘調査補助員 加志麗好 中川敦美 中村菜穂美 福永裕子  
(五十音順)

発掘調査時には、岡山県教育委員会の文化財担当職員や研究者の方々から諸々のご教示やご助言を頂いた。また、赤色顔料の分析にあたっては、戸田工業株式会社戸田泰夫氏に一方ならぬお骨折りを頂いた。調査の終了にあたり、ご支援・ご協力頂いた多くの方々に深謝の意を表す次第であります。

(神谷正義)

### 経過と概要

調査地はほぼ南北方向に沿って長さ84m、北端幅9m、南端幅8mであるが、現況の土地利用による制約にも影響され、調査区中央付近は幅5m程となった。調査の総面積は817m<sup>2</sup>で、調査区は東西方向に走る排水パイプなどの位置を考慮に入れて北からⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区と設定し、発掘区の層序は調査区西側の東西方向の断面観察から得た（図3）。ただ元来脆弱な土質であることや数度の降雨や湧水などに起因して一部壁面が崩壊し完結出来ていない層もあり、その部分に限り点線で表した（図4～6）。

さてアルファベットで示した層は基本的にほぼ一定の幅で、遺物を殆ど含まず緩やかな傾斜で堆積した粘質土で、水田層として認識しているものである。さらに同層は酸化鉄分粒やマンガン粒などの水平方向への偏在が観察されることから、さらに数層に細分している。A層は現水田で、B層は17世紀後半の伊万里焼の小片などを含む溝1に切られている。C、D層は南側でやや薄くなるもののほぼ調査区全体に存在し、D層の下から中世のピット等の存在する遺構面が検出されていることから、近世～中世の時期と思われる。G層からは水田畦畔がとらえられ、それに伴う溝から古墳時代の土器片が検出されており、E、F、G層は中世～古墳時代の時期に求められる。G層の下には幅が30cm程のI層を埋める洪水砂があり、百間川遺跡群の調査で広範囲に確認されている弥生時代末の洪水砂に対応するものと思われる。I層の下にはJ層と部分的にJ層上にO層があり、O層が存在する部分にのみJ層の水田畦畔がとらえられた。J層はさらに下層に存在する河道の遺物などから弥生時代中期～後期の時期に推定される。調査区南側ではE層以下はなくなり、海拔約2.9m付近から淡黄灰色砂質土層を基盤とする微高地が存在する。微高地上には2～3層に分層できる包含層があり、弥生時代前期から中世までの遺構が確認され、量的には弥生時代前期～中期のものが多い。

### 発掘日誌（抄）

昭和62年10月19日 発掘器材の搬入と発掘区の設定

21日 発掘開始

5日 発掘調査対策委員会開催

昭和63年1月9日 Ⅰ区写真撮影・実測

2月8日 発掘調査対策委員会開催

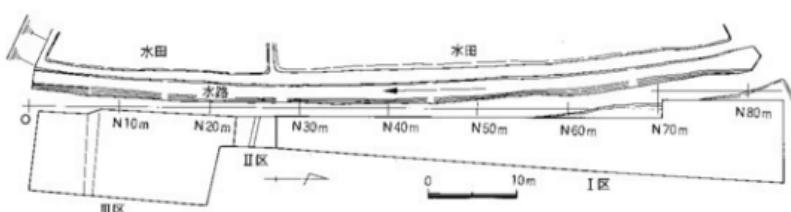
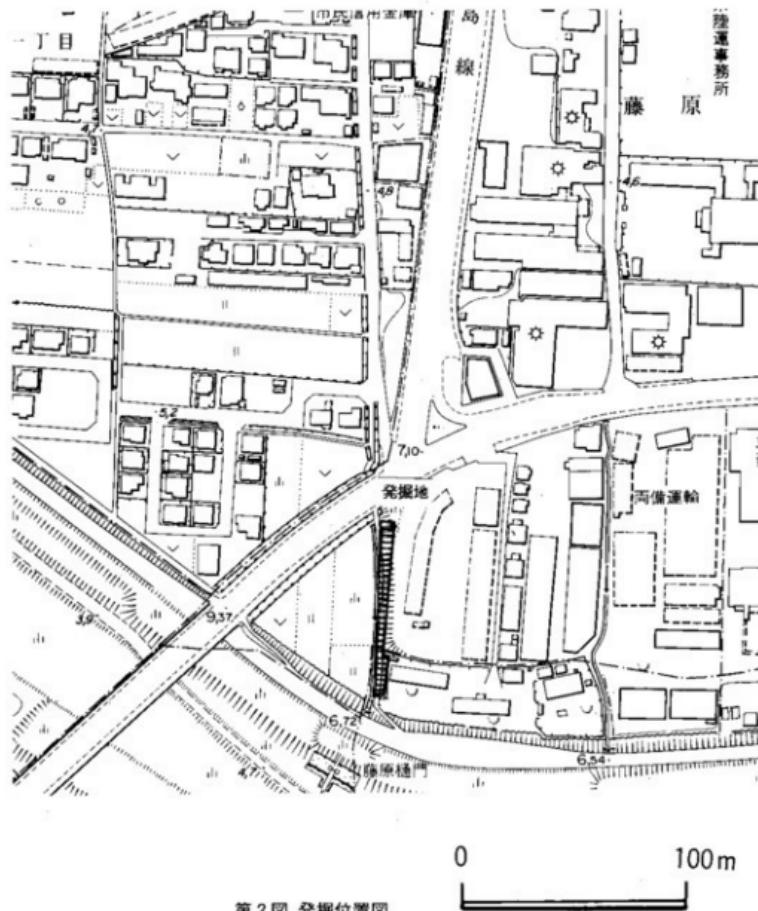
13日 地元見学説明会

23日 Ⅱ区写真撮影・実測

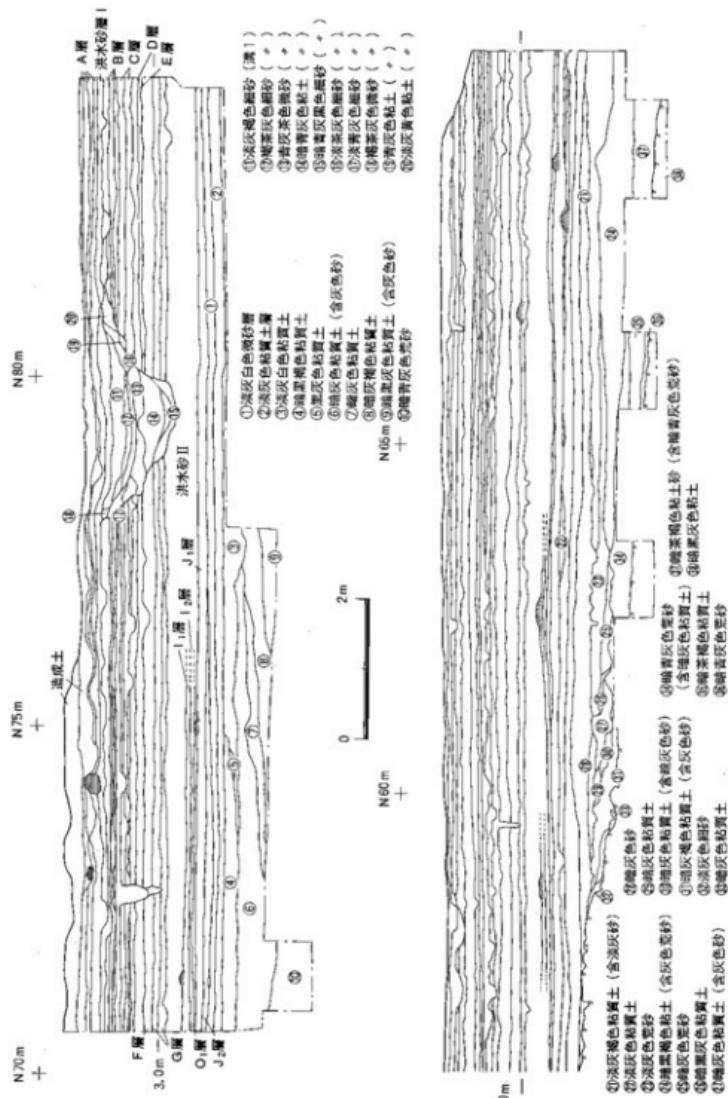
26日 Ⅲ区写真撮影・実測

29日 撤去

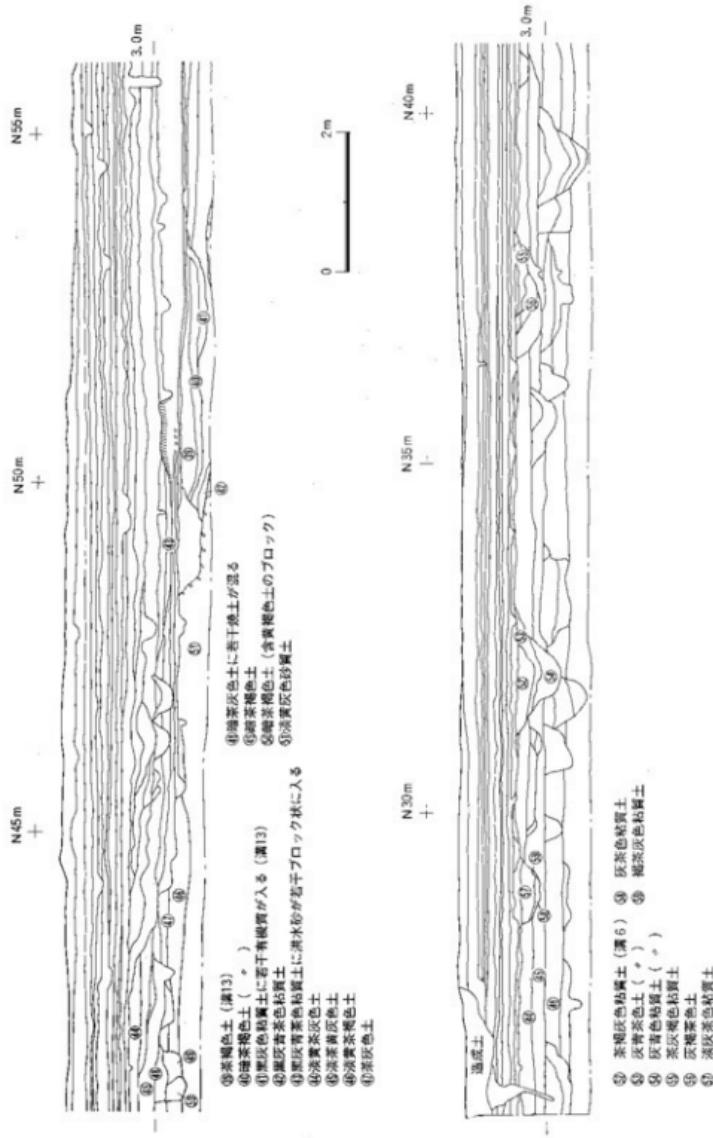
（草原孝典）



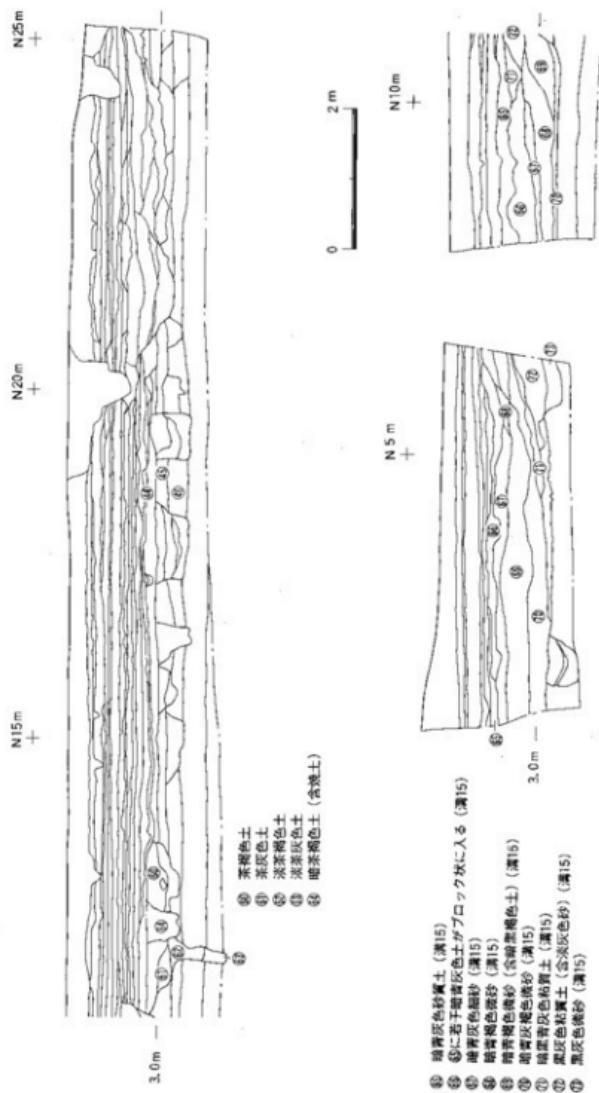
第3図 発掘区域図



第4図 西壁土層図(1)



第5図 西壁土層図(2)

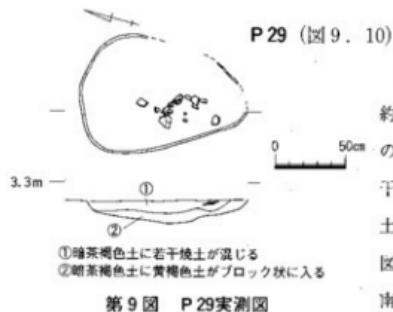


第6図 西壁土層図(3)

### 第三章 遺構と遺物

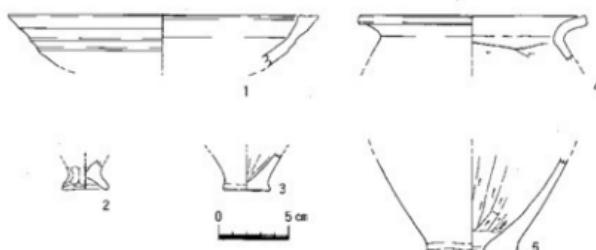
本章では検出された遺構と遺物を微高地部から各々遺構の性格別に記述する。層序については前章を参照されたいが、水田と微高地の遺構の整合性についてはもう1つ明確では無い。なお、以下堅穴住居は、「住」と、土壤は、「P」の略号を使用した。

#### I. 弥生時代後期



第9図 P 29実測図

I区中央やや南東部寄りに位置し、現存部分の長径約200cm、短径約150cm、深さ約30cmを測り、長楕円形の平面形を呈す。埋土は上下2層に分かれ、上層は若干焼土が混じる暗茶褐色土層で、下層は黄褐色の砂質土がブロック状に混じる暗茶褐色土層である。遺物は図示した土器とコブシ大の角礫一個が遺構の中央やや南よりの上層部分から出土した。下層については遺物は全く検出されなかった。出土土器は、小片であることや、散在していること、底から浮いていることなどから、P 29埋没中に混入したものと考えられる。



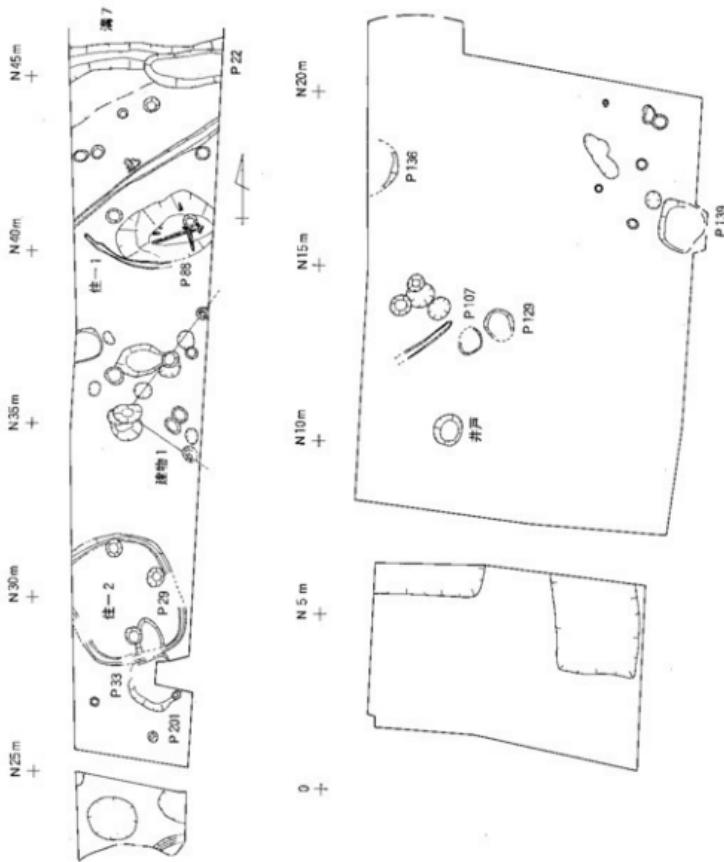
第10図 P 29出土遺物

#### P 33 (図11, 12)

I区中央やや南東部寄りに位置し、P 29や試掘壙によって切られているため平面プランは明らかではない。現存での最大長は2mである。埋土は淡茶灰色土1層で、遺物は図示した高壙の破片と壺胴部の小片が遺構底面より遊離した状態で出土した。

#### 住1 (図13, 14, 15)

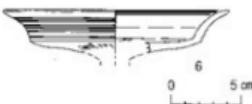
I区中央付近、地形的にみると微高地北端部に位置する堅穴式住居である。上面は弥生時代



第7図 孕生後期遺構配置図



第11図 P 33実測図



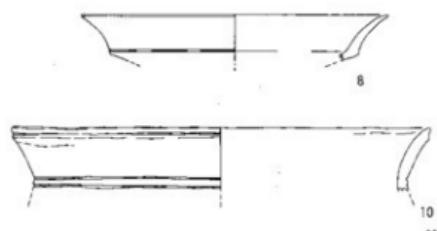
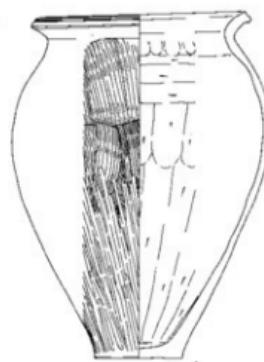
第12図 P 33出土遺物



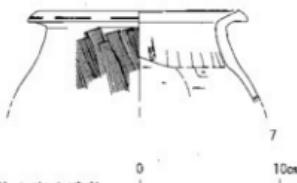
第13図 住1実測図



第15図 柱穴③実測図



第14図 住1出土遺物



末から古墳時代にかけての水田開発による微高地縁辺部の掘削、あるいはそれに伴う微高地縁辺部の溝等によりほとんど残っておらず、調査によってとらえられた遺構はわずかに、弧状をえがく壁体溝の一部と、ピット7個と、中央付近の焼土塊だけである。現存遺構の検出面の高

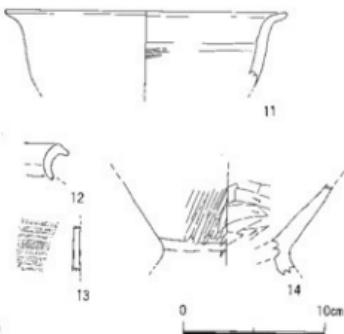
度値は $L=3.2\text{m}$ であるが、本来の床面は削平されていると思われる。壁体溝は $2\sim3\text{cm}$ 程の深さしか残っていないが、その残存部のカーブから平面プランを円形と想定し、住居址床面の規模を復元推定すると径約 $5.6\sim5.8\text{m}$ となる。柱穴は4個ないし5個が推定され、柱穴間の距離は柱穴①から柱穴②間が $3.8\text{m}$ 、柱穴⑥から柱穴②間が $3.9\text{m}$ 、柱穴③から柱穴④間が $2.6\text{m}$ を測る。中央付近の焼土塊については周囲が心持ち窪んでおり、いわゆる中央ピットの残存とも考えられるが、詳細については不明である。

遺物については各柱穴から土器片が検出され、ほとんどは弥生後期のものと推定されるが中には、それらに混じって図14-10のような弥生前期の壺の破片も検出された。柱穴出土の遺物のうち固形化できたものは柱穴③出土のもので、ほぼ完形の壺と壺の口縁部片と高坏片がある。完形の壺は底に横置されており、柱を抜き取った後に置かれたものであろうか。その他の遺物は上層の埋土中から検出された。

住2(図16, 17)



第16図 住2実測図



第17図 住2出土遺物

I区南端で検出された竪穴式住居である。上面は後の水田造成により削平されており、床面からの立ち上がりは、わずか $8\text{cm}$ 程である。また遺構中央は大半が中世の溝により削平されており、北端部は調査区外に出るため未検出である。調査によって部分的に残存した壁体溝とピット3つをとらえた。床面には張り床等は見られず、また壁体溝の拡張も確認されない。床面の高度値は $L=3.15\text{m}$ である。平面プランは北側をみると円形、南側をみると隅丸方形が考えられ、径、または一辺 $3.3\sim3.8\text{m}$ の規模が推定できる。住居址埋土からは、弥生後期と推定される土器の小片が検出された以外は遺物は検出されなかった。また床面上においても同様に遺物はほとんど検出されなかった。床面からは、幅 $12\sim30\text{cm}$ 、床面からの深さ $8\sim10\text{cm}$ の壁体溝

と床面からの深さ20~33cmのピットが3つ検出された。

検出された遺物はほとんどが小片で、図化できたものはピットのものだけ(図17)である。それらのうち一部は中期後半に遡るものもあるが、ほとんどが弥生後期前半に属するものである。

#### P 22 (図18, 19)



第18図 P 22実測図

I区中央付近、微高地の端部に位置する。遺構の東端は調査区外であるため未検出であるが、現状で、幅1m、長径2.3m以上を測り、長楕円形の平面形を呈す。検出面のレベル高は、L=3.2m付近で遺構の最深部は検出面から18cmである。遺



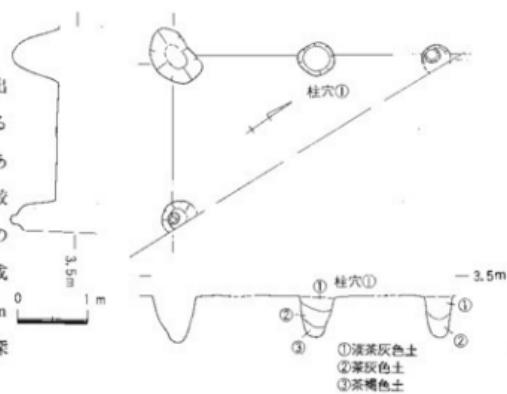
第19図 P 22出土遺物

構の立ち上がりは緩やかで、浅いくぼみ状の様相を呈する。埋土は2層で、遺物は両層から混在して検出された。

#### 建物 (図20, 21)

I区南端付近、住-2の北側で検出されたもので、東側は調査区外に出るため全体の規模については不明である。周囲には深さが5~20cm程の比較的浅いピットが散在し、補強のための柱の可能性も考えられる。建物を構成する柱穴は、底の高度値がL=2.7m付近にあり、検出面から65~70cmの深度となり、4個検出できた。

遺物はそれぞれの柱穴から微細な土器片が混入した状態で、若干出土した。それらはほとんど弥生後期のものと思われるが、細片であるため図化できたものは柱穴1で出土した壺片1点だけ



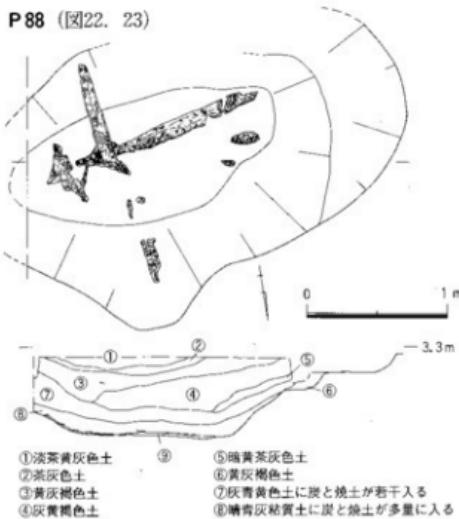
第20図 建物実測図



第21図 建物出土遺物

であった(図21)。これらの土器からこの建物は住-1、2と非常に近い時期と推定できる。

P 88(図22、23)



第22図 P 88実測図



第23図 P 88出土遺物

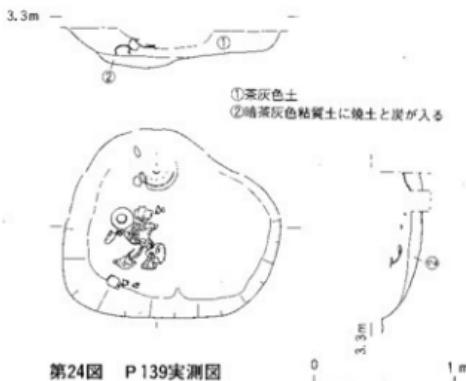
材を置き、それと直交に、しかも最も遺構の幅が広い位置に同じような材を置いている。これは、材の配置が遺構の平面形を意識しているということが言える。また材周囲には焼土と炭が見られ、材以外の被覆施設があったことも推定される。

遺物はほとんどなく、7層から図示した壺の口縁部と1層から管玉片が検出された。8、9層からは遺物は全く検出されなかった。当遺構の時期は8、9層の遺物が最も近いが未検出であるため、それらを埋める最初の層である7層の遺物から、後期の範疇に考えておきたい。

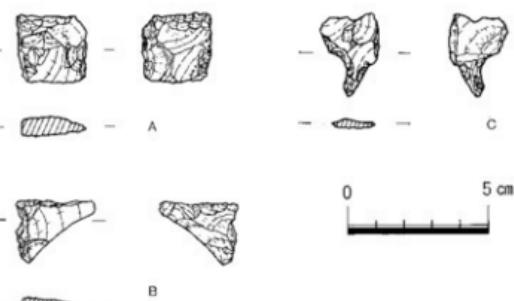
当遺構の性格については覆屋等を持つ貯蔵施設がまず推測されるが、当遺構の断面形が外開きであることや、材が焼けた後に復旧した様子もなく、また周囲の建物や住居址などが火を受けた痕跡が見られない等から、貯蔵施設と考えるより、穴を掘って材を組み、燃やすという何らかの目的に沿った一連の過程を行うための施設の可能性を考えておきたい。

I区中央やや南よりで検出された。東端は調査区外へ出るため未検出であるが、現状で長径約2.8m、短径約2.0m、左右非対称の菱形ともいべき平面形をなす。断面形は、底部中央付近が若干平坦面をして45度程度の傾斜角で急に立ち上がるいわゆる逆台形をなす。遺構底面の高度値はL=2.4m付近である。埋土は9層に分けられ、中央付近が凹む堆積状況から、自然に埋没していった過程がうかがえる。ただ8、9層は灰褐色系の上で多量の焼土と炭が観察され、1から7層までの黄褐色系の土とは区別される。炭化材は8と9層の境、やや8層より植物繊維状の炭に混じって検出された。炭化材の配置は現状から、まず長軸方向に幅約12cm、厚さ約5cmの

P139 (図24, 25, 26)

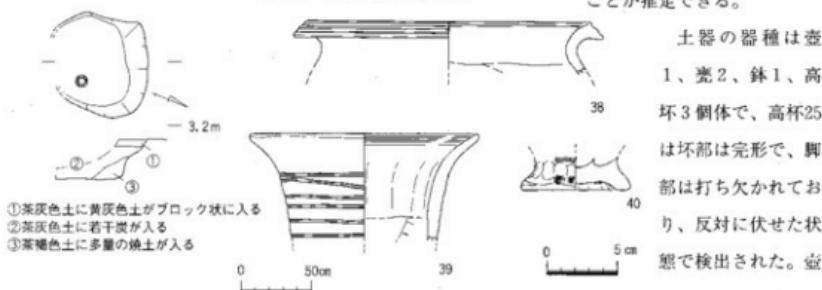


第24図 P139実測図



第25図 P139出土遺物(1)

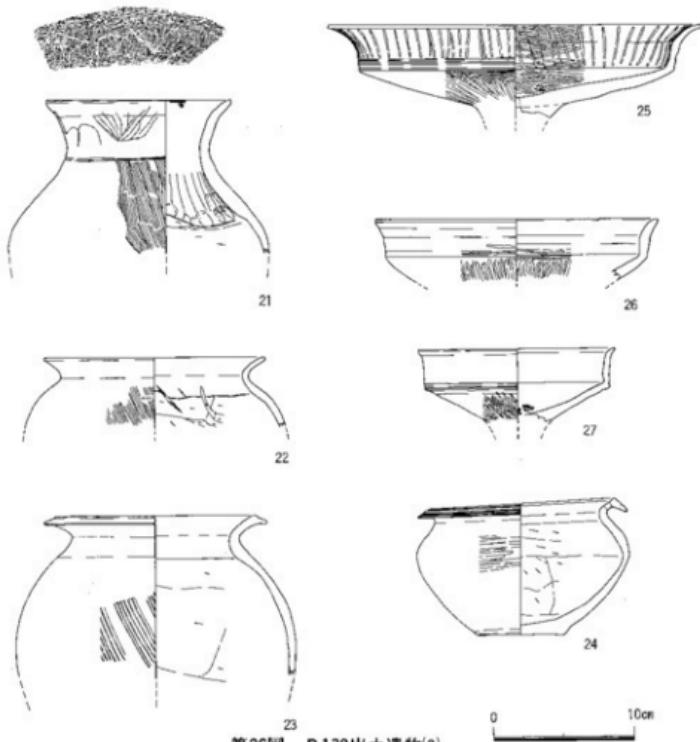
III区中央東よりで、調査区壁面に一部かかる位置で検出された土壤である。長径約1.5m、短径約1.3mを測り、不整円形を呈す。底の高度値はL = 2.95m付近にあり、検出面から28~30cmの深さとなる。埋土は二層が確認され、上層はやや砂質っぽい茶灰色土で、下層はやや粘質っぽい暗茶灰色土に焼土や炭が多量に入れる。比較的完形に近い形で検出された土器は上層からで、下層には無かった。また下層は遺構北半の一段下がった部分の埋土であり、その上面に偏在する土器群とプラン的に重複する。これらのこととは遺構北半の焼土、炭の形成とその後の土器の埋置が当遺構を構成する一連の要素であったことが推定できる。



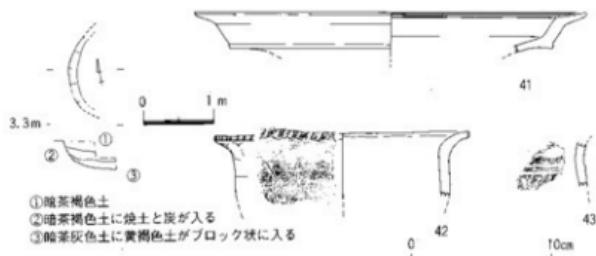
第30図 P127実測図

第31図 P127出土遺物

土器の器種は壺1、甕2、鉢1、高坏3個体で、高杯25は壺部は完形で、脚部は打ち欠かれており、反対に伏せた状態で検出された。壺21の頭部には線刻が施されている。その



第26図 P 139出土遺物(2)



第32図 P 136実測図

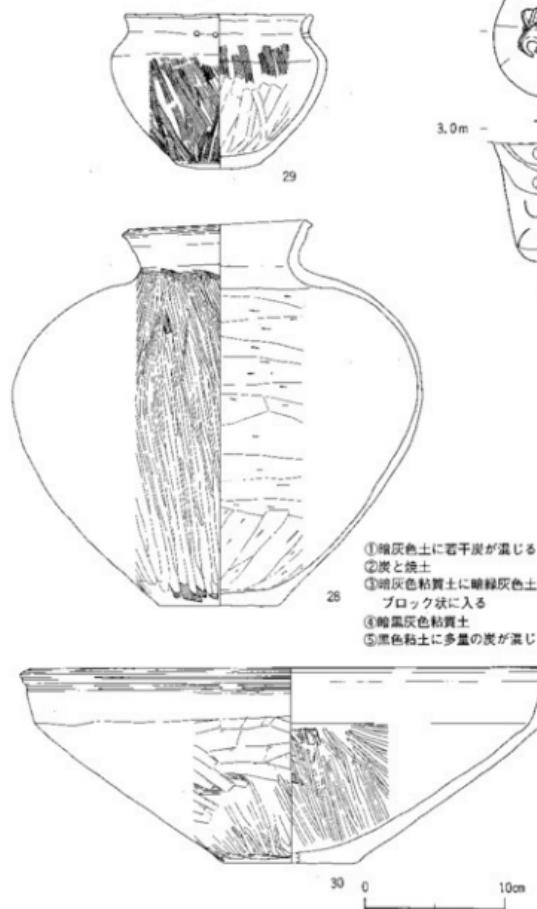
第33図 P 136出土遺物

線刻が紋様的なものであるのか、絵画であるのか不明であるが、ただ倒置して見ると堅穴住居と周囲の景色を模したようにも見える。鉢24は完形であり、口縁部内面に相对する位置に一孔ずつ焼成前に穿孔されている。壺

は2個体ともスヌが頭部以外に付着しており、埋置以前、煮沸に使用されたことが観察される。土器の他にはサヌカイト製の剝片及び石器が3点、上層埋土中で検出された。Cは石錐で、先

端はかなり磨滅している。

### 井戸 (図27, 28, 29)

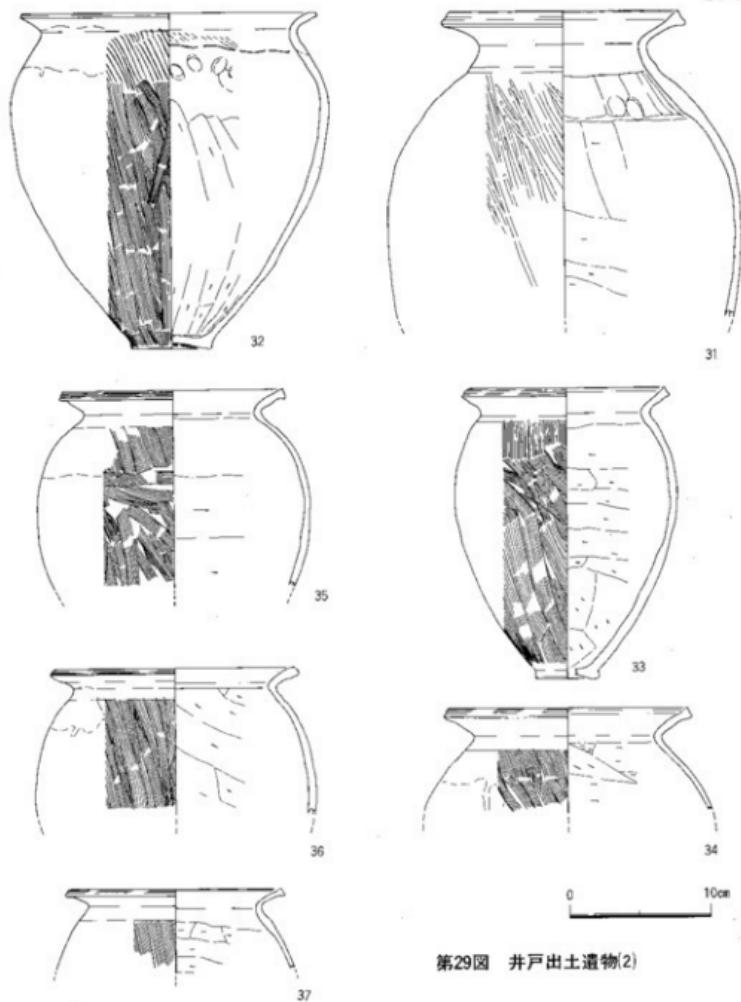


第27図 井戸実測図

第27図 井戸実測図

Ⅲ区南端で検出された井戸で、上面は近世の造構によりかなり削平されている。平面形は径80~90cmの円形を呈す。掘り方は逆台形で立ち上がりはやや直線的である。底面高は検出面下82cm、標高1.84mを測る。埋土は五層が観察される。最下層の5層には遺物は全くなく、黒色粘土に多量の炭が含まれる。4層は完形に近い土器が含まれている。それらの土器は上下、二群にわかれるようにも見られるが、両土器群間の間隔もほとんど無く、同一層位内であることや、また両群の土器間に接合関係があることから4層の土器はほとんど同時期に投入された

ものと推定できる。ちなみに4層の上部として取り上げた土器は30、31、32、33、4層の下部は28、29、34、37で、接合関係にあるのは35、36である。3層はやや中央部が凹む堆積をしているものの、埋土は暗灰色粘土に暗緑灰色粘土がブロック状に入ることから、人為的に埋められた



第29図 井戸出土遺物(2)

れたことが推定できる。2層は炭と焼土の層で、この地点で火を燃やしたこと示している。1層は中央部が凹み、埋土をみても自然に埋没したことが推定される。以上から当井戸は、土器の投入や土砂による埋設や火をたくや放置という一連の段階的な井戸の廃棄パターン、あるいは井戸廃棄後の利用パターンとでもいえるものが想起される。遺物は壺、甕、鉢が存在する。甕は頸部以外にススが付着し、特に32、34、36、などはふきこぼれ痕が観察される。甕以外の

器種は、やや穿った見方であるがP 139出土土器のなかに欠落するものだけが存在する。

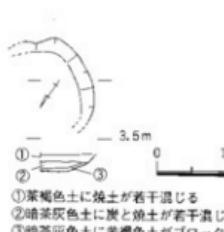
P 127 (図30. 31)

Ⅲ区中央やや西よりに位置し、南端を上面の遺構によって削平されているものの、現状から一辺60~65cm程の正方形に近い平面形をなすものと推定できる。検出面のレベル高は3.1m付近で、遺構の最深部は検出面から-30cmである。断面形は残存部だけからするとやや段をなして立ち上がる。埋土は三層が確認され、2層内から遺物は出土した。土器は量的にも少なく、しかも破片ばかりである。ただ39の長頸壺は頸部下半以下を欠損しているが、口縁部付近は完存していた。

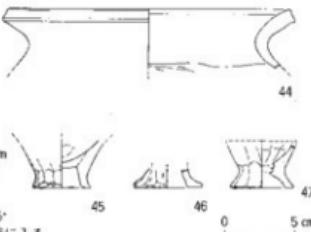
P 136 (図32. 33)

Ⅲ区北よりの西端に位置し、遺構のはほとんどが調査区外にでるため平面プランについては不明である。検出面のレベル高は3.05m付近で遺構の最深部は検出面から40cmである。断面形は底部から緩やかに斜め上方に向て立ち上がる形状をなす。埋土は三層に分かれ、3層は暗茶灰色土に黄褐色土がブロック状に入り、人為的な埋没が考えられ、2層は茶灰色土に焼土が若干入り、1層は暗茶褐色土層である。遺物は高壺の口縁部が3層から、遺構底面より遊離した状態で出土した。その他は1層から出土した。土器はいずれも小片である。

P 201 (図34. 35)



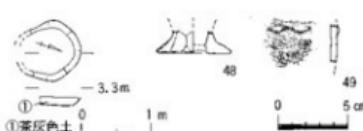
第34図 P 201実測図



第35図 P 201出土遺物

断面形は残存部からみると底部から緩やかに立ち上がる形状をなす。埋土は三層に分かれ、3層は暗茶灰色土に黄褐色土がブロック状に入る。図示した土器はいずれも小片で、3層から出土した。製塩土器の脚には古棺のものと新相のものが含まれているが、当遺構出土の土器は概ね同時期のものと思われる。

Ⅱ区北東付近で検出された土塊で、形状については個溝に切られており明確にできなかったが、現状から長径1.4mの隅丸方形気味のプランが推定できる。検出面のレベル高は3.3m付近で、遺構の最深部は検出面から25cmである。



第36図 P 129実測図



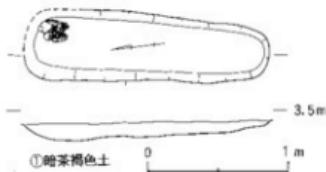
第37図 P 129出土遺物

## P 129 (図36、37)

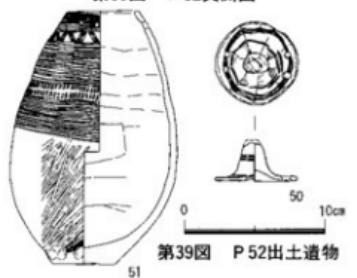
Ⅲ区中央やや西よりで検出された土壤で、南端を切られているが残存部から長径約1m、短径80cmの楕円形の平面プランが推定できる。検出面のレベル高は3.2m付近で、深さは検出面から12cmである。断面形は底が平坦な逆台形をなす。埋土は一層で、遺物は底から浮いた状態で出土した。土器はいずれも小片で、國化できたものは製塙土器底部と突帯文土器の破片のみである。

## II. 弥生時代前期・中期

## P 52 (図38、39)



第38図 P 52実測図



第39図 P 52出土遺物

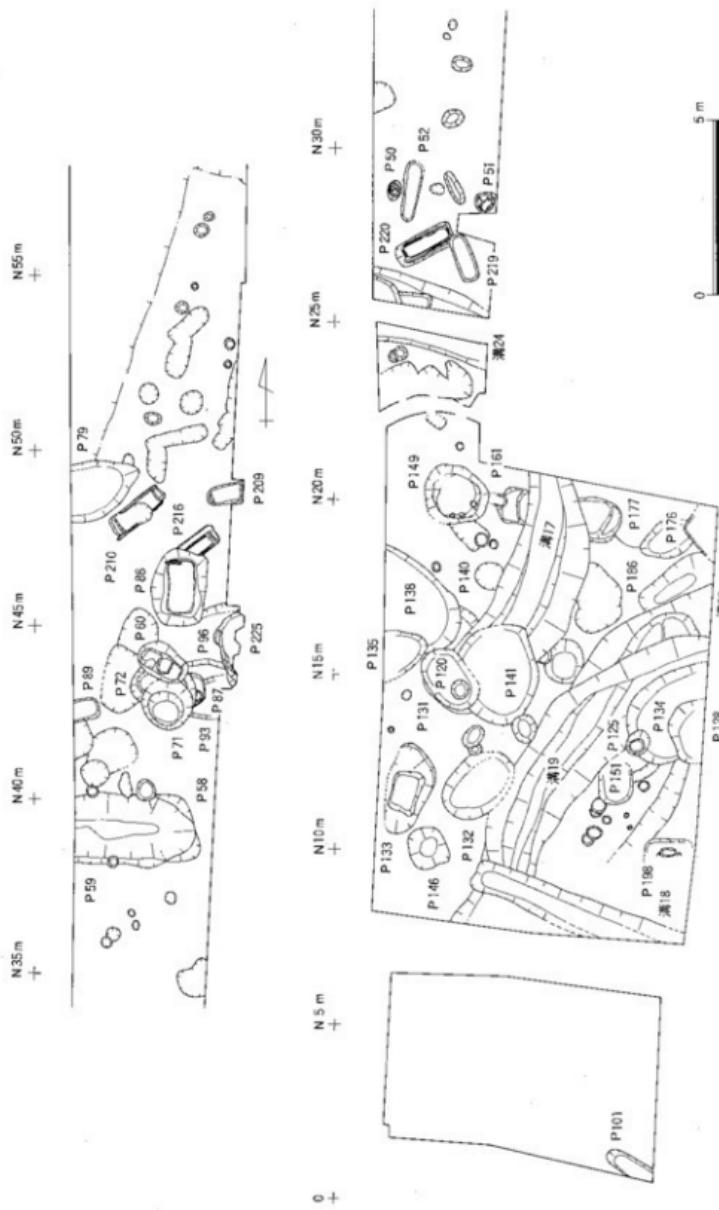
I区南端付近で検出された土壤で、北端を若干削平されているがほぼ全形が推定できる。平面形は長径1.75m、短径0.5m、の長楕円形で、長軸がほぼ南北を向く。長軸方向の断面形は北側がやや深く、緩やかな曲線を描いて立ち上がる。短軸方向の断面形はU字形をなす。検出面のレベル高は3.5m付近で、遺構の最深部は検出面から10~13cmである。埋土は暗茶褐色土の1層で、棺痕跡は見られない。

遺物は図示した完形の壺と蓋が、北端やや東寄りの遺構底面から出土した。蓋は壺の口縁部の直下で検出されたことから、当初は壺に装着された状態であったことが復原され、壺内の土を洗浄したが内容物については何も検出されなかった。

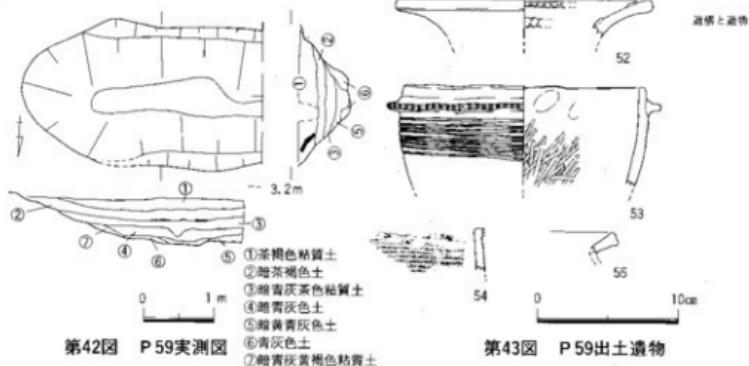
遺構の平面形態や土器の供献的な有り様から、土壙墓の可能性が推定できる。

## P 59 (図42、43)

I区中央付近で検出された土壤で、西端は調査区外に出るため全形は明らかではないが残存部から短径2m、長径3.4m以上の数値が得られる。平面形は先端がやや尖り気味の長楕円形が推定できる。断面形は長軸方向が緩やかに立ち上がり、短軸方向はやや急傾斜でU字形の断面形である。検出面のレベル高は3.0m付近で、遺構の最深部は検出面から60~65cmである。埋土は7層が確認され、5、6、7層以外はレンズ状に堆積する。短軸断面を見ると4層に台形状の落ち込みが観察されるが、プランとして明確にはできず、長軸断面を見ても二段掘りになるような性格のものではないようである。1層中には土器などは検出されなかつたが、北端部



第8図 弼生前・中期造構配置図



第42図 P59実測図

第43図 P59出土遺物

に長さ50cm程の角礫が2個、中央方向に落ち込む様な状況で出土した。また2層と3層の間からも長さ20cm程の角礫が検出され、平行した位置に土器片も若干出土した。本遺構中で検出された土器はこれらだけで、殆どが前期の壺、壺であるが、中に中期の壺の小片がある。また東端で中期の土器を包含するP58を切っていることなどから、本遺構の時期は中期の範疇と考えられる。

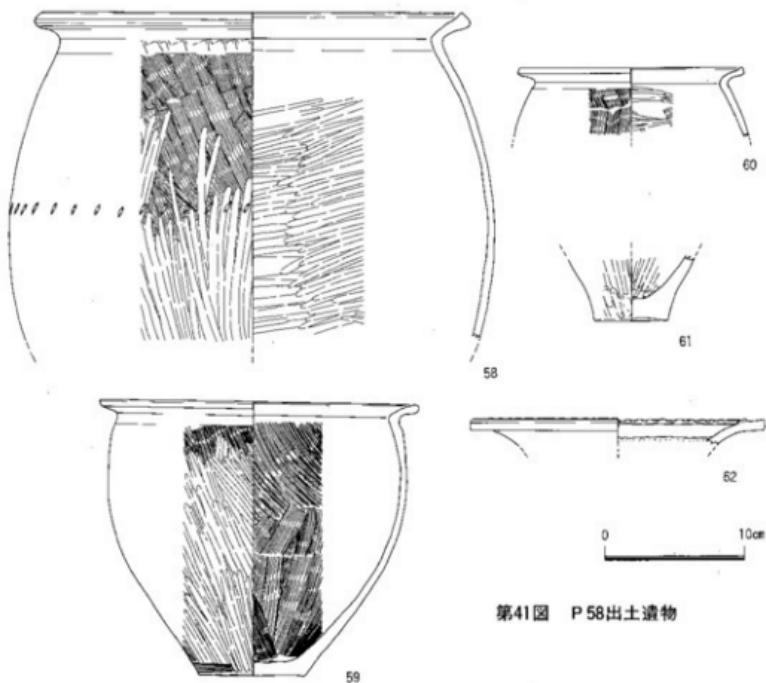
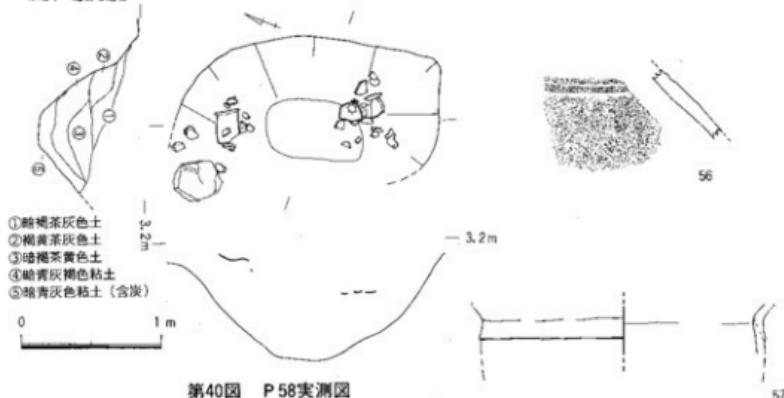
#### P58 (図40, 41)

I区中央付近で検出された土壤で、遺構の上面と西側半分をP59によって削平されており、全体のプランは完全に把握できなかった。残存部で長径2.0m、短径1.1mの数値が得られ、隅九長方形もしくは長辺円形の平面プランが想定される。断面形はやや傾斜のきつい逆台形で、底付近は若干平坦な面をなす。検出面のレベル高は3.0m付近で、遺構の最深部は検出面から70cmである。埋土は5層が確認され、大体レンズ状の堆積をしている。ただ5層は暗青灰色粘土に多量の炭が入っており、5層以上の層とは若干異なるようである。

遺物はすべて1層中から出土した。土器は南と北の2群に分かれて検出され、北群の方が南群より10cm程高いレベルにある。しかし同一層中であることや、両群の土器に時期差が見られないことから、P58が埋もれていく過程の若干の窪みに完形や完形に近い両群の土器が入ったものと考えられる。因みに固化できたもののうち、北群が56、57、58、61、62、南群が59、60である。

#### P60 (図44, 45)

I区中央やや北寄りで検出された土壤でP71とP72の北側を切っている。平面形は長さ1.56m、幅0.9mの長方形である。検出面のレベル高は3.1m付近で遺構の最深部は検出面から54cmである。断面形は傾斜のかなり急な逆台形をなし、底面は中央にやや大きめの窪みがあるなどして平坦ではない。埋土は8層が確認され、下層にいくにつれ若干複雑な堆積状況が見られ、1、2、3層以下には炭、焼土も若干混じっており、自然流入土と人為的に埋められた土と



に分離できそうである。また6層内から歯骨が検出された。しかし断面には棺痕跡等は確認されない。

遺物は各層に包含されているがいずれも小片で、固化できたのは底付近で出土したものだけ

である。時期については中期の土器を包含する P71、P72 を切っていることや、小片ながら中期の土器を出土していることから中期の範疇と考えられる。また遺構の平面形態や歯骨などの存在などから本遺構が墓である可能性が強いと考えられる。

#### P71, 72 (図46, 47)

I 区中央付近に位置し、P71 は P72 の南側を切っており、さ

らに向遺構は P60 によって北側を切られている。まず P71 は北端部が若干削平されているが、ほぼ全形が何とも知れない。径約 1.4m の楕円形のプランが想定され、検出面のレベル高は 3.05m 付近で遺構の最深部は検出面から約 80cm である。断面形はやや西寄りに最深部がくる逆三角形をしている。埋土は 7 層が確認され、全体に炭と焼土が含まれており、特に 6 層と 7 層の境では炭が密集した状態で検出された。また断面を見るかぎり 3 層と 4 層の間にやや不整合が観察され、これらの層を境に土壤内の埋没過程に変化があったか、もしくはそれぞれが別の遺構の埋土である可能性が考えられるが、検出時には明確にしえなかつた。土器は細片であるが各層に包含されていた。

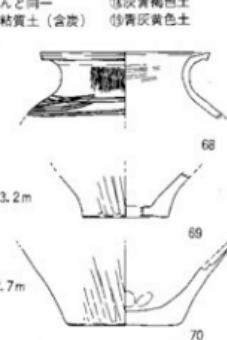


第46図 P71, P72実測図



第44図 P60実測図

第45図 P60出土遺物



第47図 P71, P72出土遺物

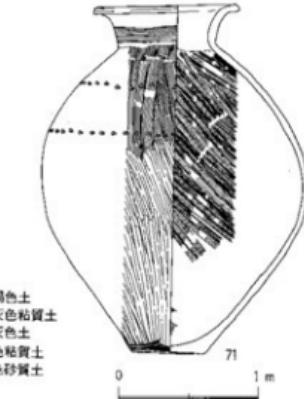
P72 は南北側部の大半を P71, P60 により削削されており、遺構上面の明確なプランは不明だが、残存部から長径 1.8m、短径 1.1m の長楕円形が想定され、さらに内側を長さ 138cm、幅 70cm の隅丸長方形に一段掘りこんである。断面形は底部がやや凸凹しているが、ほぼ箱形をなす。埋土は図では複雑な状況にみら

れ、しかも部分的な断面図であるためやや不明瞭であるが、基本的には中央に向かって若干厚くなる境内流入堆積土とそれとは異なる土層とに区別される。後者の 13 層はその形状から、小

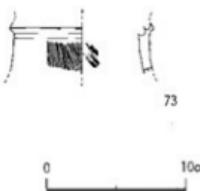
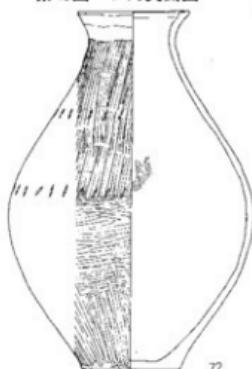
口部に掘り方を持たないで箱形をなす木棺痕跡の可能性が考えられる。しかし埋土中からは骨片は検出されなかった。

P 71、P 72から検出した土器で図化出来たのは3片だけであった。それぞれの遺物の構造への帰属は判然としないが、両遺構からクシ書き文を施した土器片が検出されたことから、両遺構の時期は中期の範疇と考えておきたい。

P 79 (図48, 49)



第48図 P 79実測図

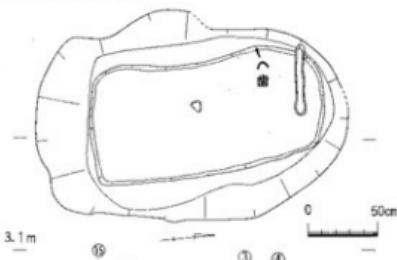


第49図 P 79出土遺物

I区北寄りで地形的にはちょうど微高地端部に位置する。西側が調査区外に出るために全体のプランについては不明である。残存部から幅1.75m、長さ1.6m以上という数値が得られる。検出面のレベル高は2.7m付近で、遺構の最深部は検出面から38cmである。断面形は遺構中心部から緩やかなカーブを描いて立ち上がるカマボコ形をなしている。埋土はやや砂っぽい1層とやや粘質の強い2、3、4層の上下2層に分けられる。しかし各々から出土した土器が接合することから、上下層の時間的な前後関係は殆どないと推定される。

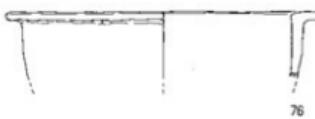
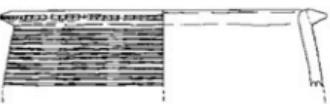
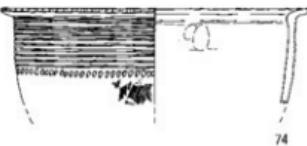
遺物は完形の壺が2個と壺の頭部の小片がある。

P 86 (図50, 51)



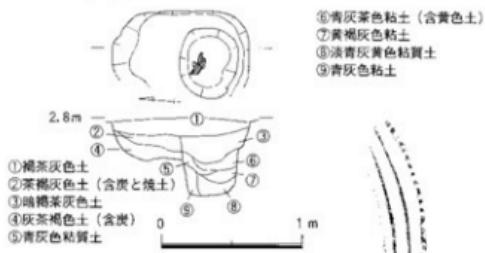
①茶褐色土	⑥灰色砂質土
②茶褐色土（含黄褐色土）	⑦灰色土
③暗茶灰色土	⑧淡灰褐色粘質土（含炭と焼土）
④暗茶灰色土（含黄褐色土）	⑨淡灰褐色土
⑤暗茶灰色土（含炭）	⑩淡灰褐色土
⑥暗茶灰色土	⑪淡茶褐色土
⑦暗茶灰色砂質土（含炭と焼土）	⑫暗茶褐色土
⑧淡灰色粘土	

第50図 P 86実測図



第51図 P 86出土遺物

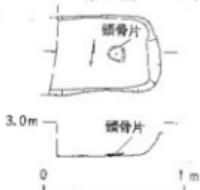
I区北寄りで、地形的には微高地端部に近い位置に人骨片を伴って検出された土壤である。長さ2.3m、幅1.5mで、梢円形気味の隅丸方形プランである。検出面のレベル高は2.95m付近で、遺構の最深部は検出面から60cmである。断面形は長さ1.6m、幅0.75mの平坦面から急角度で立ち上がる箱形をなしている。底付近は5cm程掘り下げて段を形成しており、段の平面形は長さ1.66m、幅0.8mの長方形である。段底面の中央には三角形の河原石が検出され、北西端部には歯骨があたかも顔を西側に向けて埋葬されたような状態で検出された。また歯骨から20cm程北に長さ50cm、幅7cmで底面から7~8cm掘り下げており、木棺の小口板の痕跡の可能性が推定される。埋土は15層が確認され、基本的に上、中、下の3層に分けられる。また13層、14層はプランからは明瞭でなかったが、断面観察からP 86以外の遺構の埋土の可能性が高い。上層は1~6層、15層で黄色系で砂質っぽい。中央がやや凹む堆積をしており、自然に埋没していった過程が推定できる。中層は7~11層で灰色系の砂質土層で7層には多量の炭と焼土が入る。遺構周囲の土壤とは異質であり、人為的な埋没過程が推定される。下層は12層で淡灰褐色粘質土に炭と焼土が含まれており、この土によって三角形の河原石や歯骨が被覆されている。



第52図 P 87実測図



第53図 P 87出土遺物



第54図 P 89実測図

埋葬に伴う供獻的な遺物ではなかったものと思われる。遺構の時期については下層の土器から前期末に上限が求められる。

#### P 87 (図52, 53)

I 区中央付近に位置し、西側を P 60, 71, 72 に切られているが長径 1.0m、短径 0.6m 以上の長椭円形のプランが想定できる。検出面のレベル高は 3.0m 付近で、遺構の最深部は検出面から

58cm である。断面形は二段堀りになっている。埋土は 8 層が確認された。遺物は一段深くなった部分の底より 10cm 程浮いた位置から壺の口縁部片が出土した。

#### P 89 (図54)

I 区や南寄りに位置する。西半は調査区を出るため、全形は明確にできないが、恐らく長方形のプランと推定される。断面形は箱形で、底は平坦である。遺構の検出面は 2.9m 付近で、検出面からの深さは 16cm である。棺痕跡等は確認されなかつたが、遺構東端から西へ 27cm いった底部に頭骨片が検出され、本遺構は土壙墓と考えられる。

埋土から土器等は全く検出されておらず、時期についてははっきりしないが、検出面のレベル等

断面観察からは明瞭な木棺痕跡などは確認されなかつたが、小口板の痕跡らしきものが認められているので、中、下層を埋葬施設や、それを人為的に埋めた土層で、上層は埋葬施設の腐朽によりできた窪みに流入した土層といえるようである。

遺物はすべて破片であり、上層から 76, 78, 中層から 74, 75, 79, 下層から 77 が出土した。いずれも当遺構の埋没過程に入り込んだもので、

埋葬に伴う供獻的な遺物ではなかったものと思われる。遺構の時期については下層の土器から前期末に上限が求められる。

#### P 87 (図52, 53)

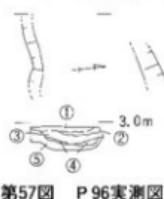
I 区中央付近に位置し、西側を P 60, 71, 72 に切られているが長径 1.0m、短径 0.6m 以上の長椭円形のプランが想定できる。検出面のレベル高は 3.0m 付近で、遺構の最深部は検出面から



第55図 P 93実測図



第56図 P 93出土遺物

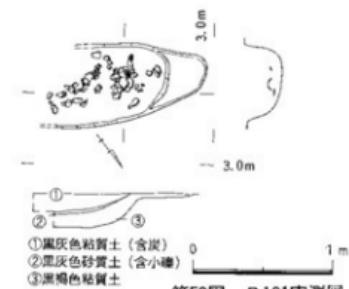


第57図 P 96実測図

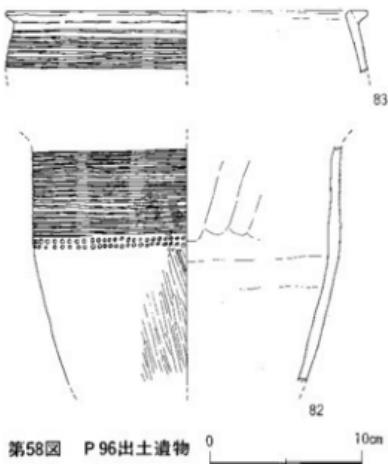
から前期～中期の可能性が最も高いと考えられる。

### P 93 (図55, 56)

I 区中央付近に位置し、東半は調査区外に出ており、西半は P 72 によって切られており、全形は殆ど分からぬ。断面形は底が平坦で、緩やかに立ち上がる逆台形である。



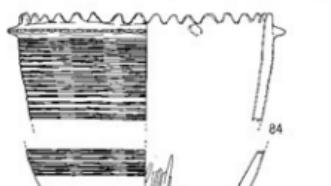
第59図 P 101実測図



第58図 P 96出土遺物 0 10cm

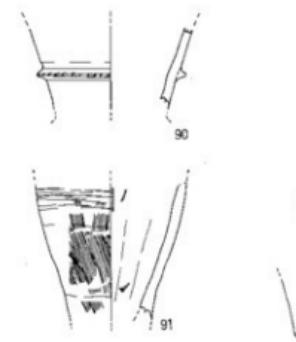


89



84

85



90

91

92

93



86

87

88

89

90

91

92

93

94

第60図 P 101出土遺物 0 10cm

る。遺構の検出面は2.95m付近で、検出面からの深さは12cmである。棺痕跡等は確認されなかつたが、やや北寄りの底に歯が3本確認され、本遺構は土壙墓であると考えられる。時期については、中期の遺構に切られていることや、埋土に前期の土器片が含まれていることなどから、前期以降、中期前半以前に考えられる。

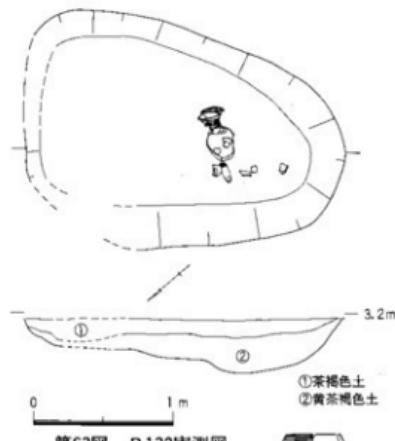


第61図 P120, P125, P128実測図

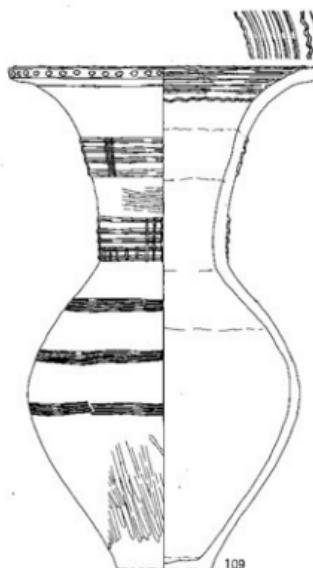
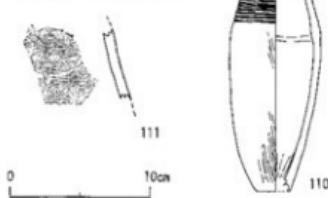
## P 96 (図57, 58)

I区中央付近に位置し、東半はP72などに切られており、西半は調査区外に出るため全形は殆ど分からぬ。遺構の検出面は2.95m付近で、検出面からの深さは35cmである。埋土は5層が確認され、若干炭や焼土が含まれるが、概ね遺構周囲から流入堆積した状況を示している。

遺物は埋土中に底面から浮いた状態で、窓2個体分の破片が検出された。



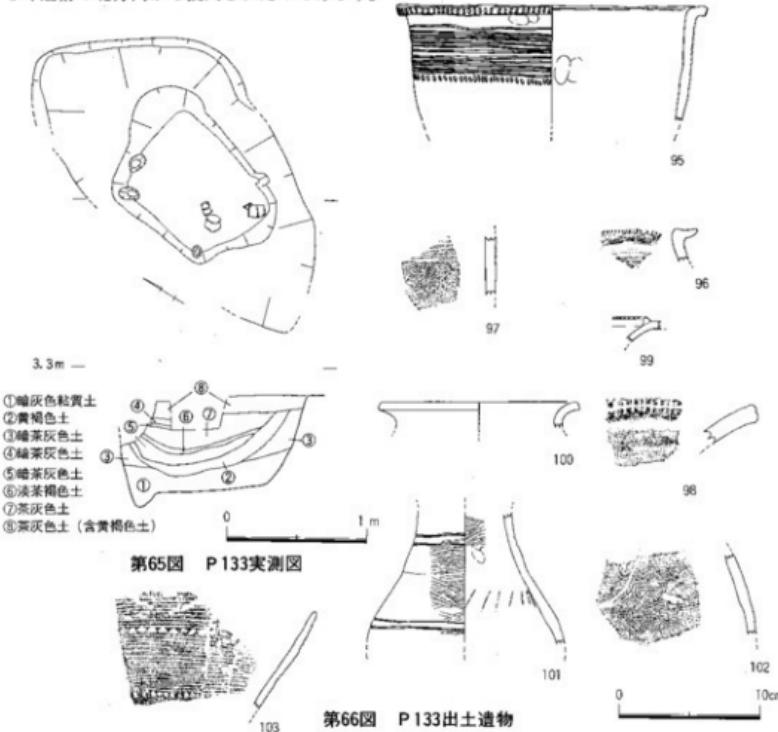
第63図 P132実測図



第64図 P132出土遺物

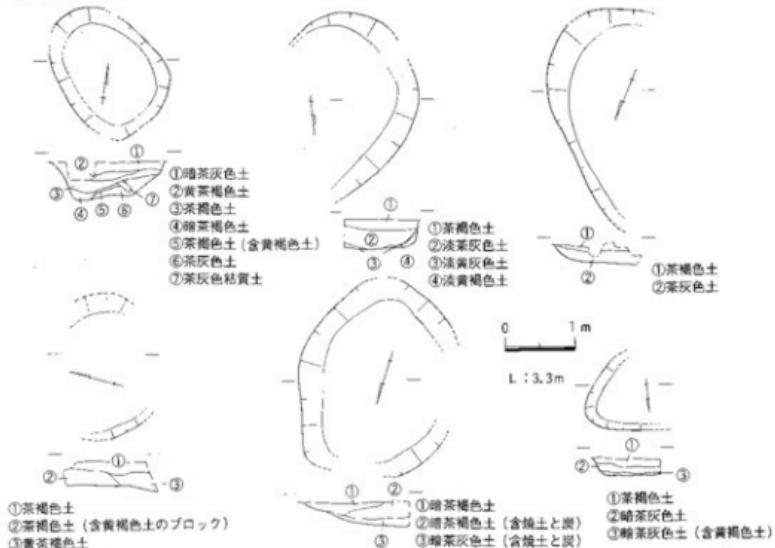
## P 101 (図59, 60)

I区南東隅に位置し、東側は調査区外に出るため全形は不明であるが、恐らく長椭円形、もしくは隅丸長方形の土壙であろう。検出面のレベル高は2.8m付近で、遺構の最深部は検出面から25cmである。断面形はやや傾斜の急な逆台形をなす。埋土は3層が確認され、概ね遺構中央に向かって緩やかに壅み、自然流入土による堆積を示している。遺物は図示した土器が3層の北側上面から下方に散在した状態で検出された。土器の殆どが破片であることなどから、恐らく遺構の北方向から投入されたのである。

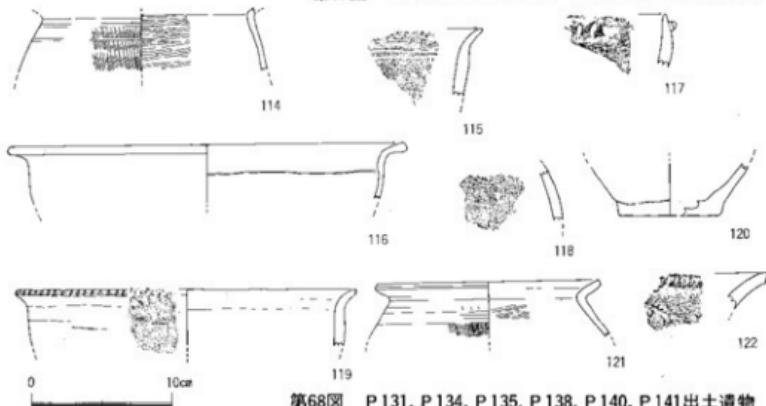


## P 120, P 125, P 128 (図61, 62)

P 120はⅢ区中央やや西寄り、P 125はⅢ区中央東寄りに位置し、それぞれ数層に分かれる埋土をしており、形態的には柱穴状であるが周囲に関連すると思われる柱穴等は検出されていない。遺物は全て小片で、中に凸帯文土器片も含む。時期についてはP 120が中期前半に、P 125が前期後半に推定される。



第67図 P131, P134, P135, P138, P140, P141実測図



第68図 P131, P134, P135, P138, P140, P141出土遺物

P128はⅡ区中央東側に位置し、遺構の殆どが調査区外に出るため全形は不明である。埋土は4層が確認された。遺物は固化できた縄文晩期と思われる土器の底部片と、前期後半の壺の小片だけであった。

#### P132 (図63, 64)

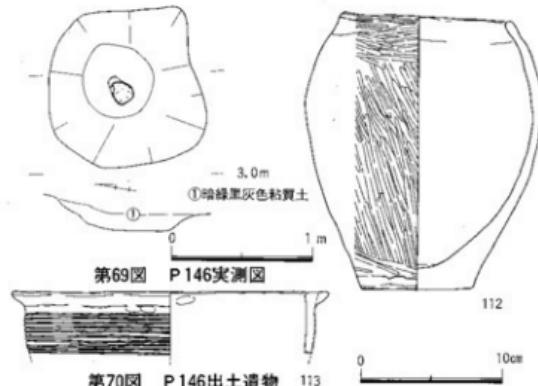
Ⅲ区中央やや西寄りで検出された土塊で、長径2.3m、短径1.65mのやや台形気味の長楕円

形の平面プランである。検出面のレベル高は3.15m付近で、遺構の最深部は検出面から38cmである。断面形はやや傾斜の緩い逆台形をしており、西側がやや凹む。埋土は2層が確認され、それぞれ特徴的な土質ではなく、またやや中央に向かって凹む堆積である。

遺物は西側のやや凹んだ部分の底から5~10cm程浮いた位置で検出された。ほぼ完形の壺と砲弾形をした土器で、2層中に包含されていた。壺についてはクシ状工具による直線文、砲弾形の土器についてはヘラ状工具による直線文が施されている。

#### P 133 (図65, 66)

Ⅲ区南西隅や北寄りに位置し、西側が調査区外に出るが長楕円形の平面プランが想定でき、長径2.7m、短径1.3m以上の数値が推定できる。検出面のレベル高は3.1m付近で、遺構の最深部は検出面から65~70cmである。埋土は8層が確認されており、1層以外



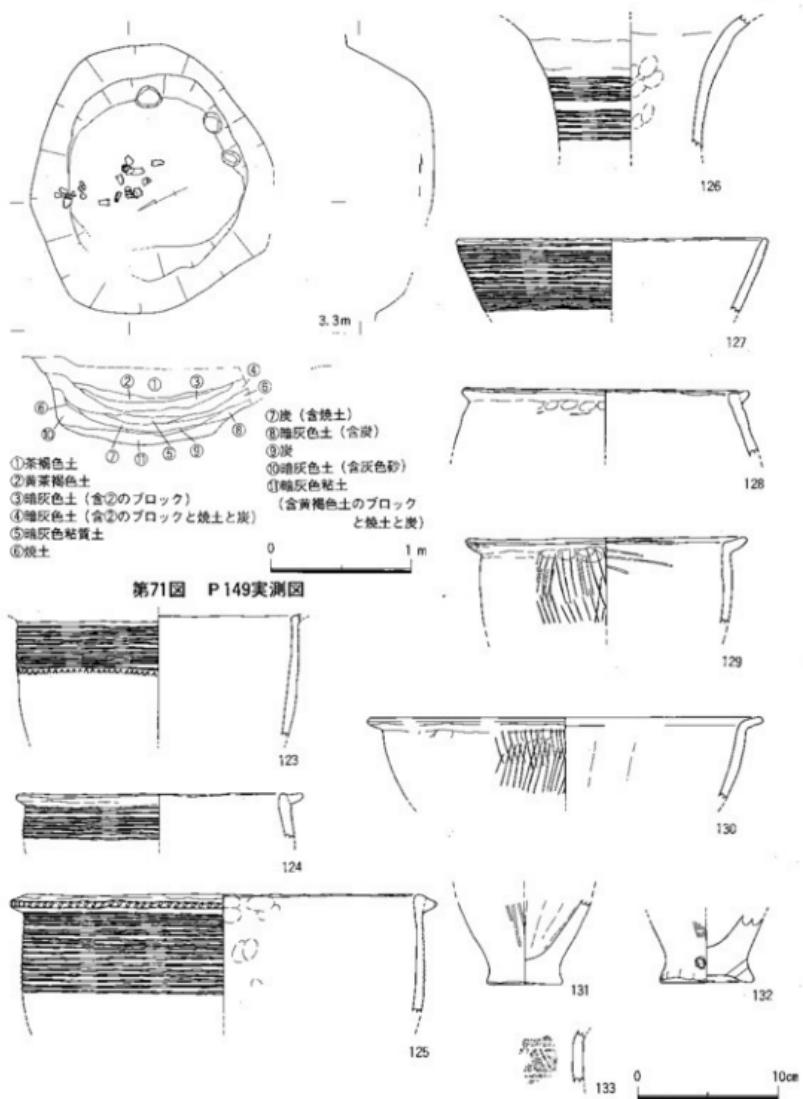
は中央が厚く縁辺が薄い堆積をしており自然流入による堆積を示している。1層は多量に炭が入り人為的に埋められた状況を示す土層であることや、底面から20~25cm上がった部分に傾斜変換点があり、面的には長さ1.0m、幅0.8mの長方形プランとなる部分と一致することや、底部がほぼ平坦な面をなすことなどP 86の下層付近と似ており、当遺構は墓であると推定できる。また底面と壁面との境付近に径10cm、深さ5~10cmの小穴が検出され、埋土の状況などから本遺構を埋める以前に設定されていたことが推定できる。

遺物は95と103が1層の上面で検出され、その他はそれ以上の自然流入土の中から検出された。よって本遺構の時期については前期の末に上限が求められる。

#### P 131, P 134, P 135, P 138, P 140, P 141 (図67, 68)

P 134はⅢ区東端中央付近で、P 131, P 135, P 140, P 141はⅢ区西側中央付近で切り合って検出された土壤である。検出面のレベル高は3.3m付近である。P 134は東半部はP 128により切られている。検出された土器は前期のものだけである。

P 131, P 135, P 138, P 140, P 141は遺構の切り合いから、P 140⇒P 138, P 141⇒P 135, P 131の順番が考えられ、包含されている土器からP 131, P 141は中期、その他は前期の時期が推定できる。



遺構の平面形はP 131が長径2.0m、短径1.2mの長楕円形で、他は切り合いや遺構の殆どが

調査区外に出るため明確ではない。

P146 (図69、70)

Ⅲ区南西隅に位置し遺構上面の殆どは近世の造構によって削平されており、僅かに底1層だけが残っていた。残存部で一辺1mの隅丸方形のプランで、遺構検出面のレベル高は2.85m付近、最深部は検出面から25cmである。断面形は円弧状をしており、埋土は暗緑黒灰色粘質土で、上面遺構の影響をかなり受けている。遺物は遺構のほぼ中央部の底から10cm程浮いた状態で完形の無頸壺が出土した。また他に壺口縁部の破片が1点埋土中に包含されていた。



134



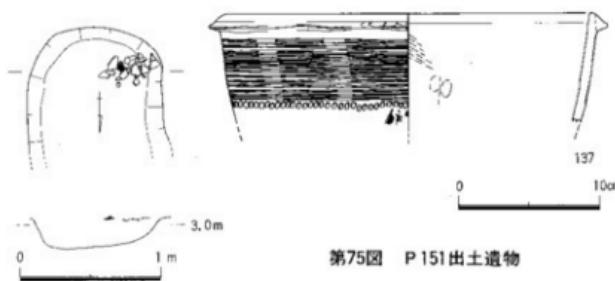
135



136

第73図 P149出土遺物(2)

0 10cm



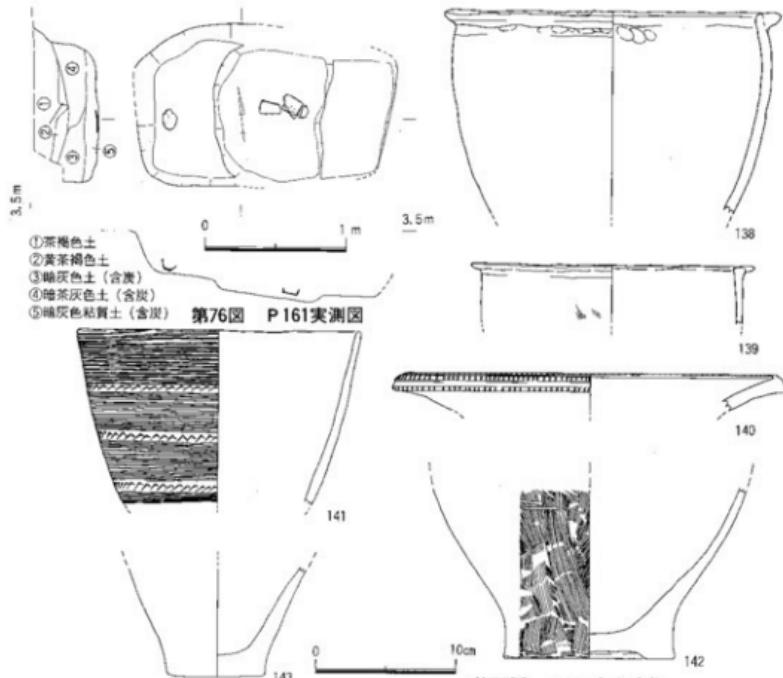
137

第74図 P151実測図

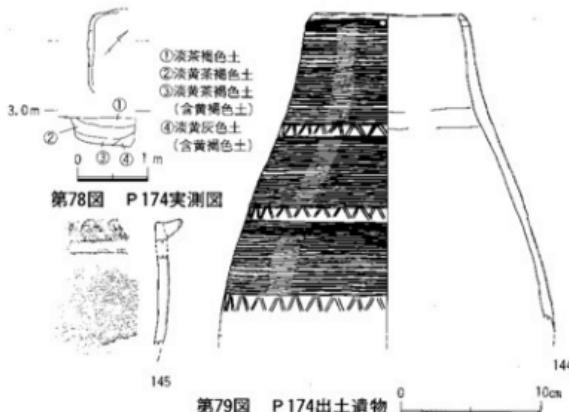
0 1m 3.0m

P149 (図71、72、73)

Ⅲ区北やや西寄りに位置し、長径1.9m、短径1.7mで長楕円形の平面形をなす。検出面のレベル高は3.2m付近で、遺構の最深部は検出面から55cmである。断面形は逆台形で底は長さ



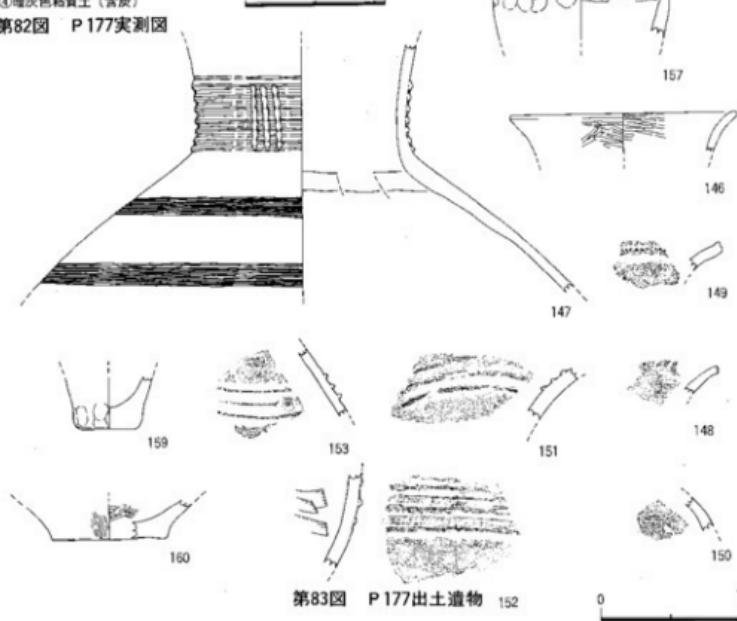
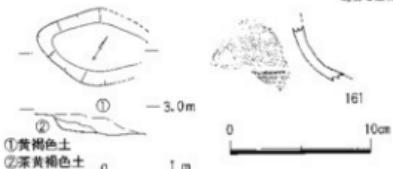
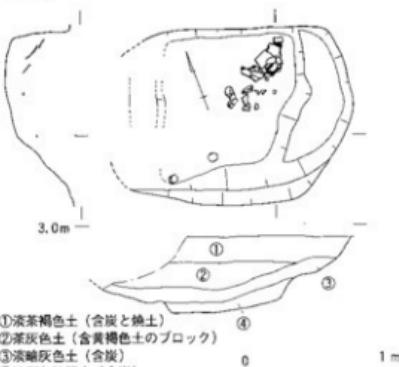
第77図 P161出土遺物



1.05m、幅1.2mの方形に近いプランで平坦面となっている。北東部の底から3つの小ピットが検出され、それぞれ5cm~10cm程の深さである。埋土は11層が確認され、基本的に自然流入土と推定される1、2層の上層と、人為的な埋土の3層以下の中層に分けられる。3層以下はさらに炭と焼土や土質の違いから2~4層の上部と5~11層の下部に分けられ、これらの状況はP86と似ており、当遺構も埋葬に関係した土壤の可能性

が推定される。

遺物は全て下層下部中の底から10cm程浮いた位置で検出された。全て破片で、遺構中央に落ち込む様な堆積をしており、当遺構を埋める過程に混入した可能性が考えられる。



## P151 (図74、75)

Ⅲ区中央東寄りに位置し、北半は上面の遺構により切られており全形は明確ではない。残存部から幅1.0m、長さ1m以上の数値が得られる。検出面のレベル高は2.9m付近で、遺構の最深部は検出面から20cmである。遺物は甕の破片が南東隅、底から15cm程浮いた位置で検出された。

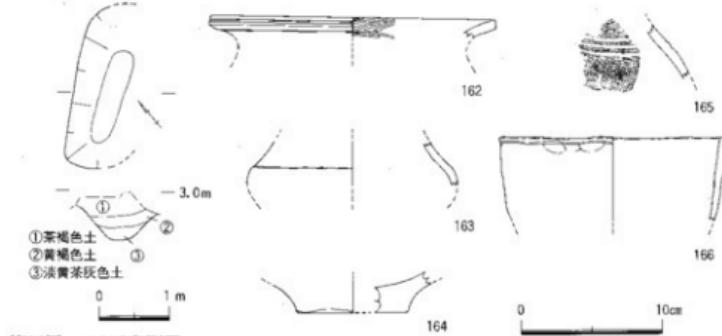
## P161 (図76、77)

Ⅲ区北端に位置し、残存部から長さ1.8m、幅1.15mの長方形のプランが想定できる。横断面形は箱形で、縦断面形は中央部が一辺0.95m、深さ5cm程の方形に凹み、西側に段を作り出している。底は西から東へ緩やかに傾斜している。遺構検出面のレベル高は3.5m付近で、遺構最深部は検出面から50cmである。埋土は5層が確認され、若干炭が混じる層があるものの特徴的な上層は観察されない。ただ遺構の平面形や断面形が土壤墓と推定されるP177とよく似ており、当遺構も埋葬に関係したものである可能性が考えられる。

遺物は全て5層から検出され、特に142、143の底部と、141の鉢は底直上で検出された。

## P174 (図78、79)

Ⅲ区北東コーナー付近に位置し、殆どが調査区外に出るため全形は明らかではない。断面形は箱形である。検出面のレベル高は2.9m付近で、遺構の最深部は検出面から50cmである。埋土は4層が確認され、3層と4層についてはそれぞれ黄褐色土がブロック状に入り、人為的な埋没も推定できる。遺物は2層中で検出された。



第84図 P186実測図



第85図 P186出土遺物

P176 (図80, 81)

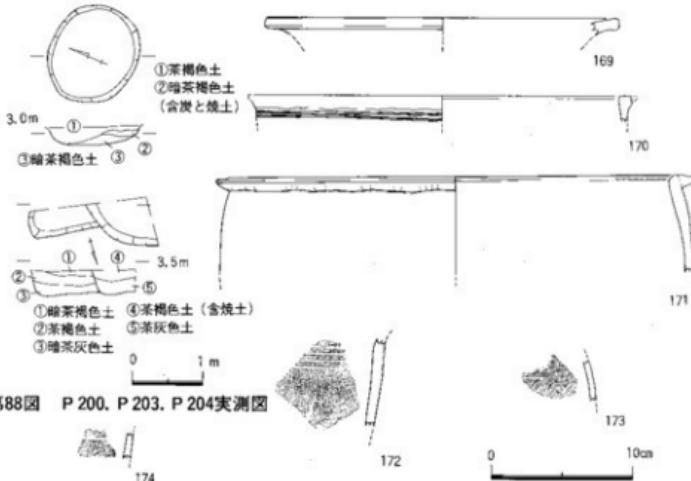
Ⅲ区北東コーナー付近に位置する。東側はP174によって切られているため明瞭ではないが、残存部から長径0.9m、短径0.55mの菱形気味の長指円形のプランが推定される。遺構の検出面は2.95m付近で、埋土は2層確認された。遺物は埋土中から壺の肩部付近の破片が検出された。

P177 (図82, 83)

Ⅲ区北東に位置し、西側が若干切られているが、残存部から長さ1.9m、幅1.3mの隅丸長方形のプランで、底は西に向かって若干傾斜している。横断面形は箱形で、南側がややなだらかな傾斜となっている。縦断面形は底部中央付近が一辻1m、深さ0.1m程、方形に凹んで、両側に段を作り出している。遺構検出面のレベル高は2.9m付近で、最深部は検出面から55cmである。埋土は4層が確認され、そのうち2層は黄褐色土が多量にブロック状に入るなど、埋められた様な状況を示しており、当遺構中で検出された土器は全てこの層中からである。3層、4層も炭が多量に混じる等自然流入土とは異なる様相で、特に3層については歯が検出され、それとともに纖維状の細かな炭片が多量に含まれることから、埋葬を行った面を示す土層であることが推定できる。



第86図 P198実測図 第87図 P198出土遺物



第88図 P200, P203, P204実測図

第89図 P200, P203, P204出土遺物

遺物は全て破片で検出された状況から、3層の土で埋める際に遺構の北東部付近から流入、或いは投入された可能性が考えられる。

#### P 186 (図84, 85)

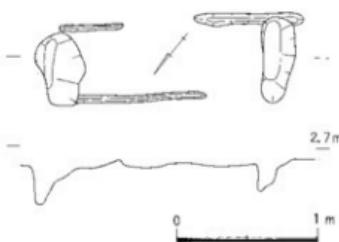
Ⅲ区北東コーナー付近に位置し、東側は一部調査区外に出ており、北東部分はP 174によつて切られており、全体のプランは明確ではない。

が、残存している部分や底の形状から長さ1.2m、幅0.5m程の隅丸長方形が推定される。遺構の検出面は2.9m付近で、最深部は検出面から35cmで、断面形は逆台形である。埋土は3層が確認された。遺物は埋土中から出土し、土器の他にサスカイトの剝片が2点検出された。

#### P 198 (図86, 87)

Ⅲ区南東付近に位置し、遺構南側は上面の遺構により削平されており、東側については調査区外に出るため殆ど全形は分からず。検出面のレベル高は2.9m付近で、最深部は検出面から40cmである。断面形は箱形で、埋土は6層が確認された。6層については底の一段窪んだ部分の埋土であり、しかも若干盛り上がりが見られ、他の層とは異なる。また底部両側に2条の浅い小溝があり、これらがあたかも木棺痕跡の様にも見えるが、遺構の殆どが削平されているため明確ではない。

遺物は埋土中から壺の小片が2点検出された。



第91図 P 210実測図

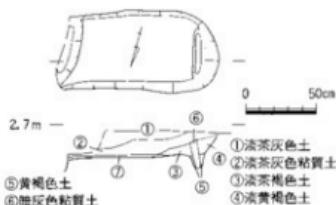
#### P 200, P 203, P 204 (図88, 89)

P 200はⅡ区南側に位置し、径1.4mのほぼ円形のプランである。断面形はカマボコ形で、検出面のレベル高は2.9m付近で最深部は検出面から15cmである。埋土は3層が確認され、それぞれよく似た土層である。遺物は埋土中から壺の口縁端部と壺の口縁部付近の小片が検出された。

P 203, P 204はⅡ区の中央付近で、両者とも半分程が排水管の下であるため全形は明確ではない。遺構の検出面は3.4m付近で、埋土はP 203が3層、P 204が2層確認された。遺物は全て埋土中から検出され、P 203からはクシ描き文の施された壺の胴部片と壺片、P 204からは壺片が検出された。

#### P 209 (図90)

I区北側、地形的に見ると微高地端部付近に位置する。東側は調査区外に出るが残存部から長さ約1.2m、幅0.6mの隅丸長方形のプランが想定できる。検出面のレベル高は2.65m付近で、



第90図 P 209実測図

最深部は検出面から26cmである。埋土は7層が確認され1~3層は、お互い非常に似た土層である。6層は暗灰色粘質土、7層は灰色粘質土で、遺構に於ける在り方から、6層が小口板、7層が底板、即ち木棺痕跡と考えられる。また4層、5層はベースに近く、木棺固定のために埋められた土であると考えられる。

平面的に見ると、小口板の堀り方は東側が長

さ50cm、幅は調査区外に出るため不明、西側は長さ35cm、幅10cmである。埋葬部と考えられる小口板間の長さは堀り方のほぼ中央を基点にすると80cmで、幅50cmである。

時期については遺物が全く検出されなかったが、埋土、検出面のレベル、周囲の遺構の在り方などの非常に消極的な根拠から一応前期から中期の間に考えておきたい。

#### P210 (図91)

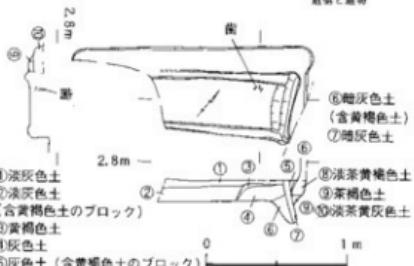
I 区北側、P209の西に位置する。微高地端部に非常に近いこともあり上面は水田造成等により殆ど削平されている。残存している小口板を設定した堀り方と思われるビットや側板と思われる小溝等から、木棺を伴う土塚墓の上面堀り方の削平されたものと推定できる。遺構検出面は2.6m付近で、P209の棺底面より10cm程下がった位置である。もっとも、検出面には凹凸が認められ、本来の棺底面は現検出面より若干高い位置にあった可能性も考えられる。

平面的に見ると、小口板の堀り方は東側が長さ40cm、幅は最も広い所で30cm、西側は長さ60cm、幅24cmである。小口板間の長さは、堀り方のほぼ中央を基点にすると約150cm、幅は50cmである。

時期については遺物が全く検出されなかったが、P209と長軸方向が非常に近似していることから本遺構も前期から中期の間に考えておきたい。

#### P216 (図92, 93)

I 区北側でP209、P206の南側に位置する。西側はP86により削平されているが、残存部分から長さ1.65m、幅65cmの隅丸長方形のプランが想定できる。遺構断面や遺構底面から木棺痕跡が認められ、小口板を固定する堀り方を握る構造であることや、長軸方向がP209、P210とほぼ一致することから、当遺構とP209、P210は同じ墓群を成すことが推定される。



第92図 P216実測図



第93図 P216出土遺物



第94図 P219実測図

埋土は9層が確認され、1～4層は木棺内部の流入土で、4層からは歯5本が検出された。5、6、8、9層は他の層の土と比べて細かく堅緻であることから、木棺と墓壙の間を埋めて木棺を固定するために意識的に入れられた土であることが推定できる。遺構の検出面は2.7m付近で、木棺痕跡の断面形は棺内に向いて若干傾斜している。

小口板の堀り方は長さ52cm、幅15cmで側板痕跡の溝は幅5～8cmである。残存している小口板の堀り方端部から墓壙までの距離は10cmなので反対側も同数であると仮定すると、小口板間、即ち埋葬面は長さ1.3m、幅40cmと推定できる。

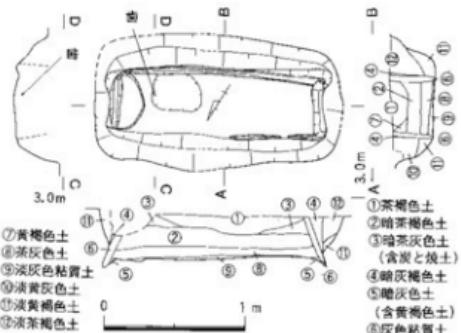
遺物は埋土中から先端の欠損したサメカイト製の石鏃が1点検出されたが、土器は全く検出されなかった。しかし前期末に推定されるP 86に切られていることから、当遺構の時期は前期末以前に推定され、P 209、P 210も同様の時期が推定できる。

#### P 219 (図94)

II区北側でP 220の南東コーナーを切っている。長さ1.4m、幅50cmの長方形のプランで、北西コーナー付近で底から約10cm浮いた位置に微量の赤色顔料の付着が認められる歯が検出された。遺構検出面のレベル高は2.9m付近で、遺構の最深部は検出面から20cmである。断面形は逆台形で、底は平坦である。木棺痕跡等は確認されなかった。



第94図 P 219実測図

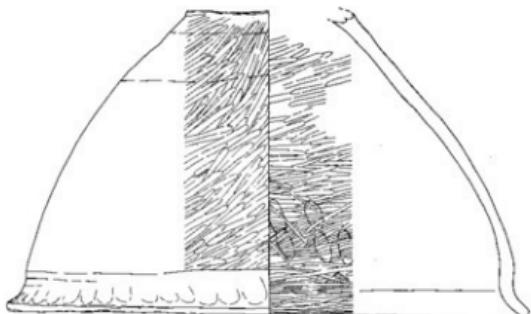


第95図 P 220実測図

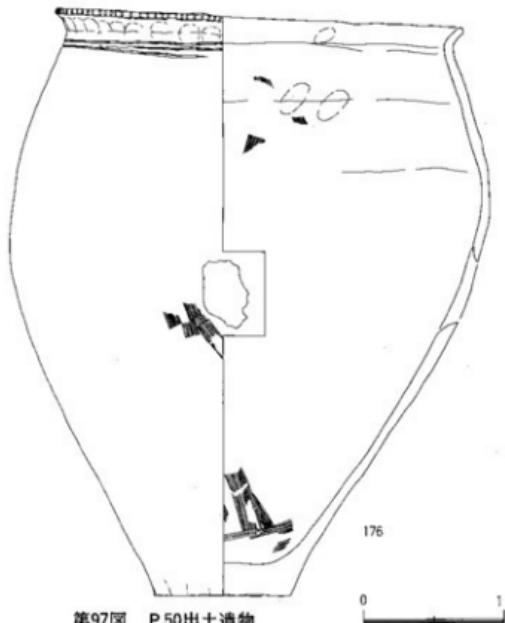
時期については土器等が全く検出されず明確ではないが、P 220を切っていることや、検出面が後期の遺構よりも低いことなどから一応前期～中期の可能性が推定できる。

#### P 220 (図95)

II区北端、前期の土器棺であるP 50、P 51のやや南に位置する。長さ1.76m、幅94cmの隅丸長方形のプランで、木棺痕跡や歯が確認された。遺構の検出面は2.8m付近で、検出当初は墓壙のプランよりも棺痕跡の方が明瞭



175



176

0 1m

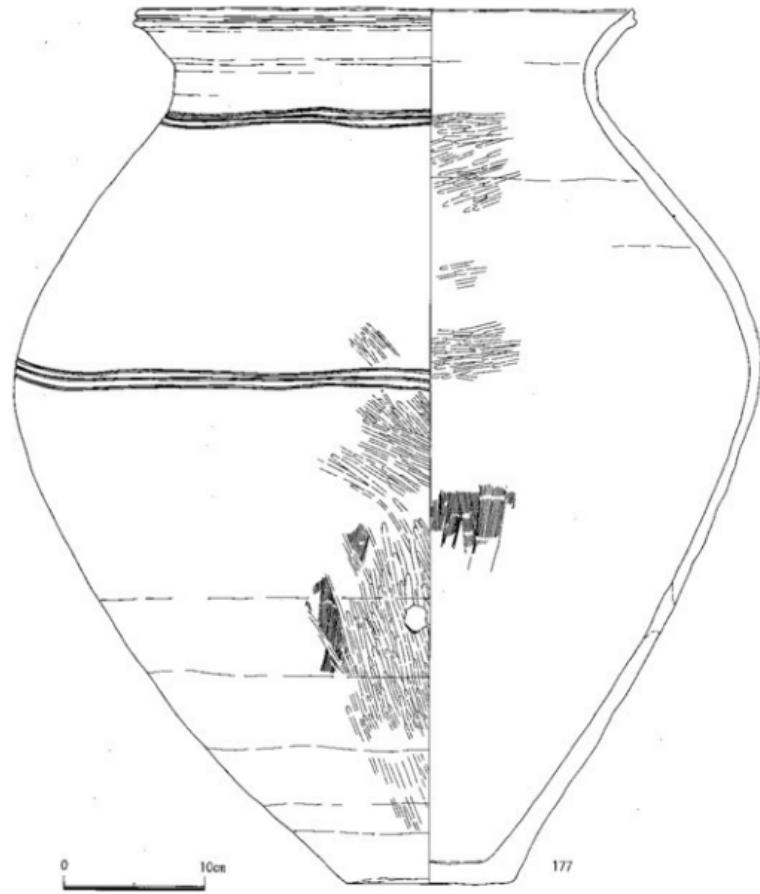
第97図 P 50出土遺物

であった。墓壙の断面形はほぼ逆台形で、側面は傾斜中ほどで若干角度を変えており、底はほぼ平らである。ただ歯直下の底付近は径30cm、深さ2cm程若干窪んでいる。埋土は12層が確認され、6層は小口板、側板の痕跡と考えられる。また9層についても粘質土であることなどから底板の可能性が推定できる。4、5、10、11、12層は墓壙と木棺の間を埋めて固定するためと考えられ、1、2、3、8層は棺内埋積土で、棺を埋めた土か棺内流入土かの判別は明確ではない。

また縦断面を見ると小口板が底に対して60°～70°傾斜しており、それが小口板の掘り方も同方向であることから埋葬の当初から意識的に傾斜させていた可能性が強い。その理由については明確ではないが、棺蓋の大きさとの関係が考えられる。

小口板の掘り方は東側が長さ35cm、幅8cm、西側が長さ42cm、幅8cmで、側板痕跡の溝は幅5～9cmである。小口板間、即ち埋葬部は長さ1.4m、幅45cmに推定できる。

遺物は棺内埋積土中から、器種等は不明だが前期っぽい胎土の土器小片2点が検出された。時期についてはそのことと、検出面のレベルという消極的な根拠から前期の可能性を考えておき

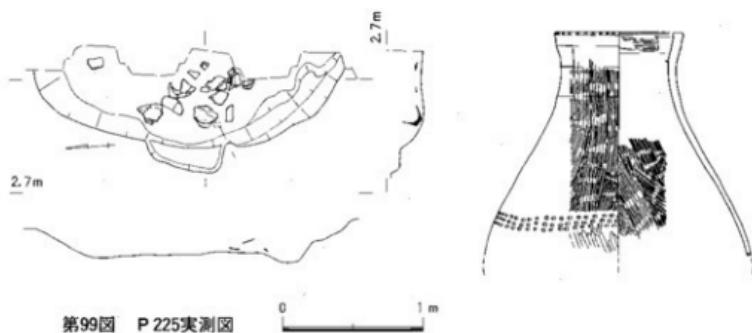


第98図 P51出土遺物

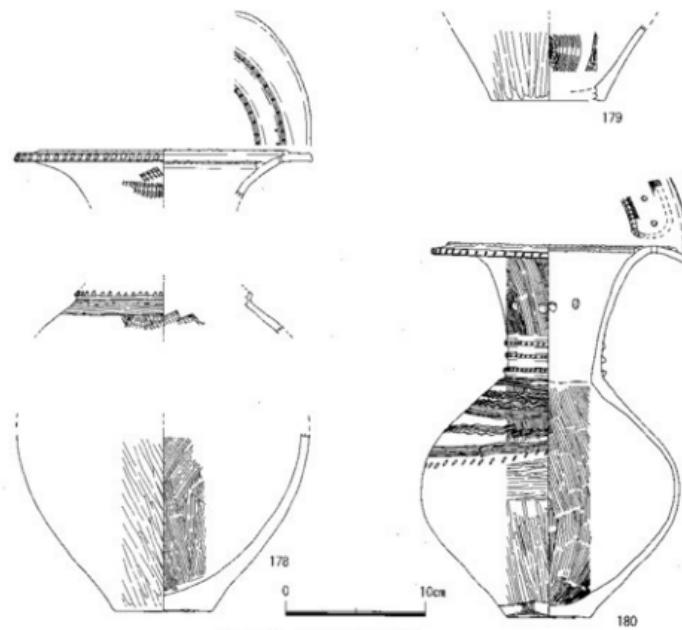
たい。

#### P50 (図96, 97)

I区南西付近に位置する。長径50cm、短径40cmの長軸円形のプランで、遺構の検出面のレベル高は3.1m付近で、底面は検出面から33cmである。堀り方いっぱいに、甕に鉢を被せて蓋にした土器棺が検出された。土器棺はほぼ南北方向に長軸を向け、南から北へ45°程傾けており、甕はほぼ完形で、鉢は後の削平のために上面半分が欠損している。また甕胴部下半に長径4cm、短径2.2cmの焼成後穿孔があり、穿孔部分を堀り方の底に向けてあった。堀り方の断面形は東

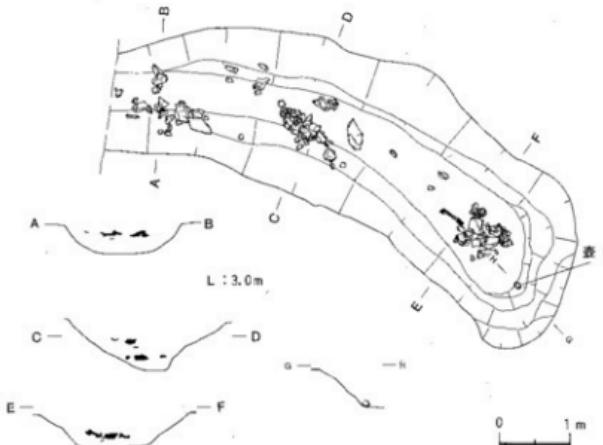


第99図 P 225実測図



第100図 P 225出土遺物

西方向ではほぼU字形で、南北方向については壺棺の形状に合わせて掘り方上面から南方向に抉り、嘴状の断面形となっている。埋土は棺内も含めて3層が確認されたが、それぞれ茶色系の土層で包含層と似ている。棺内埋積土からは若干炭が検出された他は人骨、歯等は確認出来なかった。埋葬空間である棺内は長径45cm、短径29cmで、乳幼児棺として使用されたものと推



第101図 满17実測図

方いっぱいに、土器棺と推定される壺が検出された。壺は口縁部を南東、底部を北西方向に向けて横倒しにした状態で、胴部上半と口縁部の殆どが欠損している。欠損していることについては後の削平によるものか、元来から打ち欠いていたものか明確ではないが、比較的壺の口縁部径が大きいことや一部とはいえ口縁部が残っていることから前者の可能性を考えておきたい。蓋については遺構内からそれに当たる土器や土器片などが見付かっておらず、あったとしても木蓋の様なものではなかったかと推測される。

また P 50 の壺と同様に胴部下半に径 2 cm の焼成後穿孔があり、穿孔部分を堀り方底に向けていた。堀り方の断面形は U 字形で、壺の形状に沿った形である。埋土は暗茶褐色土 1 層であった。棺内埋積土内からは人骨、歯等は確認出来なかった。埋葬空間である棺内は長径 55cm、長径 50cm で、P 50 と同様乳幼児棺として使用されたものと推定される。

#### P 225 (図99、100)

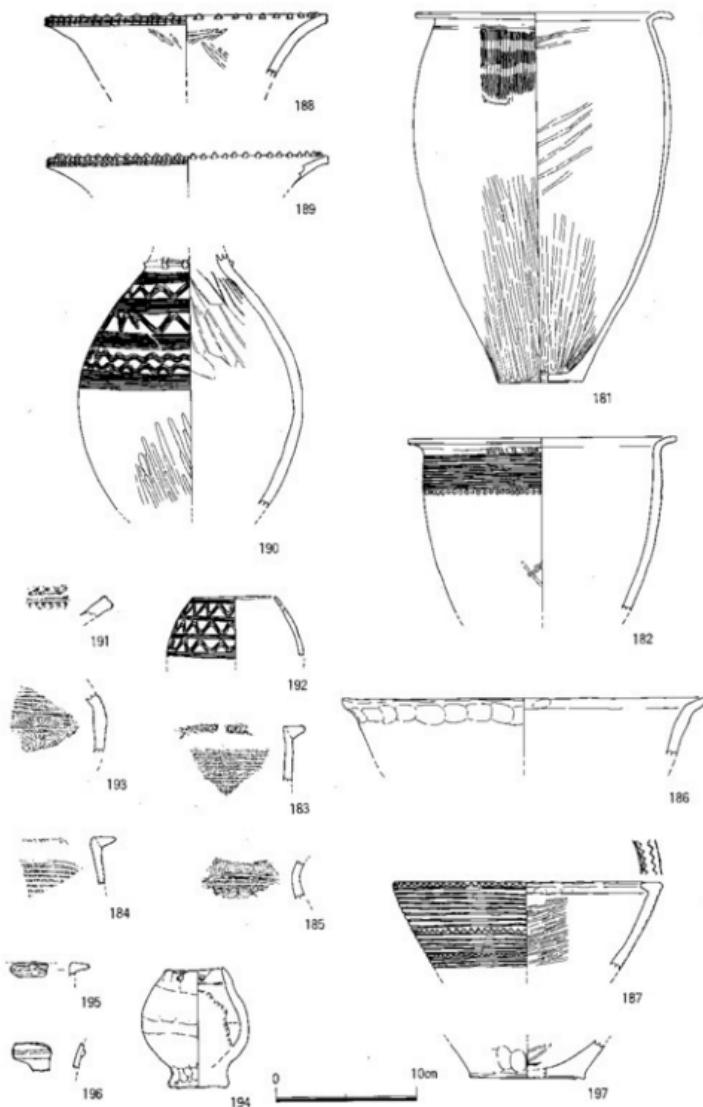
I 区中央やや東側に位置する。殆どが調査区外に出るために全形は明確ではないが、残存部から長径 2.2m の長楕円形に幅 15cm、長さ 50cm の方形の張り出しが付くプランが推定できる。遺構検出面のレベル高は 2.7m 付近で、底面は検出面から 20cm である。断面形は傾斜の緩やかな逆台形で、底面は若干凹凸が目立つ。遺物は遺構中央底面付近に集中して検出された。また底面付近の埋土に染み込んだ赤色顔料も径 5cm 程の範囲で確認された。

遺物のうち 180 は口縁部が部分的に欠損しているもののほぼ完形で、他の 2 個体についても破片が比較的大きいことから残りの部分が調査区外に含まれている可能性が推定でき、当遺構

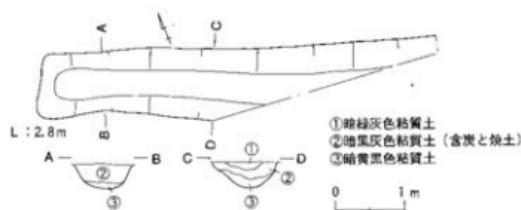
定される。

#### P 51 (図96、98)

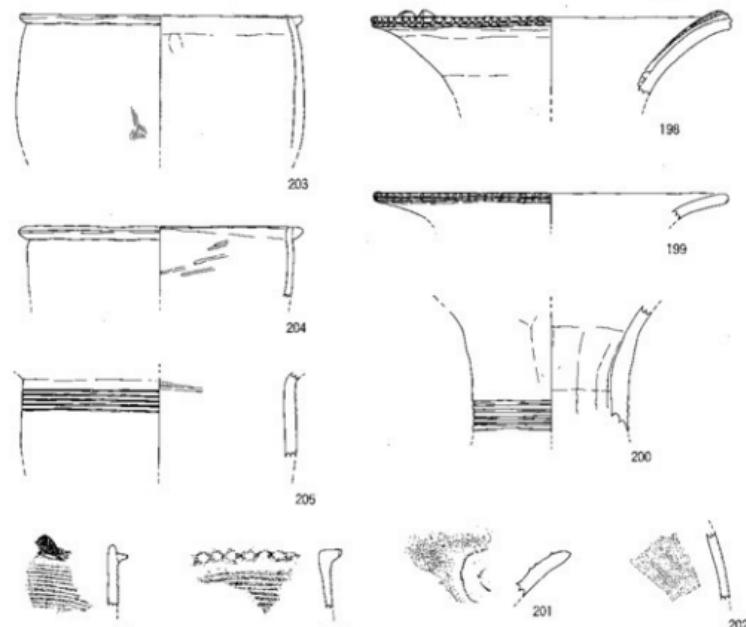
I 区南東付近で、P 50 のほぼ 2 m 東に位置する。南側が若干削平されているが、一辺 55cm 程の隅丸方形のプランに推定できる。遺構検出面のレベル高は 3.0m 付近で、底面は検出面から 40cm である。堀り



第102図 满17出土遺物



第103図 溝18実測図



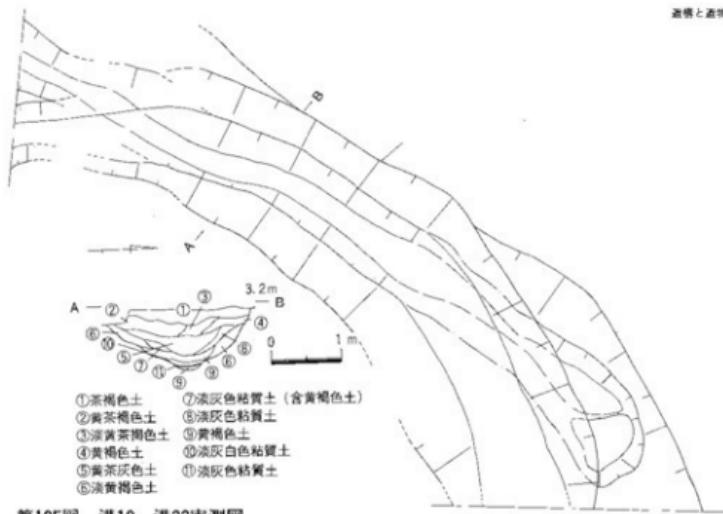
第104図 溝18出土遺物

0 10cm

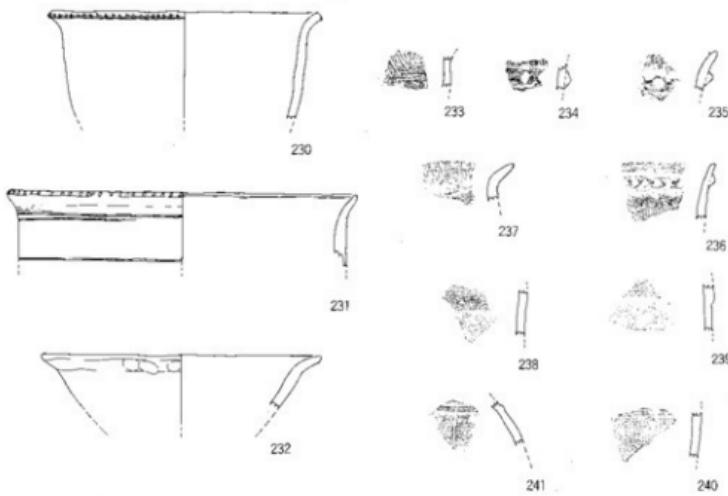
には少なくとも完形の煮が3個体底面に置かれていたと考えられる。

#### 溝17 (図101, 102)

Ⅲ区北東から南へ円弧状に西方向へ曲がりながら調査区中央やや南寄りで急に立ち上がって終わる溝状遺構である。幅は2.2m~1.4mで北の方が若干狭くなる。遺構検出面のレベル高は2.8m~3.2m付近で、底面のレベル高は北側で2.6m、南側で2.4mである。断面形は部分的に

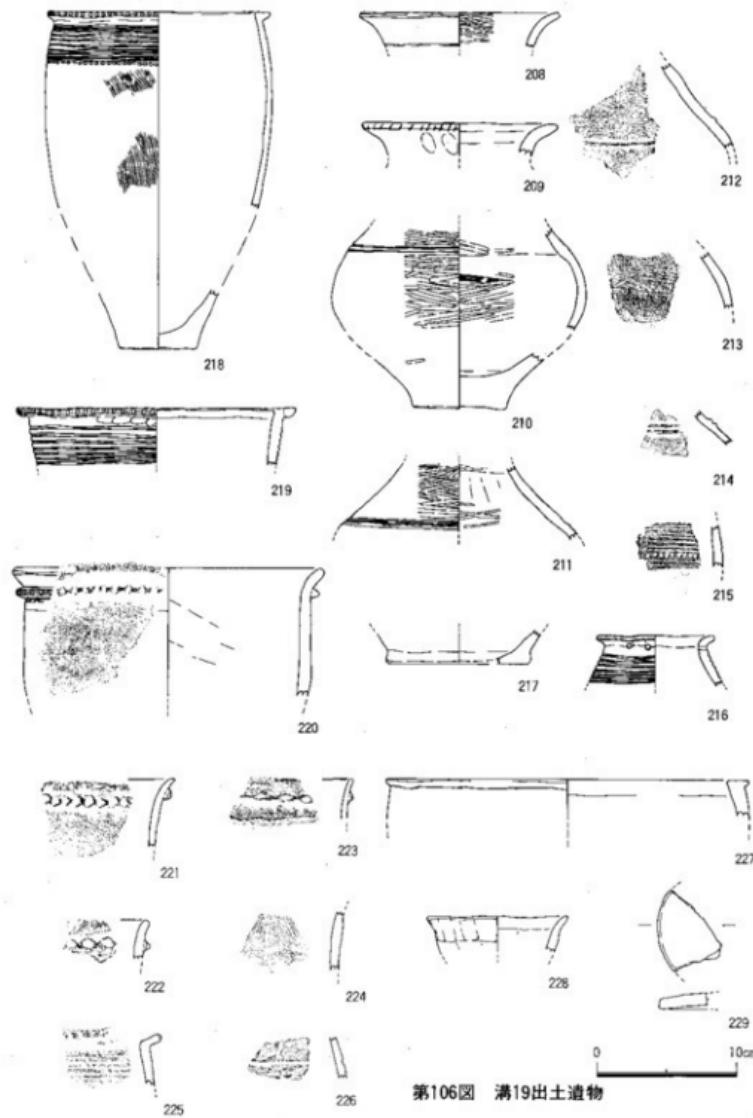


第105図 溝19. 溝22実測図



第107図 溝22出土遺物

V字状になるものの、全体的にはU字状である。遺物は土器、角礫、木片があり、それぞれが混在し、しかも3群程に纏まった様な状態で検出された。ただ土器は群を越えて接合すること



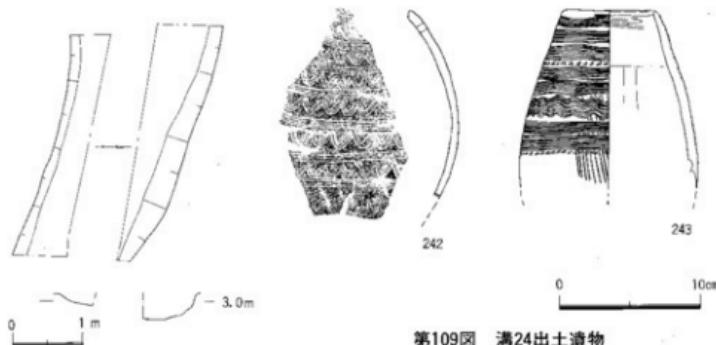
第106図 满19出土遺物

から、これらの群には時期差はないものと思われる。従って、遺物と遺構底面のレベルから、北から南への土砂の堆積、即ち当時の水流方向が推定できる。

遺物のうち194は完形の小壺で、溝南端の底面と斜面の傾斜変換点付近で口縁部を上方に向け、しかも中身にはベンガラの詰まつたままの状態で検出された。ベンガラは図の斜線で表した部分であるが、土等に染み込んでいて本来の量よりも見掛け上多くなっているものと思われる。他の土器は181の壺がほぼ完形で他は全て破片である。

#### 溝18（図103、104）

Ⅲ区中央やや南寄りに位置し、調査区を西北方向から東南方向に横切る溝状遺構である。幅40cm~50cmで西から東へ低くなる。断面形はU字形で、埋土は2層~3層確認されたが、上面の遺構の影響をかなり受けしており本来の土質とはかなり異なる様である。遺物は全て破片で1~3層それぞれに包含されていた。



第108図 溝24実測図

第109図 溝24出土遺物

#### 溝19、溝22（図105、106、107）

Ⅲ区北半の東側から南にかけて円弧状のプランで検出されたのが溝19で、それと殆ど重なりながら北から西南方向へ若干蛇行気味のプランで検出されたのが溝22である。両溝とも南半は近世の遺構により完全に削平されている。検出時の切り合い関係から溝22⇒溝19の順が推定できる。

溝19は幅0.5m~2m、深さ65cmで断面形はU字形である。プランは全掘していないため明確ではないが、P198を中心に円弧状に巡っている様でもある。溝底のレベル高は2.5m付近で、調査区内に関する限り溝底のレベルはほぼ一定である。埋土は8層が確認され、断面図のうち1層~8層がそれに当たる。溝の底部付近は溝の断面形に平行して順序よく堆積しているが、溝中位以上はベースに近い土がブロック状に堆積しており人為的に埋められた可能性が推定される。

溝22は調査区内に於いては溝19によって殆ど削平されており、プランは明確ではなく残存部

から幅1.8m以上深さ90cmで、断面形は底から15cm程で傾斜変換点があるものの、全体的にはV字形である。溝底のレベル高は2.25m付近で南側の方が5cm程高く、可能性としては南から北への水流方向が考えられるが、北端部で若干レベルが上がっており断定は出来ない。埋土は4層が確認され、断面図のうち9層～12層がそれに当たる。溝の断面形に平行して堆積しており、自然流入土による埋没が推定できる。

遺物は殆どが破片で、溝19からは凸帯文土器、前期中頃、前期末の3種、溝22は凸帯文土器、前期中頃の2種が見られ、両溝の切り合いから溝19は前期末の時期、溝22は前期中頃の時期に埋まつた可能性が考えられる。

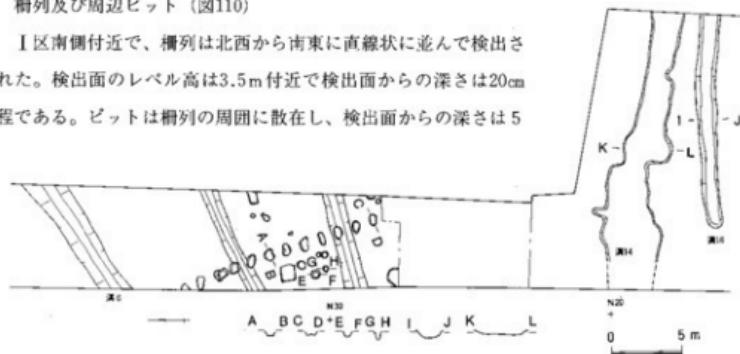
#### 溝24（図108、109）

II区中央に位置し、殆どが既設の排水管の下にくるため、溝の南端と北端のみしか検出できなかった。幅1.8mで造構の検出面は2.85m付近で最深部のレベル高は2.65mでやや南側に内湾するプランである。遺物は全て破片で、団化できたのは2点だけであった。造構のプランの方向や底面のレベル高、埋土に含まれる土器の時期等が溝17に近いことから、溝24と溝17が同じ造構である可能性も考えられる。

### III. 古代・中世

#### 柵列及び周辺ピット（図110）

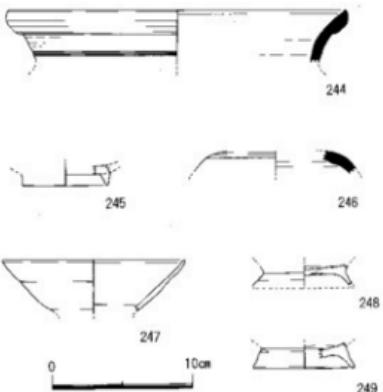
I区南側付近で、柵列は北西から南東に直線状に並んで検出された。検出面のレベル高は3.5m付近で検出面からの深さは20cm程である。ピットは柵列の周間に散在し、検出面からの深さは5



第110図 古代・中世遺構図

～30cmで、殆どが5cm程の深さのものである。調査区内ではピットの規則的な配置等は確認出来なかった。

柵列、ピットとも遺物は殆どなく、ただ中世土師質土器と思われる、小片が若干検出された。



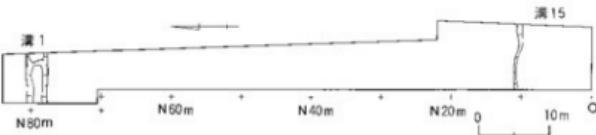
第111図 溝6、溝14、溝16出土遺物

3本の溝はそれぞれ断面形が逆台形で傾斜角も急である。検出面のレベル高は3.3m付近で、深さは50~55cmである。遺物は溝6から古墳時代後期の須恵器の壺片が検出された。

#### IV. 近世

##### 溝1 (図112、113)

I区北端に位置し、調査区内に開する限り東西方向である。幅は2.7mで断面形はほぼ台



第112図 近世遺構図

形である。遺構の検出面は3.3m付近で、最深部は検出面から1mである。埋土は砂層と粘土層の互層と最下部には有機質混じりの粘土層で、一定の滌水の後流水によって埋没した過程が推定できる。東側が20cm程高くなって段状になっており、東から西への流水方向も推定できるが詳細は不明である。遺物は埋土下半から17世紀後半の近世陶磁器片と羽釜片が検出された。

##### 溝15 (図112、113)

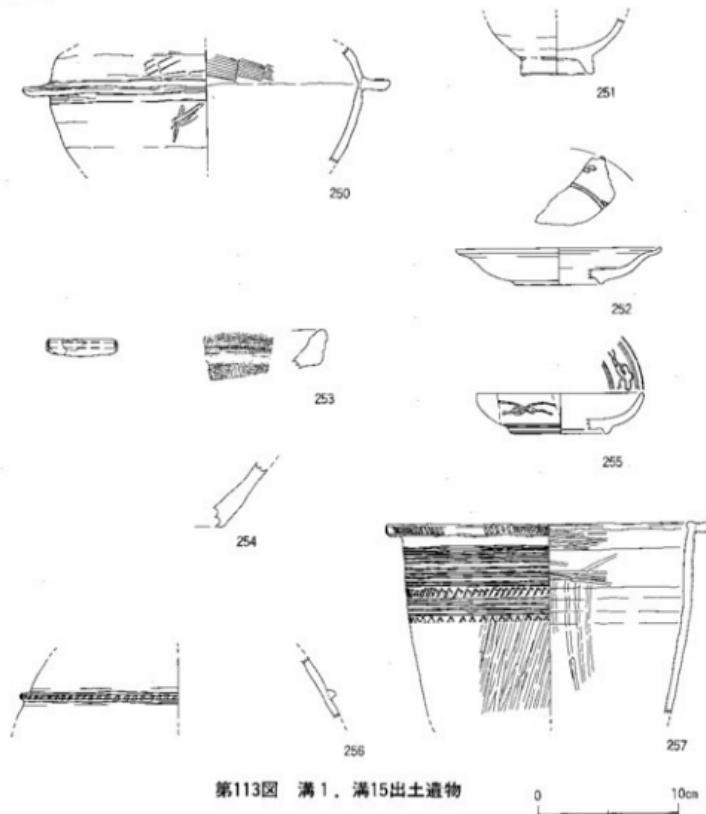
III区南端に位置し、III区のほぼ半分が当遺構で占められている。一応埋土中に流水を思わせる砂などの堆積から溝としたが詳細は不明である。調査区内でのプランではほぼ東西方向で、恰も百間川の堤防と並行するようでもある。遺物は弥生前期の土器片と18世紀中頃の近世陶磁器片と備前焼きの摺鉢片と土錘が検出された。

##### 溝14、16 (図110、111)

III区北側で検出された溝状遺構である。検出面のレベル高は溝14が3.4m、溝16が3.3m付近で、溝16の方がやや低い位置にある。深さは溝14が検出面から10cm、溝16が20cmである。遺物は溝14から須恵器の壺片と平安時代末頃と思われる椀の底片、溝16から平安時代中頃と思われる椀の小片が検出された。

##### 溝6 (図110、111)

横列の下から検出された平行して走る3本の溝のうち北側に位置するものである。



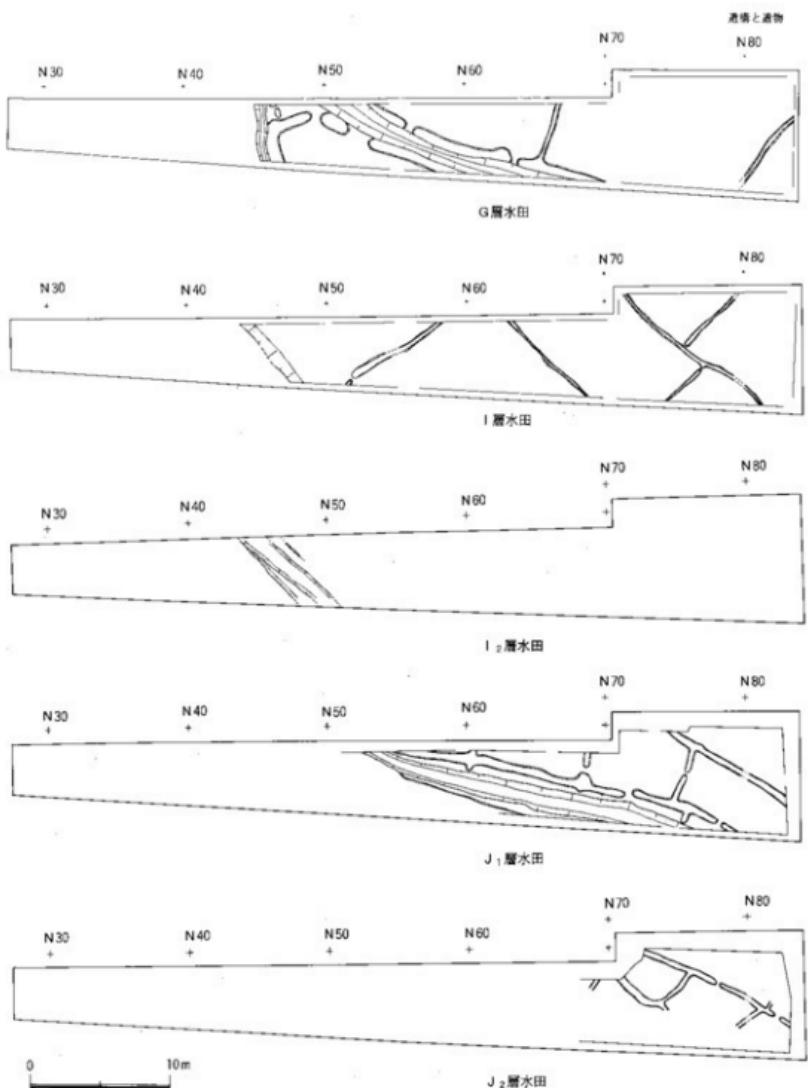
第113図 満1、満15出土遺物

## V. 水田及び他の遺構

調査区内に於いて、水田層と推定される粘質土の堆積が数層確認できたため、一層ずつ面的に精査して、調査区北半の低位部で4面の水田景観をとらえられた。それぞれの水田面のレベル高はG層水田が2.9~3.0m、I<sub>1</sub>層水田が2.6~2.8m、J<sub>1</sub>層水田が2.4~2.5m、J<sub>2</sub>層水田が2.3mである。ただ調査面積が非常に限られているということもあって、さらに再検証していくなければならない点もあるものと考えている。

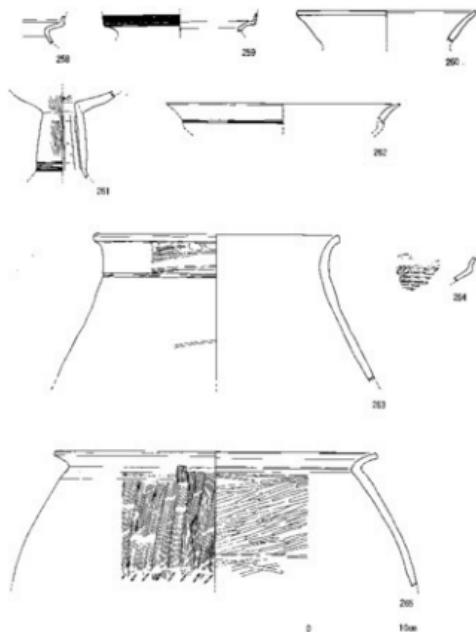
### G層水田 (図114、115)

G層は上下2層に分けられ、両層とも暗灰色の粘質土層で上層はやや青っぽい、下層は上層に比べ粘質が強く茶色系である。まず上層を除去していくと微高地端部では微高地基盤を削っ



第114図 水田実測図

て断面偏平な台形の畦を造り出し、そしてそれに並行して東西方向の溝8が検出された。北側については下層が上層にカマボコ形に若干突出する断面形の畦がケンボ状に検出された。それ



第115図 水田出土遺物

側から畦畔による水田区画を基準にすると 9 cm、6 cm、5 cm という具合に低くなってしまっており、微高地から離れるに従い隣接水田面との比高差が小さくなっていく傾向が見られる。水口は 3ヶ所確認できた。

遺物は洪水砂の上面から壺と壺の小片が、耕土から高坏のやや大きな破片が検出された。

#### I<sub>2</sub>層水田（溝12）（図114、115）

I<sub>1</sub>層水田の下部に淡灰色粘質土の堆積が確認され精査したにもかかわらず、畦畔は検出出来なかった。ただ微高地端部には平行して溝が検出された。断面形は、ほぼ台形で深さは 20 cm である。遺物は弥生前期、突蒂文期の土器片と高坏片が検出された。

#### J<sub>1</sub>層水田（図114、115）

I<sub>2</sub>層水田下部に 5 ~ 6 cm の厚さでやや粒子の細かい暗黒灰色土（O<sub>1</sub>層）が広がっており、その下部に厚さ 10 ~ 12 cm の淡黄灰白色粘質土が J<sub>1</sub>層水田である。畦畔は J<sub>1</sub>層が上部の O<sub>1</sub>層に断面カマボコ形に突出して検出された。それと微高地縁辺と水田面との境に溝13が検出され、溝13に平行して 40 ~ 50 cm の非常に狭い幅の水田区画があり、いわゆる河田として使用されてい

ぞの畦は所々水口状にとぎれている。北端部は近世の溝の影響で分かりにくく、東から北への幅 30 ~ 40 cm の溝が検出されたのみである。

遺物は上層から古墳時代と思われる須恵器小片と下層からは土師器小片、溝 8 からは壺の小片が検出された。これらのことから下部の洪水砂で水田が埋没した後若干経過して形成された水田と推定できる。

#### I<sub>1</sub>層水田（図114、115）

全面が 50 ~ 60 cm の洪水砂で覆われていた水田で、断面カマボコ形の畦畔によって区画されている。水田面のレベル高は南端で 2.8 m、北端で 2.6 m で 20 cm の比高差がある。それは微高地の

た水田の可能性が考えられる。溝13は20cmの深さで断面台形である。

遺物は溝13から弥生中期と推測される土器片が若干検出されたが、図化できたのは壺片のみであった。

#### J<sub>2</sub>層水田 (図114, 115)

J<sub>1</sub>層とJ<sub>2</sub>層はJ<sub>2</sub>層が若干粘質が強いだけで非常に似ている。ただ緩やかな窪み状になっているところに両層の間層として暗黒灰色土(O<sub>2</sub>層)が存在し、その部分にのみ蛙畠が検出された。遺物は全く検出されなかった。

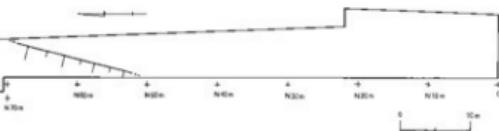
#### 河道 (図116, 117)

I区北半でJ<sub>2</sub>

層下部に形成され

ていて、南岸は微

高地端部から緩や  
かに落ちていき、



第116図 河道実測図

調査区北半になると地表から2.8m掘り下げても基盤と推定される土層には達しなかった。よって検出面のレベル高は2.6~2.7m、幅23m以上という数値のみが得られた。調査面積の限界や砂層と粘土層の互層という脆弱な土層の状況から完掘は困難であり、状態の許す限りトレンチをあけて掘り下げを行った。

埋土は微高地端部でやや複雑な状況を示すが基本的には砂と粘土の互層で、流水と滞水の交互作用により埋没していき最終的に形成された低地部を水田として利用されていった過程が推定できる。

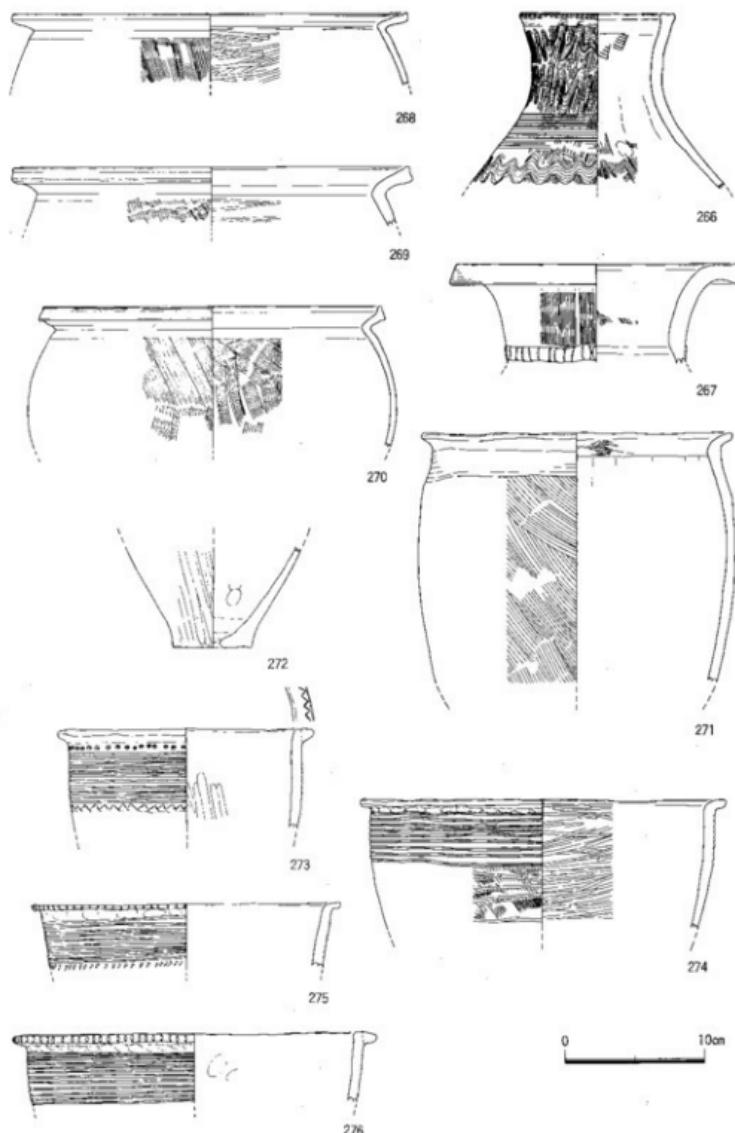
遺物は埋土中全体から検出され、土器の時期とは無関係に混在した状態であった。これにより当調査区内に関する限り、微高地で弥生前~中期の遺構が形成されていた段階では微高地の落ちの部分は水田ではなく、河道或いは低湿地として存在していたことが想定できる。

#### 包含層

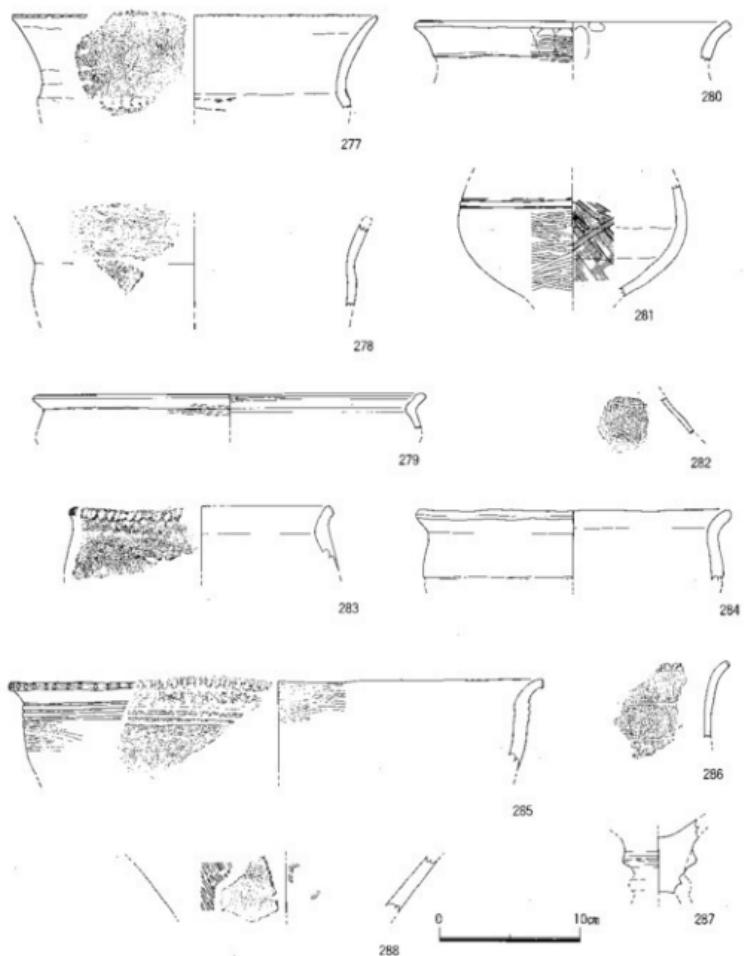
微高地上には弥生前期~後期の遺物を含む包含層が広がっている。遺物の中には比較的形の推定できるものもあり、それから微高地上の遺構等を整理する上で目安となるものを中心抽出出し、図化した。

#### 土器 (図118)

縄文晩期、凸帯文期のものが3点あり、各遺構からも同時期のものが小片だが若干検出されている。

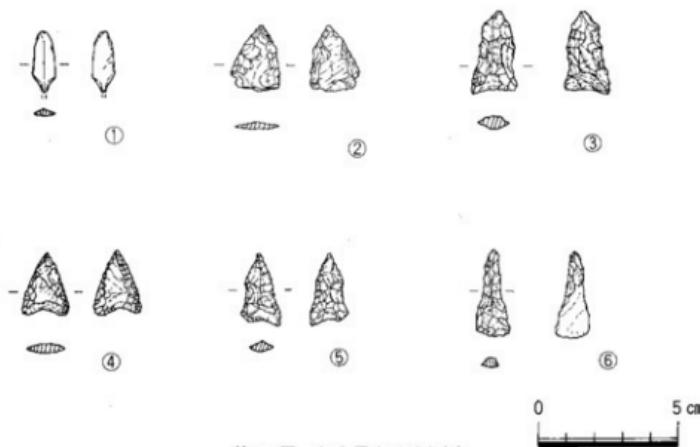


第117図 河道出土遺物



第118図 包含層出土遺物(1)

弥生前期の土器片が包含層中では最も多く、器形のはっきり判るものも少なくない。また微高地端部の斜面で出土した285はⅠ区南端で検出された土器棺の甕に似ており、同様の土器棺が微高地端部の木棺墓の付近に存在した可能性も推定できる。



第119図 包含層出土遺物(2)

中期の土器は高杯の小片がある。他に線刻の認められる壺片があり小片のため詳細は不明だが恐らく後期のものと思われる。

#### 石器、金属器 (図119)

青銅製の鎌が1点検出されており、片面は真ん中に鎌があり反対側ではなく平らである。他は石鎌が殆どで、1点先端に明瞭な使用痕の観察される石錐がある。石鎌は形態的には三角形で、基部が内湾するものとやや先端が尖るものとがある。石材は全てサヌカイト製である。

## VI. 出土土器観察表

器 形	土器 番号	法 量			形態・調整手法の特徴	胎 土	色 調	出土
		口 径	底 径	器 高				
高 坯	1	42.0cm	—	—	口縁端部が被削し平坦面をなす。内面はヨコナデ	含長石 石英粒	淡橙灰 白色	P 29
ミニチュア	2	—	3.0cm	—	内外面ともに指ナデ	含長石 石英粒	淡橙灰 白色	P 29
ミニチュア	3	—	3.0cm	—	内外面ともに指ナデ、内面にしばり痕がある。	含長石 石英粒	淡紫褐 色	P 29
甕	4	16.0cm	—	—	くの字形の口縁で端部に面をもつ。内面は頸部下からヨコ方向のヘラケズリ	含長石 石英粒	淡橙灰 白色	P 29
甕	5	—	5.6cm	—	内面は下から上へのタテヘラケズリ、外表面から焼成後に深1.6cmの穿孔をしている。	含長石 石英粒	淡橙褐色	P 29
高 坯	6	16.0cm	—	—	口縁端部内面には3条の浅い凹線が見られ、内外面ともタテヘラミガキの後、外表面ヨコナデ	含長石 石英粒	淡橙褐色	P 33
甕	7	14.8cm	—	—	外表面ヨコナデの後やや深いタテハケ、内表面ヨコナデの後頭部以下ヨコヘラケズリ	含長石 石英粒	淡橙灰 白色	柱穴 3 住 1
高 坯	8	22.0cm	—	—	外表面端部にやや明瞭な沈線が一束見られる。	含長石 石英粒	淡橙灰 白色	柱穴 3 住 1
甕	9	14.5cm	5.6cm	24.6cm	外表面タテハケの後頭部以上ヨコナデ胴部下半ヘラミガキ、内面ヨコナデの後タテ、ヨコヘラケズリ	含長石 石英粒	淡橙灰 白色	柱穴 3 住 1
甕	10	30.0cm	—	—	頭部に2条、口縁端部に1条のヘラ沈線がある。	含長石 石英粒	淡橙褐色	柱穴 3 住 1
鉢	11	20.0cm	—	—	内面ヨコナデ、一部ヨコヘラミガキ	含長石 石英粒	棕灰色	柱穴 3 住 2
甕	12	—	—	—	外表面ヨコナデ、内面ヨコナデ後頭部下半ヨコヘラケズリ	含長石 石英粒	淡茶褐色	柱穴 3 住 2
甕	13	—	—	—	外表面タテハケの後ヨコヘラ沈線を施す。	含長石 石英粒	淡茶褐色	柱穴 3 住 2
脚	14	—	—	—	外表面タテヘラミガキ、内面ヨコヘラナデ。体部と脚部の接合は円板充填である。	含長石 石英粒	淡茶褐色	柱穴 3 住 2
壺	15	—	—	—	外表面断面三角形の凸部が3条めぐら漏部にキザミを施す、内面ヨコナデの後部分的なハケメ	含長石 石英粒 雲母粒	淡橙灰 褐色	P 22
壺	16	18.0cm	—	—	外表面圧痕のある粘土帯を3条めぐらし口縁端部にキザミを入れ、内面ヨコナデ、一部タテハケ	含長石 石英粒 色砂粒	淡橙灰 褐色	P 22
甕	17	—	—	—	口縁外端部6条のタシ沈線、内面頸部下半ヘラケズリ	含長石 石英粒 色砂粒	淡橙灰 褐色	P 22
甕	18	16.0cm	—	—	外表面タテハケの後頭部以上ヨコナデ、内面はヨコナデの後頭部以下ヨコヘラケズリ	含長石 石英粒	淡橙褐色	柱穴 1 建物
甕	19	15.0cm	—	—	外表面ヨコナデの後頭部以下タテハケ、内面ヨコナデの後頭部以下ヨコヘラケズリ	含長石 石英粒	淡橙灰 褐色	P 88
有孔円板	20	4.0cm	—	—	中央に焼成前穿孔、内外面ナデ	含長石 石英粒	淡橙灰 白色	P 88
壺	21	13.0cm	—	—	外表面ヨコナデの後頭部以下タテハケ後ハケ一部を残しナデ、内面ナデの後胴部以下ヨコヘラケズリ	含長石 石英粒	淡橙色	P 139
甕	22	15.8cm	—	—	外表面ヨコナデ後頭部以下タテハケ内面ヨコナデ後頭部以下ヨコヘラケズリ	含長石 石英粒	淡橙灰 白色	P 139
甕	23	14.0cm	—	—	外表面ヨコナデ後頭部3条の内縫をめぐらし胴部ヨコヘラミガキ、内面頸部以下ヨコヘラケズリ	含長石 石英粒	淡橙灰 白色	P 139
鉢	24	13.1cm	—	—	外表面頸部に追加凹縫を2条、口縁部タテヘラミガキ焼成ヨコヘラミガキ、内面タテヘラミガキ	含長石 石英粒	淡橙灰 白色	P 139
高 坯	25	26.6cm	—	—	外表面端部内外面ヨコナデ後受部タテヘラミガキ、内面ハケ後ヨコナデ	含長石 石英粒	淡橙灰 白色	P 139
高 坯	26	20.0cm	—	—	—	—	—	P 139
甕	27	14.0cm	—	—	—	—	—	P 139

壺	28	12.5cm	27.1cm	7.6cm	口縁部外端は凹縄状にへこむ。外側はタテハケ後タテハラミガキ。内面頭部以下ヨコ後タテケズリ	含長石 石英粒	橙灰色	井戸 1
鉢	29	12.8cm	11.0cm	4.8cm	外側ヨコナダ後頭部以下タテハケ内面ヨコナダ後タテハケ以下ヘラナダ。2孔一対の前穿孔あり。	含長石 石英粒	淡黄茶 灰色	井戸 1
鉢	30	37.2cm	13.9cm	—	口縁上端部に2本の退化門縫を、外面上半ヨコナダ下部ヨコナダ後タミガキ	含長石 石英粒	淡灰白色	井戸 1
壺	31	16.1cm	—	—	外面頭部までヨコナダ頭部ヨコナダ頭部上半ヨコハラケズリ	含長石 石英粒	淡黄茶 灰色	井戸 1
壺	32	20.8cm	23.9cm	5.2cm	外面頭部以下元いたデハケ後胸上半以下タテハケ内面頭部最大径以下タテケズリ。頭部ナマハケ	含長石 石英粒	淡灰白色	井戸 1
壺	33	14.0cm	20.8cm	4.0cm	外面ナマハケ後頭部以下トタテハケ、頭部下半ナマハケ、内面頭部以下ヨコケズリ	含長石 石英粒	淡灰白色	井戸 1
壺	34	17.0cm	—	—	外面タテハケ後口縁部ヨコナダ、内面ヨコナダ後頭部以下ヨコケズリ	含長石 石英粒	淡灰白色	井戸 1
壺	35	15.4cm	—	—	外面頭部下半タテハケ中位ヨコハケ頭部以下タテハケ口縫部ヨコナダ内面ヨコナダ後頭部以下ヨコケズリ	含長石 石英粒	淡灰白色	井戸 1
壺	36	17.0cm	—	—	外面タテハケ後口縁部ヨコナダ、内面ヨコナダ後頭部以下ナメケズリ	含長石 石英粒	淡灰白色	井戸 1
壺	37	15.0cm	—	—	外面タテハケ後口縫部ヨコナダ、内面ヨコナダ後頭部以下ヨコハラケズリ	含長石 石英粒	淡灰白色	井戸 1
壺	38	20.0cm	—	—	口縁部外端に2条の退化凹縫以下ヨコナダ、内面頭部以下ドケズリ	含長石 石英粒	淡灰白色	P 127
壺	39	16.0cm	—	—	頭部外面6条の凹縫、口縫部内面に退化門縫3条、頭部下半ヨコケズリ	含長石 石英粒	淡橙褐色	P 127
底	40	—	—	7.0cm	上げ底氣味で外面一部タテハケ	含長石 石英粒	淡橙褐色	P 127
高 壕	41	28.0cm	—	—	口縫内端部に4条の凹縫をめぐらし、口縫部外側ヨコナダ、坏部外面ヨコケズリ	含長石 石英粒	淡灰白色	P 136
壺	42	18.0cm	—	—	口縫部内外面をヨコナダ、惚はナダ。口縫外端部はキサミをめぐらす。	含長石 石英粒	淡茶灰色	P 136
壺	43	—	—	—	外面タテハケ後ヘラ沈縫を2条めぐらす。	含長石 石英粒	淡橙褐色	P 136
壺	44	20.0cm	—	—	外面ヨコナダ、内面ヨコナダ後頭部以下ヨコケズリ	含長石 石英粒	淡橙褐色	P 201
製塙土器	45	—	—	4.0cm	脚の掛け跡となく、外面はタテケズリ後指の押圧痕、内面ケズリ後ナダ	含長石 石英粒	褐灰白色	P 201
製塙土器	46	—	—	4.8cm	脚の掛け跡となく、外面はタテケズリ、内面ケズリ後ナダ	含長石 石英粒	淡橙褐色	P 201
ミニチュア	47	—	—	4.4cm	上げ底氣味で外面ナダ	含長石 石英粒	淡灰白色	P 201
製塙土器	48	—	—	5.2cm	内外面ともヘラケズリ後ナダ	含長石 石英粒	褐褐色	P 129
凸帯文土器	49	—	—	—	口縫外端若干下に凸縫を貼り付け指の押圧をめぐらす。内面凹ナダ	含長石 石英粒	淡茶褐色	P 129
蓋	50	5.8cm	—	—	2孔一対の施成前穿孔を行い、2本を単位とするクシ沈縫を3単位めぐらす。	含長石 石英粒	茶褐色	P 52
壺	51	5.0cm	12.6cm	4.5cm	2孔一対の施成前穿孔、上平太さの異なるヘラ沈縫と2本・単位の絶縫文、刺突文をめぐらす。	含長石 石英粒	淡茶褐色	P 52
壺	52	18.0cm	—	—	口縫内側に指頭押圧を行なう凸縫を2条めぐらす。	含長石 石英粒	淡茶褐色	P 59
壺	53	17.0cm	—	—	頭部若干下に粘土組を貼り付け口縫部としキサミをめぐらし、胸部に9条のヘラ沈縫をめぐらす。	含長石 石英粒	淡灰白色	P 59
壺	54	—	—	—	頭部下にヘラ沈縫をめぐらす。	含長石 石英粒	褐褐色	P 59
壺	55	—	—	—	くの字状の口縫部をなす。	含長石 石英粒	淡橙灰白色	P 59
壺	56	—	—	—	削り出し凸縫の上にヘラ沈縫をめぐらす。	含長石 石英粒	淡橙灰白色	P 58

裏	57	—	—	—	頭部下半に粘土の網き目を整形して段を作っている。外面ヨコナデ。内面ナデ	含長石 石英粒 砂粒	淡橙灰 白色	P 58
裏	58	30.0cm	—	—	外面タテハケ後下半タテミガキ後剥文をめぐらす、内面ヨコミガキ後II級 部内外ヨコナデ	含長石 石英粒 砂粒	淡橙灰 白色	P 58
裏	59	22.0cm	19.4cm	7.2cm	外面タテハケ後タテミガキ内面七半ナメハケ後下半タテハケ口縁部内外ヨコナデ	含長石 石英粒	橄褐色	P 58
裏	60	16.0cm	—	—	外面タテハケ後ヨコミガキ、口縁部内外ヨコナデ	含長石 石英粒 砂粒	淡橙灰 白色	P 58
底 部	61	—	—	5.0cm	外面タテミガキ後指押さえ、内面タテミガキ	含長石 石英粒 砂粒	淡赤灰 褐色	P 58
壺	62	21.1cm	—	—	口縁部内面に指压痕のある粘土紐を貼り付ける。内外面ナデ	含長石 石英粒	淡茶灰 色	P 58
裏	63	18.0cm	—	—	くの字状の短い口縁である。	含長石 石英粒	淡橙灰 白色	P 60
裏	64	—	—	—	端部に粘土紐を貼り付けたサミをめぐらす。口縁と剥突文以下に10条のヘラ沈線と剥突文を施す。	含長石 石英粒	淡茶褐 色	P 60
裏	65	—	—	—	端部に粘土紐を貼り付けキサミをめぐらし口縁とし内外面ともヨコヘラミガキ	含長石 石英粒	淡橙灰 色	P 60
壺	66	—	—	—	口縁端部内面に指压痕のある断面三角形の粘土紐を貼り付け、外面には指压痕をめぐらす。	含長石 石英粒	淡橙灰 色	P 60
底 部	67	—	—	7.6cm	やや上げ底気味で端部に焼成痕穿孔が対ある。	含長石 石英粒	橄褐色	P 60
壺	68	12.0cm	—	—	外面タテハケ後口縁部ヨコナデ頭部2条以上のクシ沈線がめぐり、内面ヨコミガキ	含長石 石英粒 砂粒	淡橙灰 色	P 71 P 72
底 部	69	—	—	3.0cm	外面タテミガキ、内面ナデ	含長石 石英粒	淡橙褐 色	P 71 P 72
底 部	70	—	—	7.6cm	外面タテミガキ、内面ナデ	含長石 石英粒	橄褐色	P 71
壺	71	10.0cm	24.0cm	5.3cm	外面頸部以下タテハケ後胸下半タテミガキ後剥文を2段めぐらす。内面頭部以下トナメハケ	含長石 石英粒	淡茶褐 色	P 79
壺	72	8.0cm	24.8cm	7.0cm	口縁部内外面ヨコナデ後頭部以下タテハケ後胸中位ヨコミガキ後胸下半タテミガキ	含長石 石英粒	淡茶灰 色	P 79
壺	73	—	—	—	断面三角形の凸筋が1条めぐる。外面タテハケ、内面ナメハケ	含長石 石英粒	橄灰色	P 79
裏	74	22.0cm	—	—	外面タテハケ後頭部以下11条のヘラ沈線と剥突文をめぐらし、口縁外縁はキサミをめぐらす。	含長石 石英粒	淡赤褐 色	P 86
裏	75	23.0cm	—	—	端部に断面三角形の粘土紐を貼り付けキサミをめぐらし11条頭部とし頭部以下に12条のヘラ沈線を施す。	含長石 石英粒	橄灰褐 色	P 86
裏	76	22.4cm	—	—	口縁部内外面ヨコナデ、他はナデ	含長石 石英粒	橄褐色	P 86
裏	77	—	—	—	胸上半は5条以上のヘラ沈線以下剥突文、円形浮文を施す。	含長石 石英粒	淡橙褐 色	P 86
壺	78	—	—	—	胸部外側は8条以上のヘラ沈線、沈線間に3条単位の鋸齒文を施している。	含長石 石英粒	淡茶灰 色	P 86
壺	79	—	—	—	口縁部内面に粘土紐貼り付けによる施文がある。	含長石 石英粒	淡橙灰 色	P 86
壺	80	28.0cm	—	—	口縁部端部に粘土紐を貼り付けキサミを入れ以下粘土紐3条流らし外端下部はキサミを施す。	含長石 石英粒	淡橙灰 色	P 87
壺	81	—	—	—	ヘラ沈線が3条施される。	含長石 石英粒	淡橙灰 色	P 93
裏	82	—	—	—	外面タテハケ後19条のヘラ沈線、剥突文、タテミガキを施す。内面胸上半タテ方向のナデ	含長石 石英粒	橄褐色	P 96
裏	83	24.0cm	—	—	端部に断面三角形の粘土紐を貼り付け11条とし、頭部以下に8条以上のヘラ沈線を施す。	含長石 石英粒	淡橙褐 色	P 96
裏	84	19.8cm	—	—	端部下に粘土紐を貼り付けキサミをめぐらし口縁とし上縁は波状形に整形し頭部以下17条ヘラ沈線を施す。	含長石 石英粒	淡赤茶 褐色	P 101
裏	85	—	—	—	外面7条以上のヘラ沈線があり内面タテミガキ、81と同一個体の可能性あり。	含長石 石英粒	淡赤茶 褐色	P 101

亮	86 87 88	—	—	—	口縁端部にキザミを施らし頭部以下へハラ沈線、刺突文を施す。87は粘土紐を貼り付け口縁とする。	含長石 右石英粒	淡橙灰 色	P 101
臺	89	23.0cm	—	—	口縁外端部に2条のヘラ沈線をめぐらし、外側タテハケ、内面ヨコハケ後ヨコナダ。	含長石 右石英粒	淡橙褐色	P 101
臺	90	—	—	—	前面二角形の粘土紐を貼り付けキザミを施し、外側ヨコナダ。89と同じ個体の可能性あり。	含長石 右石英粒	淡橙褐色	P 101
臺	91	—	—	—	外面ヨコ方向の工具痕の上からタテハケを施す。内面折合がある。内輪接合か、端部に焼成前穿孔があり、7条以上のヘラ沈線が施される。	含長石 右石英粒 玻璃	淡橙灰 白色	P 101
臺	92	—	—	—	—	含長石 右石英粒	淡橙灰 色	P 101
臺	93	—	—	—	内外面ヨコナダ	含長石 右石英粒	淡赤茶 褐色	P 101
底 部	94	—	—	5.0cm	やや上げ底気味である。	含長石 右石英粒	淡橙灰 褐色	P 101
臺	95	22.0cm	—	—	口縁外端にキザミを入れ、頭部以下に12条のヘラ沈線、刺突文をめぐらす。内外面ナダ。	含長石 右石英粒	淡橙灰 白色	P 133
臺	96	—	—	—	端部に断面三角形の粘土紐を貼りつけ口縁としキザミを入れる。頭部以下にヘラ沈線を施す。	含長石 右石英粒	淡赤褐色	P 133
臺	97	—	—	—	ヘラ沈線が施る。	含長石 右石英粒	淡橙褐色	P 133
臺	98	—	—	—	端部やや肥厚しヘラ沈線を施し後キザミを施す。	含長石 右石英粒	淡橙灰 褐色	P 133
臺	99	—	—	—	口縁部附近に断面三角形の粘土紐を貼り付けキザミを施す。	含長石 右石英粒	淡赤褐色	P 133
臺	100	14.0cm	—	—	内外面ナダ	含長石 右石英黑 色砂粒	淡茶褐色	P 133
臺	101	—	—	—	前面ヨコータミガキ後2条のヘラ沈線を施す。内面ヨコミガキ紋が見られる。	含長石 右石英粒	淡橙灰 褐色	P 133
臺	102	—	—	—	—	含長石 右石英粒	淡茶灰 色	P 133
鉢	103	—	—	—	口縁以下にヘラ沈線が9条、刺突文、ヘラ沈線15条以上が施る。	含長石 右石英粒	淡橙灰 色	P 133
臺	104	—	—	—	3本を単位とする直線文と波状文がある。	含長石 右石英粒	暗茶褐色	P 120
凸帯文土器	105	—	—	—	端部やや下の位置に粘土紐を貼り付け上から指止痕を施す。	含長石 右石英粒	淡茶灰 色	P 120
臺	106	—	—	—	ヘラ沈線が施る。	含長石 右石英黑 色砂粒	淡橙灰 色	P 125
凸帯文土器	107	—	—	—	口縁外端にキザミ、やや下に低い粘土紐を貼りキザミを施す。内面ヘラ沈線を施す。	含長石 右石英粒	淡橙灰 褐色	P 125
底 部	108	—	—	4.4cm	内面ハケメ、外面ヘラケズリ後ナダ	含長石 右石英粒	淡橙褐色	P 128
臺	109	22.2cm	33.6cm	6.6cm	体部に4条単位の直線文、頭部粘土紐をヨコ後タチに貼り口縁外に刺突文、内に張り直線文を貼る。	含長石 右石英粒	淡赤褐色	P 132
臺(鉢)	110	4.0cm	14.4cm	2.4cm	口縁以下13条のヘラ沈線がめぐり、対の焼成後穿孔がある。外面タテミガキ内面ナダ。波状文あり。	含長石 右石英粒	淡赤褐色	P 132
臺	111	—	—	—	4条単位の直線文、波状文を施す。	含長石 右石英粒	暗茶褐色	P 132
臺	112	12.0cm	18.8cm	8.0cm	外面タテミガキ後口縁付近と底部付近ヨコミガキ	含長石 右石英粒	淡橙褐色	P 146
臺	113	22.4cm	—	—	端部に断面三角形の粘土紐を貼り付けキザミを施し後10縁以上に10条途上へのヘラ沈線を施す。	含長石 右石英粒	橙褐色	P 146
臺	114	—	—	—	外面タテハケ内面ヨコミガキ	含長石 右石英粒	淡橙灰 色	P 131
臺	115	—	—	—	頭部に2条のヘラ沈線、端部にキザミを施す。	含長石 右石英粒	系褐色	P 134
鉢	116	—	—	—	くの字状の口縁部である。	含長石 右石英粒	棕褐色	P 135

凸唇文土器	117	—	—	—	端部やや下に粘土紐を貼り付け上からキザミを巡らす。	含長石 石英粒	淡橙褐色	P 138
壺	118	—	—	—	重張文らしきヘラ文様がある。	含長石 石英粒	淡棕灰色	P 138
甕	119	24.0cm	—	—	くの字状の口縁で外縁にキザミをめぐらす。	含長石 石英粒	淡橙灰色	P 138
底 部	120	—	—	6.8cm	平底である。	含長石 石英粒 黑色 色砂粒	棕褐色	P 140
甕	121	16.0cm	—	—	外面タテハケ。内面ヨコミガキ後口縁内外ヨコナデ	含長石 石英粒	淡橙褐色	P 141
甕	122	—	—	—	口縁外端部にキザミを巡らす。	含長石 石英粒	棕褐色	P 141
甕	123	—	—	—	頭部以下に11条のヘラ沈線、刺突が巡る。内外面ナデ	含長石 石英粒	淡茶灰色	P 149
甕	124	20.4cm	—	—	端部に断面三角形の粘土紐を貼り付け口縁とし頭部以下7条以上のヘラ沈線がある。	含長石 石英粒	淡橙灰色	P 149
甕	125	30.6cm	—	—	端部に粘土紐を貼り付け口縁としキザミを巡らす。頭部以下4-16条のヘラ沈線を巡らす。	含長石 石英粒	淡橙灰色	P 149
壺	126	—	—	—	6条を単位とするヘラ沈線が頭部付近にめぐる。口縁部付近ヨコナデ	含長石 石英粒	淡橙灰色	P 149
鉢	127	22.0cm	—	—	外面に10条のヘラ沈線がめぐる。	含長石 石英粒 黑色 色砂粒	棕褐色	P 149
甕	128	20.4cm	—	—	端部に粘土紐を貼り付け口縁部としている。内外面ナデ	含長石 石英粒	棕褐色	P 149
甕	129	20.2cm	—	—	外面荒いタテハケ後口縁内外ヨコナデ 後内面部分的なヨコミガキ	含長石 石英粒 黑色 色砂粒	淡橙灰色	P 149
鉢	130	28.0cm	—	—	外面荒いタテハケ後口縁内外ヨコナデ	含長石 石英粒	淡橙灰色	P 149
底 部	131	—	—	5.2cm	外面部分的なタテミガキ、内面タテナデ	含長石 石英粒	淡橙灰色	P 149
底 部	132	—	—	6.6cm	やや上げ底気味で一对の焼成前穿孔があり、外面タテハケ内面ナデである。	含長石 石英粒	淡橙灰色	P 149
甕	133	—	—	—	ヘラ沈線と2本単位の絞め方向のヘラ沈線が施される。	含長石 石英粒	棕褐色	P 149
壺	134	—	—	—	端部内面に粘土紐を貼り付け指頭压痕を巡らす。外面ヨコミガキ、内面ヨコナデ	含長石 石英粒	棕褐色	P 149
甕	135	30.0cm	—	—	外縁部にヘラ沈線が1条高まり内外面ヨコナデ	含長石 石英粒	淡橙灰色	P 149
甕	136	—	—	—	外面ヨコナデ。内面ナデ	含長石 石英粒	淡橙灰色	P 149
甕	137	26.0cm	—	—	端部に粘土紐を貼り付け口縁とし頭部以下に14条のヘラ沈線と刺突文を巡らす。	含長石 石英粒	淡橙褐色	P 151
甕	138	12.0cm	—	—	端部に粘土紐を貼り付け口縁としナデ後口縁ヨコナデ貼り下部分的なタテハケ	含長石 石英粒	淡橙褐色	P 161
甕	139	10.0cm	—	—	端部上に粘土紐を貼り付け口縁としナデ後口縁ヨコナデ貼り下部分的なタテハケ	含長石 石英粒 黑色 色砂粒	淡橙灰色	P 161
壺	140	26.4cm	—	—	11條外縁に1条の凹線を巡らし、上端に粘土紐を貼り付けその上端と口縁下端キザミを巡らす。	含長石 石英粒	淡橙褐色	P 161
鉢	141	20.0cm	—	—	外面に網状文を挟んでそれぞれ上から15条、12条、13条、6条以上のヘラ沈線を巡らす。	含長石 石英粒	淡橙白色	P 161
底 部	142	—	—	12.3cm	外面タテハケ後部分的なナナメミガキ、内面ヨコナデ	含長石 石英粒 黑色 色砂粒	淡橙褐色	P 161
底 部	143	—	—	6.6cm	平底である。	含長石 石英粒	淡橙褐色	P 161
壺	144	10.6cm	—	—	口縁端部に焼成前穿孔があり、2本単位の網状文を挟んで4本単位の直線文を巡らす。	含長石 石英粒	淡灰白色	P 174
甕	145	—	—	—	端部に粘土紐を貼り付け口縁としキザミを巡らし、頭部以下クシ沈線を施す。	含長石 石英粒	淡橙灰色	P 174

壺	146	16.2cm	—	—	外面ヨコミガキ	含長石 石英粒	淡灰白色	P 177
壺	147	—	—	—	筒状の頸部に断面三角形の粘土紐7条を巡らせしに棒状浮文を3本付け、胴部にヘラ沈線を施す。	含長石 石英粒	淡橙褐色	P 177
壺	148	—	—	—	腹部を丸くおさめ、キザミを巡らす。	含長石 石英粒	淡黄褐色	P 177
壺	149	—	—	—	腹部をやや上方に肥厚しキザミを巡らしヨコミガキ内面ヨコナデ	含長石 石英粒	淡灰白色	P 177
壺	150	—	—	—	胴部付近の破片で重弧文が施される。	含長石 石英粒	淡棕灰白色	P 177
壺	151	—	—	—	口綫部付近の破片で断面三角形の粘土紐を巡らす。	含長石 石英粒	淡橙灰白色	P 177
壺	152	—	—	—	胴部付近の破片で断面三角形の粘土紐を巡らす。外面ヨコミガキ、内面ヘラナデ	含長石 石英粒	橙褐色	P 177
壺	153	—	—	—	胴部上半の破片で、断面三角形の粘土紐を巡らす。	含長石 石英黒色砂粒	淡灰白色	P 177
甕	154	16.2cm	—	—	端部に粘土紐を貼り付けキザミを巡らし口綫とし、頸部以下10条のヘラ沈線、刺突文を巡らす。	含長石 石英金雲母粒	淡赤褐色	P 177
甕	155	—	—	—	口綫端部にキザミを巡らし、頸部以下にヘラ沈線を巡らす。	含長石 石英粒	淡橙褐色	P 177
鉢	156	18.2cm	—	—	外面ヨコナデ	含長石 石英粒	淡橙灰白色	P 177
鉢	157	12.8cm	—	—	内外面ナデ	含長石 石英粒	淡橙褐色	P 177
鉢	158	23.8cm	—	—	端部内面に粘土紐を貼り刺突文2条を巡らし、外面に刺突文とヘラ沈線を巡らしている。	含長石 石英粒	淡橙褐色	P 177
底 部	159	—	—	4.0cm	外面ナデ	含長石 石英金雲母粒 含長石 石英粒	淡橙灰白色	P 177
底 部	160	—	—	8.0cm	外面タテミガキ、内面ヨコミガキ	含長石 石英粒	淡赤褐色	P 177
壺	161	—	—	—	頸部と胴部の境に削り出して段を作り、3条以上のヘラ沈線を巡らしている。	含長石 石英粒	橙褐色	P 176
壺	162	20.0cm	—	—	口綫外端部に1条のヘラ沈線が巡り、外面ナデ、内面ヨコミガキ	含長石 石英粒	淡赤灰褐色	P 186
壺	163	—	—	—	頸部から胴部の境に浅い段がある。	含長石 石英粒	淡橙灰褐色	P 186
底 部	164	—	—	8.0cm	外面ナデ	含長石 石英粒	灰褐色	P 186
壺	165	—	—	—	胴部1半の破片で低いケズリ出し段の上に1条のヘラ沈線が巡る。外面ヨコミガキ	含長石 石英粒	淡橙褐色	P 186
甕	166	16.0cm	—	—	外面ナデ	含長石 石英黒色砂粒 含長石 石英粒	淡橙褐色	P 186
甕	167	—	—	—	ヘラ沈線が6条以上巡る。	含長石 石英粒	淡棕灰白色	P 198
甕	168	—	—	—	ヘラ沈線が2条以上巡る。	含長石 石英粒	淡橙褐色	P 198
壺	169	25.0cm	—	—	外面ナデ	含長石 石英粒	淡棕灰白色	P 200
甕	170	—	—	—	頸部以下に2条以上のヘラ沈線が巡る。	含長石 石英粒	橙褐色	P 200
甕	171	34cm	—	—	端部に断面三角形の粘土紐を貼り付け11縫とし外面ヨコナデ	含長石 石英粒	橙褐色	P 203
甕	172	—	—	—	4条のヘラ沈線が巡る。外面下平タテハケ、内面ナデ	含長石 石英黒色砂粒 含長石 石英粒	淡橙灰褐色	P 203
甕	173	—	—	—	直線文と波状文が交互に施されている。	含長石 石英粒	淡棕灰白色	P 203
甕	174	—	—	—	ヘラ沈線と刺突文が施される。	含長石 石英粒	淡茶褐色	P 204

鉢	175	37.0cm	21.5cm	12.0cm	外面ナナメミガキ後口縁ヨコナデ内面ナナメハケ後ヨコナナメミガキ	含長石 右英粒	淡橙灰 白色	P 50
甕	176	28.8cm	41.3cm	9.7cm	口縁端部にキザミを頭部に2~3条のヘラ沈線を貼る。内外面に部分的にタテハケを行う。	含長石 右英粒	淡橙灰色	P 50
壺	177	35.4cm	62.3cm	12.0cm	口縁端部にヘラ沈線、頭部と脚部に3条のヘラ沈線が巡る。外面タテハケ後ミガキ内面ミガキとハケ	含長石 右英粒	淡橙灰色	P 51
壺	178	11.2cm	—	6.8cm	口縁内側にキザミを施した粘土紐を2条貼り、頭部にも1条貼る。外面ハケとミガキ内面ハケ	含長石 右英粒	淡茶灰 色	P 225
甕	179	9.0cm	—	8.0cm	口縁端部にキザミを、頭部には刺突文を巡らす。外面タテハケ後タミガキ内面タテハケ	含長石 右英粒	橙褐色	P 225
壺	180	18.4cm	26.5cm	6.0cm	口縁内面と頭部にキザミを巡らした粘土紐を貼り、胸部に波紋文、側突文を巡らす。	含長石 右英粒	淡茶灰 色	P 225
甕	181	18.5cm	26.4cm	6.2cm	底部に施成前穿孔がある。外面上にタマガキ、ドタマガキ、ミガキ	含長石 右英粒	淡橙灰 色	満17
甕	182	19.0cm	—	—	外面上タテハケ後頭部以下12条のヘラ沈線と側突文が巡り、下半部分的なミガキ。	含長石 右英粒	淡橙灰 白色	満17
甕	183	—	—	—	頭部に粘土紐を貼り付けキザミを巡らし、口縁端部以下に11条のヘラ沈線が施される。	含長石 右英粒	橙褐色	満17
甕	184	—	—	—	頭部に粘土紐を貼り付け口縁とし頭部以下に7条以上のヘラ沈線が施される。	含長石 右英粒	淡茶褐 色	満17
甕	185	—	—	—	頭部に3条のヘラ沈線が巡る。	含長石 右英粒	淡橙灰 色	満17
鉢	186	26.0cm	—	—	外外面ナデ	含長石 右英粒	淡茶灰 色	満17
鉢	187	19.0cm	—	—	口縁上端に刺突文を2単位施し、外面に8.5~3条のヘラ沈線と刺突文を巡らし、内面ナナメミガキ	含長石 右英粒	淡橙褐色	満17
壺	188	20.2cm	—	—	口縁内面に粘土紐を貼り、外縁にキザミを巡らす。内外面部分的なヘラミガキ	含長石 右英粒	淡橙灰 白色	満17
壺	189	—	—	—	189とはほぼ同様でただ外縁に1条のヘラ沈線が巡る。	含長石 右英粒	淡橙灰 色	満17
甕	190	—	—	—	頭部に粘土紐と棒状突文、以下に直線文と波状文が施される。外面右英粒下半ヨガキ内面上半ハラナデ	含長石 右英粒	淡橙灰 色	満17
甕	191	—	—	—	外縁に中央に2条のヘラ沈線、両側にキザミを巡らす。	含長石 右英粒	淡橙灰 色	満17
壺	192	5.6cm	—	—	口縁端部に施成前穿孔があり、外面に直線文と波状文が交互に施される。	含長石 右英粒	淡茶褐 色	満17
甕	193	—	—	—	上半に6条、下半に1条のヘラ沈線その上から浅く細いタチで刺突文を巡らす。	含長石 右英粒	淡橙灰 白色	満17
甕	194	4.1cm	8.3cm	4.0cm	口縁に2孔一対の施成前穿孔ある。	含長石 右英粒	淡橙灰 色	満17
甕	195	—	—	—	口縁端部にキザミを巡らす。	含長石 右英粒	橙褐色	満17
鉢	196	—	—	—	口縁端部にキザミを巡らない粘土紐を貼る。	含長石 右英粒	淡灰白 色	満17
底 部	197	—	—	8.2cm	外面ナデ、内面ハケ後ナナメミガキ	含長石 右英粒	淡橙灰 色	満17
甕	198	25.6cm	—	—	端部ヘラ沈線後キザミを巡らし、内面キザミを施す。頭部を貼る。	含長石 右英粒	淡赤褐色	満18
甕	199	25.4cm	—	—	頭部にヘラ沈線を施し後キザミを巡らす。	含長石 右英粒	淡橙灰 色	満18
甕	200	—	—	—	頭部に5条以上のヘラ沈線が巡る。	含長石 右英粒	淡茶灰 色	満18
甕	201	—	—	—	内面に突出の低い粘土紐を貼り付けた。	含長石 右英粒	淡橙灰 白色	満18
甕	202	—	—	—	外面上ヨコヘラ沈線の下にナナメヘラ沈線を巡らす。	含長石 右英粒	淡橙灰 色	満18
甕	203	20.2cm	—	—	端部に粘土紐を貼り付け口縁とし外縁下半にタテハケ、口縁内外面ヨコナデ	含長石 右英粒	淡茶灰 色	満18

臺	204	20.4cm	—	—	頭部に粘土紐を貼り付け口縁とし口縁内側にヨコナメ、内面下半部分的ナメヨコミガキ	含長石 右石英粒	淡橙灰褐色	満18
臺	205	—	—	—	頭部以下に5条のヘラ沈線が巡り内面頭部的なヨコミガキ	含長石 右石英粒 色砂粒	橙褐色	満18
臺	206	—	—	—	頭部を三角形に整形し、粘土紐を貼り口縁とし上端にキザミを施す頭部以下に10条以上の沈線を施す。	含長石 右石英粒 色砂粒	淡橙灰褐色	満18
臺	207	—	—	—	口縁外端に棒状工具によじて痕をめぐらし頭部以下に10条以上のヘラ沈線を施す。	含長石 右石英粒	淡灰褐色	満18
臺	208	14.0cm	—	—	口縁と頭部の境に浅いヘラ沈線が巡り、内面ヨコミガキ	含長石 右石英粒	淡橙灰白色	満19
臺	209	14.0cm	—	—	口縁外端部にキザミを巡らす。	含長石 右石英粒 色砂粒	淡橙褐色	満19
臺	210	—	—	6.7cm	頭部と胸部の境に2条のヘラ沈線が巡る。外側ヨコミガキ内面ヨコハケ後にヨコミガキ	含長石 右石英粒 色砂粒	淡橙褐色	満19
臺	211	—	—	—	頭部と胸部の境に低い削り出し凸帯と上に1条のヘラ沈線を巡らす。石英粒内外面ヨコミガキ	含長石 右石英粒	橙灰白色	満19
臺	212	—	—	—	頭部と胸部の境に削り出し凸帯を巡らし、内外面ヨコミガキ	含長石 右石英粒	淡橙灰褐色	満19
臺	213	—	—	—	浅い幅ヘラ沈線と2本単位のナメヘラ沈線が施される。	含長石 右石英粒 色砂粒	淡茶褐色	満19
臺	214	—	—	—	削り出し凸帯の上にヘラ沈線が巡る。	含長石 右石英粒 色砂粒	橙褐色	満19
臺	215	—	—	—	刺突文とヘラ沈線が巡る。	含長石 右石英粒	淡橙灰色	満19
臺	216	8.0cm	—	—	頭部に焼成前穿孔が2孔あり、頭部以下に7条以上のヘラ沈線が巡る。	含長石 右石英粒	淡茶灰褐色	満19
底 部	217	—	—	8.8cm	平底である。	含長石 右石英粒	淡橙褐色	満19
臺	218	16.0cm	—	5.4cm	口縁外端にキザミを施し、頭部以下に10条のヘラ沈線と刺突文が巡る。	含長石 右石英粒	淡赤茶褐色	満19
臺	219	20.0cm	—	—	頭部に粘土紐を貼り付け口縁とキザミを施す。頭部以下に7条以上のヘラ沈線が巡る。	含長石 右石英粒	橙褐色	満19
深 鉢	220	22.0cm	—	—	頭部にキザミを施した突帯を巡らす。頭部内外面ヨコナデ、頭部下半弱いケメリ	含長石 右石英粒	淡橙灰褐色	満19
鉢	221	—	—	—	頭部やや下がった位置に上端にキザミを施した突帯を巡らす。	含長石 右石英粒	淡茶褐色	満19
鉢	222	—	—	—	頭部やや下がった位置に上端にキザミを施した突帯を巡らす。	含長石 右石英粒 色砂粒	淡茶褐色	満19
鉢	223	—	—	—	頭部やや下がった位置に上端にキザミを施した突帯を巡らす。	含長石 右石英粒 色砂粒	橙褐色	満19
鉢	224	—	—	—	細いタッチのヘラ沈線が施される。	含長石 右石英粒	淡橙灰白色	満19
臺	225	—	—	—	口縁外端にキザミを、頭部以下に6条以上のヘラ沈線を巡らす。	含長石 右石英粒 色砂粒	橙褐色	満19
浅 鉢	226	—	—	—	外面ヨコケズリ、内面ナデ	含長石 右石英粒	淡茶灰褐色	満19
鉢	227	26.0cm	—	—	口縁部上端が面をなし、外方へ僅かに拡張する。	含長石 右石英粒	淡橙灰白色	満19
鉢	228	10.0cm	—	—	若干くの字状に外反する口縁で、内外面ナデ	含長石 右石英粒 色砂粒	淡茶灰褐色	満19
蓋	229	—	—	—	円板状で端部に面をなす。	含長石 右石英粒	淡橙灰褐色	満19
臺	230	19.6cm	—	—	II級外下端部にキザミを巡らす。	含長石 右石英粒 色砂粒	淡茶灰褐色	満22
臺	231	25.0cm	—	—	口縁外端部にキザミ、頭部に1~2条胸部に1条のヘラ沈線が巡る。	含長石 右石英粒	橙褐色	満22
鉢	232	20.0cm	—	—	綴やかに外反する口縁で端部がやや尖り気味である。	含長石 右石英粒 色砂粒	淡橙灰褐色	満22

深 鉢	233	—	—	—	細いタッチのヘラ沈線が施される。	含長石 右英粒	淡茶灰 色	溝22
鉢	234	—	—	—	キザミを施した突帯が巡る。	含長石 右英粒	淡茶灰 白色	溝22
鉢	235	—	—	—	口縁端部やや下がった位置にキザミを巡らす突帯を施す。	含長石 右英粒	淡茶灰 褐色	溝22
鉢	236	—	—	—	口縁端部やや下がった位置にキザミを巡らす突帯を施す。	含長石 右英粒 色砂粒	淡茶灰 色	溝22
壺	237	—	—	—	口縁端部にキザミを巡らし、頭部に浅い2条のヘラ沈線を施す。	含長石 右英粒	淡橙灰 色	溝22
壺	238	—	—	—	浅い段が認められる。	含長石 右英粒 色砂粒	淡橙褐 色	溝22
壺	239	—	—	—	浅い段が認められ、境は沈線気味に深くなっている。	含長石 右英粒 色砂粒	淡橙褐 色	溝22
壺	240	—	—	—	浅いヘラ沈線が2条以上認められる。	含長石 右英粒	淡棕灰 色	溝22
壺	241	—	—	—	縦の狭い削り出し帯が1条認められる。外面部ヨコミガキ	含長石 右英粒	淡棕灰 白色	溝22
壺	242	—	—	—	壺部に焼成前穿孔があり、直線文と波状文が交互に施される。外面部ヨコミガキ	含長石 右英粒	淡棕褐 色	溝24
壺	243	6.6cm	—	—	外面ケテハケ後直線文と波状文と刺突文が施され、内面上半ヨコミガキトナヘラナデ	含長石 右英粒	橙褐色	溝24
壺	244	24.0cm	—	—	内外面ヨコナデ	含長石 右英粒	淡灰白色	溝6
底 部	245	—	—	6.0cm	断面三角形の高台を貼り付ける。	含長石 右英粒 色砂粒	淡橙灰 白色	溝14
蓋 坏	246	—	—	—	外面ヨコケズリ以下ヨコナデ、内面ヨコナデ	含長石 右英粒	淡灰白 色	溝14
碗	247	13.0cm	—	—	殆ど直に外反し端部をやや火り気味におさめる。	含長石 右英粒	淡橙灰 白色	溝16
底 部	248	—	—	—	細長く聞く高台で、底面外間にヘラ切り縁がある。	含長石 右英粒 色砂粒	淡棕灰 白色	溝16
底 部	249	—	—	7.1cm	細長く聞く高台である。	含長石 右英粒	淡棕灰 白色	溝16
羽 篓	250	—	—	—	瓦質で、外面上部ハケ以下をヘラナデ、内面上半にナナメハケ	含長石 右英粒	灰色	溝1
京焼系の碗	251	—	—	5.0cm	白っぽい粘土に透明の釉がかかる。	織密	灰白色	溝1
伊万里・皿	252	14.5cm	—	—	砂高台で内面に淡青色の文様を施す。	織密	白色	溝1
備前・招鉢	253	—	—	—	口縁外には2条の円線が巡る。内面はクシ状工具により8本の朱線が施されている。	織密	淡赤褐色	溝15
備前・招鉢	254	—	—	—	内面はクシ状工具により9~10条単位の朱線が施されている。	織密	淡赤褐色	溝15
伊万里・皿	255	12cm	—	—	砂高台で内外面に青色の文様を施す。	織密	白色	溝15
壺	256	—	—	—	上面にキザミを巡らせる粘土縁を貼り付ける。	含長石 右英粒	橙褐色	溝15
壺	257	23.0cm	—	—	壺部にキザミを施した粘土縁を貼り付けて口縁とし、10条と4条のヘラ沈線と刺突文が巡る。	含長石 右英粒	淡茶褐 色	溝15
壺	258	—	—	—	外面ヨコナデ内面頭部以下ケズリ外端にクシ沈線を巡らす。	含長石 右英粒 色砂粒	淡茶灰 色	溝8
壺	259	—	—	—	口縁部外面にクシ沈線を巡らす。	含長石 右英粒 色砂粒	淡灰 色	水井上 部
壺	260	12.8cm	—	—	内外面ヨコナデ	含長石 右英粒 色砂粒	淡棕灰 白色	水井上 部
高 坏	261	—	—	—	円板充填で間を埋める。下縁の開く位置に5条のヘラ沈線を巡らす外面部ヨコミガキ、底部内面ヨコケズリ	含長石 右英粒 色砂粒	淡棕色	正第 水井上 部

高 坩	262	25.0cm	—	—	外面受部と口縁部の境にヘラ沈線が巡る。	含長石 石英粒	淡橙褐色	溝12
壺	263	26.0cm	—	—	口縁部と頭部の境にヘラ沈線が巡る り、外面口縁部付近ヨコナデ後ヨコミ ガキ。	含長石 石英粒	橙褐色	溝12
浅 鉢	264	—	—	—	外面下半ヘル状工具による施文、上半 ヨコミガキ	含長石 石英粒	淡茶灰 色	溝12
壺	265	34.0cm	—	—	外面タテハケ後縫突文を巡らし、内面 ヨコミガキ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石 石英粒	淡橙灰 白色	溝13
壺	266	11.0cm	—	—	外面タテハケ後縫内外ヨコナデ端部 にキザミ以下波線文と直線文が施され る。内部部分的なハケ。	含長石 石英粒	淡橙灰 色	河道
壺	267	20.0cm	—	—	頭部に指頭圧痕を施した粘土粒を貼 る。外面タテハケ、内面ナナメハケ、 口縁内外面ヨコナデ	含長石 石英粒	淡橙灰 褐色	河道
壺	268	28.0cm	—	—	外面タテハケ内面ヨコミガキ口縁内外 面ヨコナデ	含長石 石英粒	淡橙灰 白色	河道
壺	269	28.0cm	—	—	外面タテハケ内面ナナメハケ後ヨコミ ガキ、口縁部外面ヨコナデ	含長石 石英粒	淡茶灰 色	河道
壺	270	24.0cm	—	—	外面ナナメハケ内面ナナメハケ後口縁 内外面をヨコナデ	含長石 石英粒	淡橙灰 白色	河道
壺	271	22.0cm	—	—	外面ナナメハケ内面ナナメハケ後口縁部内外 面ヨコナデ後口縁内部端部ヨコハケ	含長石 石英粒	淡茶灰 色	河道
底 部	272	—	—	5.4cm	焼成前空孔が底面真ん中にあり、外面 タテミガキ内面ナナメハケ	含長石 石英粒	橙灰褐色	河道
壺	273	18.0cm	—	—	縫部に粘土粒を貼り口縁とし、上端に 直線文頭部以下に竹管文ヘラ沈線5条 を巡らし、内面ヨコミガキ。	含長石 石英粒 雲母粒	淡赤褐色	河道
壺	274	26.0cm	—	—	外面タテハケ後ヨコミガキ、内面ヨコ ミガキ後口縁内外面ヨコナデ頭部以下 9条のヘラ沈線を巡らす。	含長石 石英粒	淡茶灰 色	河道
壺	275	22.0cm	—	—	口縁外端にキザミ、頭部以下に10条の ヘラ沈線と刺突文を巡らす。	含長石 石英粒	淡橙灰 色	河道
壺	276	26.0cm	—	—	頭部に粘土粒を貼りキザミを巡らし口 縁とし、頭部以下に11条のヘラ沈線を 巡らす。	含長石 石英粒	淡橙灰 色	河道
深 鉢	277	26.0cm	—	—	口縁端部にキザミを巡らし、外面に半 截行管文を施す。	含長石 石英粒	淡茶灰 色	包含層
深 鉢	278	—	—	—	外面ヨコ方回の条文、内面ナナメハケ	含長石 石英粒	淡茶灰 褐色	包含層
浅 鉢	279	28.0cm	—	—	内外面ヨコミガキ後ナナメハケ	含長石 石英粒 砂的粒	淡茶灰 褐色	包含層
壺	280	22.0cm	—	—	口縁部と頭部の境に浅い段があり、外 面ヨコミガキ、内面ナナメハケ	含長石 石英粒	淡橙灰 色	包含層
壺	281	—	—	—	外面頭部中位に2条のヘラ沈線が巡 り、外面ヨコミガキ内面ナナメハケ	含長石 石英粒	淡橙灰 色	包含層
壺	282	—	—	—	外面ヨコ3条、タテ3条の浅いヘラ沈 線が施される。	含長石 石英粒	淡橙灰 白色	包含層
壺	283	18.0cm	—	—	口縁部外端にキザミを巡らす。	含長石 石英粒	淡橙灰 色	包含層
壺	284	22.0cm	—	—	頭部にヘラ沈線が1条巡る。	含長石 石英粒	橙褐色	包含層
壺	285	38.0cm	—	—	内外面ヨコミガキ後口縁内外面ヨコナ デ、口縁端部にキザミ、頭部に3条の ヘラ沈線を巡らす。	含長石 石英粒	淡赤褐色	微高地 北斜面
壺	286	—	—	—	口縁端部にキザミを巡らし、頭部から 底部にかけて浅いヘラ沈線が2条巡 る。	含長石 石英粒	淡茶灰 色	微高地 北斜面
高 坩	287	—	—	—	脚部と坏部の接合部分の小片で外面に 断面三角形の粘土粒が巡る。	含長石 石英粒	淡橙灰 色	包含層
壺	288	—	—	—	底部付近の小片で外面に浅い擦刻が施 される。外面タテミガキ、内面ナナメ ハケ	含長石 石英粒	淡橙灰 色	包含層

(草原孝典)

## 第四章 自然科学的分析

### 百間川沢田遺跡出土赤色顔料の理化学的評価

#### 1. 分析対象および方法

小型壺（溝17出土）に入っていた赤色顔料は、(A)岡山県工業技術センターおよび(B)戸田工業株式会社とに分析を依頼した。

(A)岡山県工業技術センターでは、赤色顔料の一部を採取し、X線回析分析を行った。その結果、 $\alpha-\text{Fe}_2\text{O}_3$  が検出されベンガラと認定された。(図120参照)

(B)戸田工業株式会社では、無処理状態の赤色顔料の SEM (Scanning Electron Microscope - 走査型電子顕微鏡) 観察、およびEDX分析 (Energy-dispersive X-rays Microanalyst - エネルギー分散型X線分光装置) を行った。しかるのちに、Pt-Pdコーティングを施し(約100Å処理) SEM観察を行った。

検査にあたっては、試料の均一化を図るために、壺の底部、腹部、口頭部の3ヵ所から匙にて採取し、各部試料を混合して用いた。

#### 2. ベンガラ評価結果

戸田工業株式会社における各種の観察と分析の結果を、写真を添えて紹介する。

##### ① SEM観察

試料が無処理状態でのSEM観察は、現在の代表的な形状である粒状、針状、立方状のものはあまり見られず、#5700・#5799に示されるように板状、丸太状、岩石状など、さまざまな形状が見られた。しかし、Pt-Pdコーティングを施しての観察では、#6230を拡大した#6234と#6238から、丸太状のものは板状および粒状粒子から成っていることが判明した。

##### ② EDX分析

Fe、Si、Al、Kの四元素が検出され、その分布状態は  $\text{Fe} > \text{Si} > \text{Al} > \text{K}$  という結果であった。Fe、Si、Alの各元素による面分析結果 (#5791-#5793) により、岩石状のものは粘土あるいは砂と考えられ、ベンガラは#5700にみられる丸太状および板状のもの、または#5799に見られる粒状のものと推定される。

##### ③ ラッカーチェン

JIS法に基づいて、ラッカーチェンにより原色及び展色 ( $\text{TiO}_2 \times 3$ 倍) で、色相、着色力、遮蔽力の評価をした。着色力、遮蔽力共に、現代の鉄酸化物より著しく劣る。また、

色相は、ボーキサイト残滓に類似している。

#### ④ 水分検査

乾燥試験（120°C）による減量は17.2%であり、相当量の水分が検出される。但し、出土状況等勘案し、固有含水量とは断定できない。

#### ⑤ 焼成検査

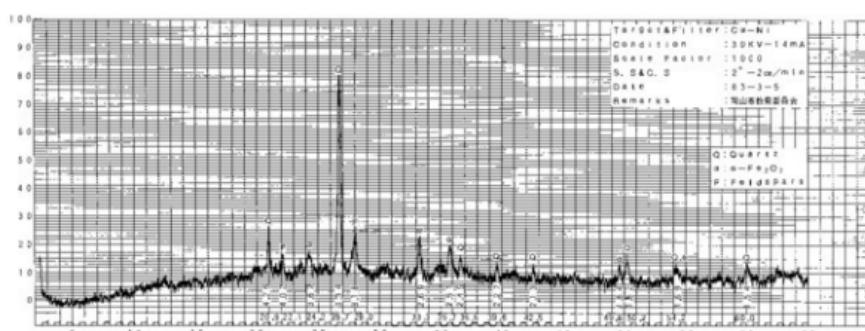
坩埚中で400~500°Cで焼成すると、色相面で赤味が強くなった。加熱により粒子成長を起こし、赤味が強くなったり、 $\alpha-\text{FeO} \cdot \text{OH}$  や  $\text{Fe}_3\text{O}_4$  分が酸化され、 $\alpha-\text{Fe}_2\text{O}_3$ （ヘマタイト）になったためと推察される。

#### ⑥ まとめ

各種観察と分析から当試料は、SEM観察で板状・粒状の各形状が認められ、現在の代表的な形態とは若干異なることが示された。また、着色力・隠蔽力共に、現代の鉄酸化物より著しく劣ることも示された。

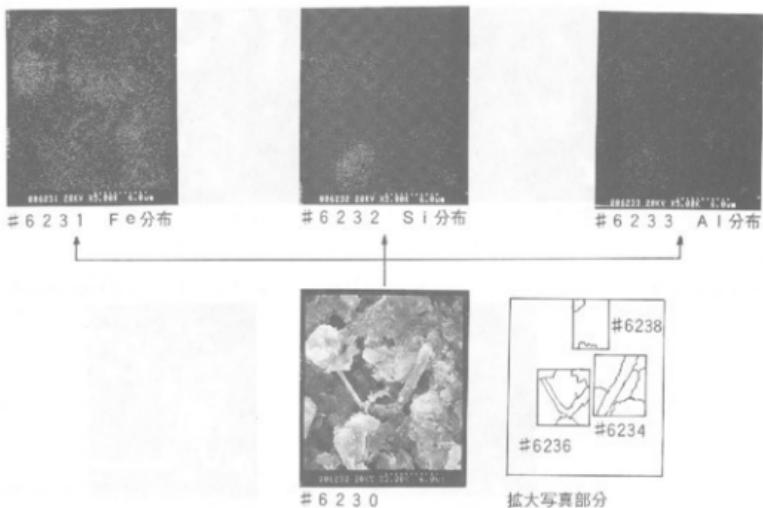
当報告は、戸田工業株式会社から提出された報告をもとに、神谷が編集しなおしたものである。したがって、文章上の責は神谷が負う。本来の分析結果を歪曲していないか恐れる。本来ならば原本のまま公表すべきであるが、貢献の関係で止むなく編集させていただいた。にもかかわらずこのような形での掲載に、快く承諾していただいた戸田泰夫氏と戸田工業株式会社の皆様方に感謝いたします。

(神谷正義)

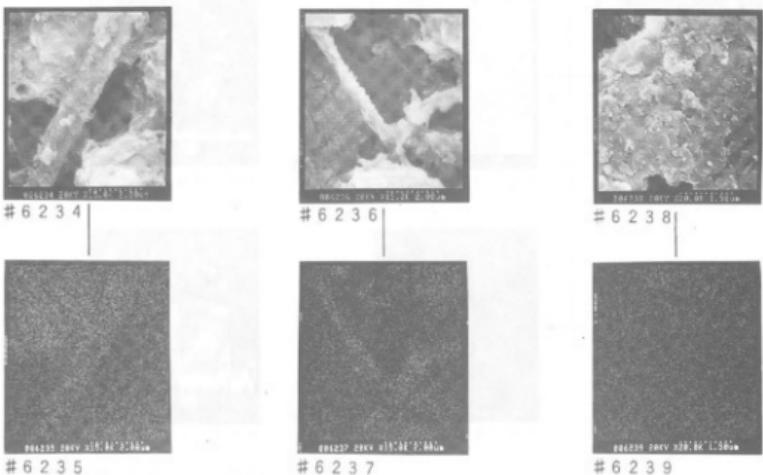


第120図 X線回折表

## #6230 視野における Fe, Si, Al の分布状態

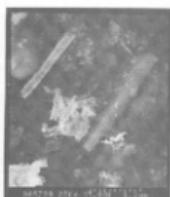


## #6230 の各部拡大写真及び Fe の分布状態

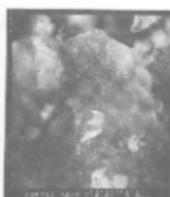


第121図 SEM写真及びEDX分析写真1

SEM写真

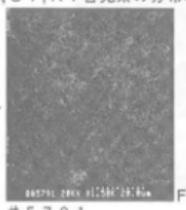


# 5 7 9 9



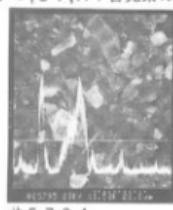
# 5 7 9 9

# 5 7 9 9 視野における Fe, Si, Al 各元素の分布状態

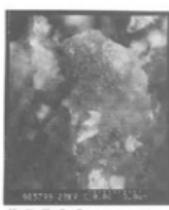


Fe の分布  
# 5 7 9 1

Fe, Si, Al 各元素の線分析写真



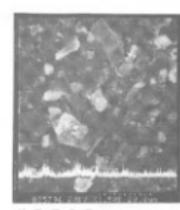
Fe 線分析  
# 5 7 9 4



# 5 7 9 9



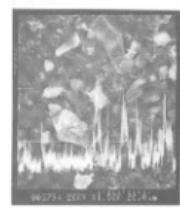
Si の分布  
# 5 7 9 2



Si 線分析  
# 5 7 9 5



Al の分布  
# 5 7 9 3



Al 線分析  
# 5 7 9 6

注) 写真下部の白線は、横一直線上におけるそれぞれの元素の強度を示す。

第122図 SEM写真及びEDX分析写真 2

## 第五章 結語

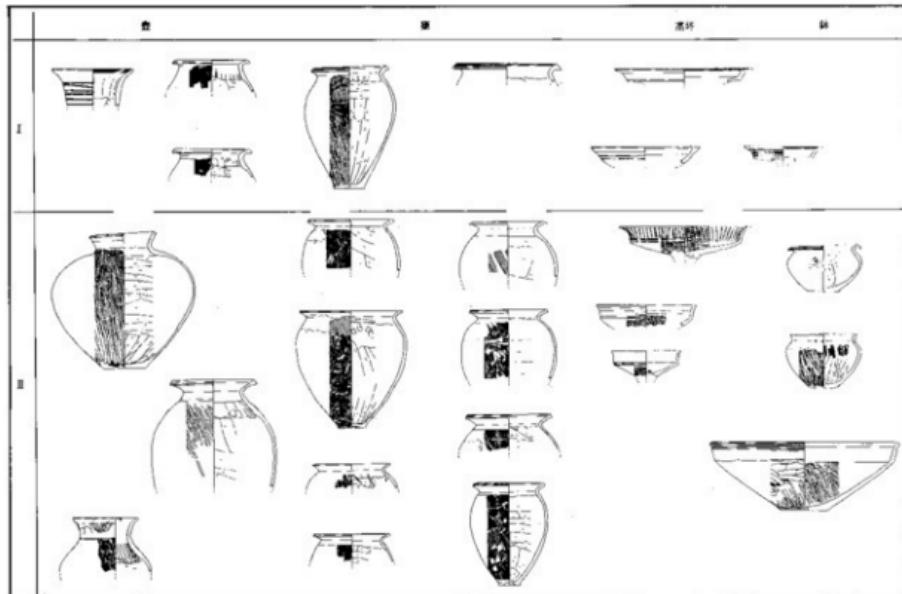
旭川放水路（百間川）工事に伴う大規模な発掘調査により、旭東平野南部、地形的には旭川から分流して南東方向と南西方向に流れていると推定される大規模な旧河道に挟まれた東西約3km、南北約1.5km内及び周辺地域に展開する遺跡群の動向を広く面的にとらえている。弥生時代の水田遺構の構造的な復元作業をはじめ調査の成果は岡山県南地域内の事だけに止まらず、汎日本的な位置付けがなされつつある<sup>33</sup>。

さて今回の調査地は百間川遺跡群の中央やや西よりの所謂百間川河道敷内で第二微高地<sup>34</sup>と認識されている地点の北側に当たる。百間川河道敷内の沢田遺跡<sup>35</sup>は弥生時代前期を中心とした時期の集落ののる微高地で、その微高地は低水路部の調査区内北側で一旦低くなつて終り、そこよりさらに北に位置する樋門部<sup>36</sup>の調査区内では、南側の微高地とは別のものと思われる北へ伸びていく微高地の端部を確認している。つまり本調査区と樋門部の調査区とは現百間川堤防を挟んで距離的にも殆ど隔りがないことなどから、本調査区で確認した微高地の北端部は樋門部で確認された南端部と同一微高地のものであることが推定でき、従つて今回調査した微高地の南北幅は約90m程ということになる。

調査区内で確認された遺構は南側では弥生時代前期から中期と後期の時期の住居跡、土壙等で、微高地上に展開した集落の一端であると考えられる。また北側では弥生時代前期から中期中頃までの土器を含む河道の埋没後に於ける水田形成と、微高地部の開削による水田面の広がりの時間的な変遷過程の一部を示す水田畦畔をとらえた。これは現百間川河道敷外に広がる水田遺構の存在状態を示す実例<sup>37</sup>の1つとなろう。

百間川河道敷内で確認された微高地上の集落関係の遺構は、弥生時代に限ると、前期に主体を置くもの、中期に主体を置くもの、後期に主体を置くもの、比較的小規模で複数の時期に存在するもの等様々なケースがあり、これらは恐らく沖積地に展開する弥生集落の有機的な結合関係を反映しているものと推測される。当調査区内の中期後半と後期後半の欠落という遺構の有り様もそれに規定されているものと推定でき、当地点の調査が百間川遺跡群の総体を理解する上で無視できないものであると思われる。

なお弥生期以外の集落関係の遺構で明確なものは古代～中世にかけての少數のピットだけで、調査区周辺が主に水田として利用されていたという最近の景観に近い状況が、弥生後期末の洪水砂形成以後から現代まで続いているものと思われる。



第123図 出土弥生後期土器分類図

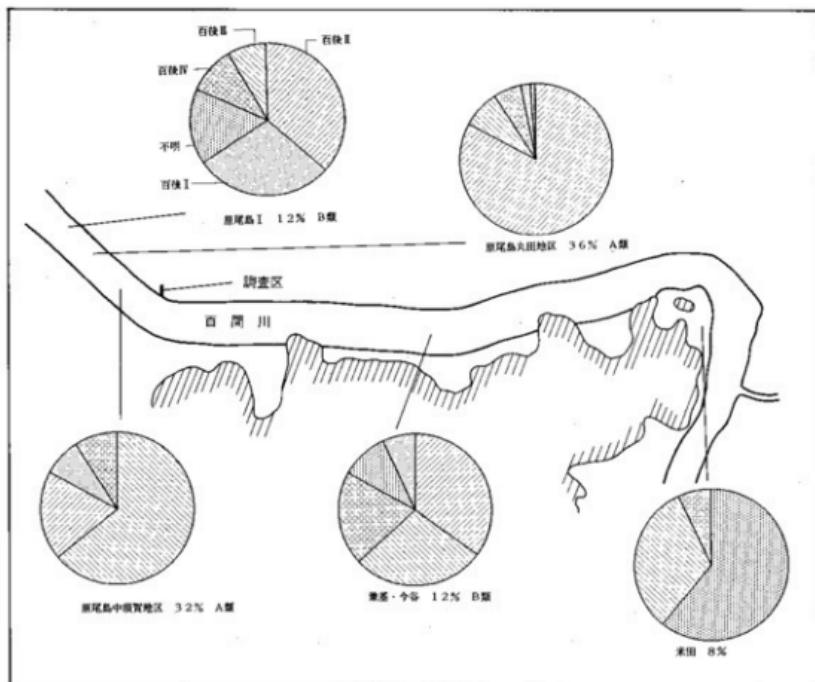
### 1. 弥生時代後期

当調査区内に於ける後期の遺構は微高地端部周辺に偏る傾向が見られる。ただⅢ区中央付近から南にかけては近世の遺構によりかなり深くまで削平を受けており、本来はもっと広くに存在していたのかもしれない。遺構の密度は比較的稀薄で、出土した後期の土器もコンテナ5箱程度で量的にも少なく、遺構の密度と矛盾しない。土器が纏まって出土したのはⅠ区の住1の柱穴3、Ⅲ区のP159と井戸だけで、他は小片が主である。

さて、まず出土した土器から当集落遺跡の後期の中での時期的位置を見て、さらに百間川遺跡群の集落遺跡との比較から当集落遺跡の性格を大まかに確認しておきたい。

出土した土器は2群に分類できる。即ち壺は外面タテ方向のハケメ調整の後に胸部下半にタテヘラミガキを施し、内面頸部やや下がった位置にヘラケズリを行い平底のものをⅠ類とし、外面ハケ調整のみで内面頸部屈曲点からヘラケズリ<sup>10</sup>を行い上げ底気味の底部のものをⅡ類とする。高坏は口縁端部を外側に拡張、或いは拡張気味にしているものをⅠ類、していないものをⅡ類の目安とし、それぞれに共伴する土器を手掛かりに並べたのが図123である。Ⅰ類とⅡ

類の差はⅠ類がより中期に近い要素が顕著であることから、時間的な前後関係を示すものと考えられる。次に旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査の報告書で整理と分類がされている後期の土器の成果<sup>16</sup>に即してⅠ、Ⅱ類の土器を見てみる。まず比較的器種の多いⅡ類土器と近い内容を持つのは原尾島遺跡丸田調査区井戸-16<sup>17</sup>である。井戸-16出土土器は器種の分類や編年的な位置付けの明快な分析がなされており<sup>18</sup>、その成果からⅡ類の土器を見ると、高环に円板充填の名残と思われる部分が認められること、壺の副部最大径が上半にあり、しかも底部が突出して上部底状をしている等井戸16と技法、成形上の共通要素が認められる。またそれ程幅広い時間枠で存在していたとは思われない形態の鉢24、鉢29と同じものが井戸16に存在する。以上のこと、特に前者については井戸16の編年的な位置付けの指標となっており、Ⅱ類の土器は井戸16の示す時期と同じ後期中葉の前半、百間川後期Ⅱ古相<sup>19</sup>の範疇に入るということが言えそうである。Ⅰ類については器種が少なく明確でないが、高环や壺7と同じ形態の土



第124図 百間川遺跡群弥生後期遺構数割合図

器が原尾島遺跡新田サイフォン調査区土壤<sup>17</sup>に含まれており、それが井戸16より時期的に先行する様相であることからⅠ類も近い時期の範囲と思われる。ただ壺7と共に伴する壺9は胴部下半にヘラミガキを施し口縁端部に凹線を巡らすものの、凹線は浅く退化気味で、体部の形態も土壤1に含まれる壺がナデ肩気味であるのと異なり肩が張っており、Ⅱ類に近い要素がかなり見られ、Ⅰ類とⅡ類の変化には時間的な隔りが殆どないことが予想される。

次に百間川河道敷内での調査で確認されている弥生後期の集落遺跡の遺構を時期別に集計して、その密度差を模式化し、本調査区の集落遺跡の性格を簡単に整理してみる。ただ集落の存在する微高地が後の水田耕作等により大なり小なりの削平を受けていることや、微高地全体の調査が成されていないという条件が有るもの、大凡の傾向を示す資料として各調査地点ごとに検出された遺構を報告書<sup>18</sup>の示す時期別に集計して、各調査地点に於ける遺構数の時期ごとに占める割合をグラフ化し、その数値を各地点の集落の存続期間或いは盛高する期間を示すものと仮定した。同時に全調査地点の後期の総遺構数に於ける各調査地点の遺構数の割合も数字で示し、各調査地点の集落の相対的な規模を示すものと仮定した（図124）。

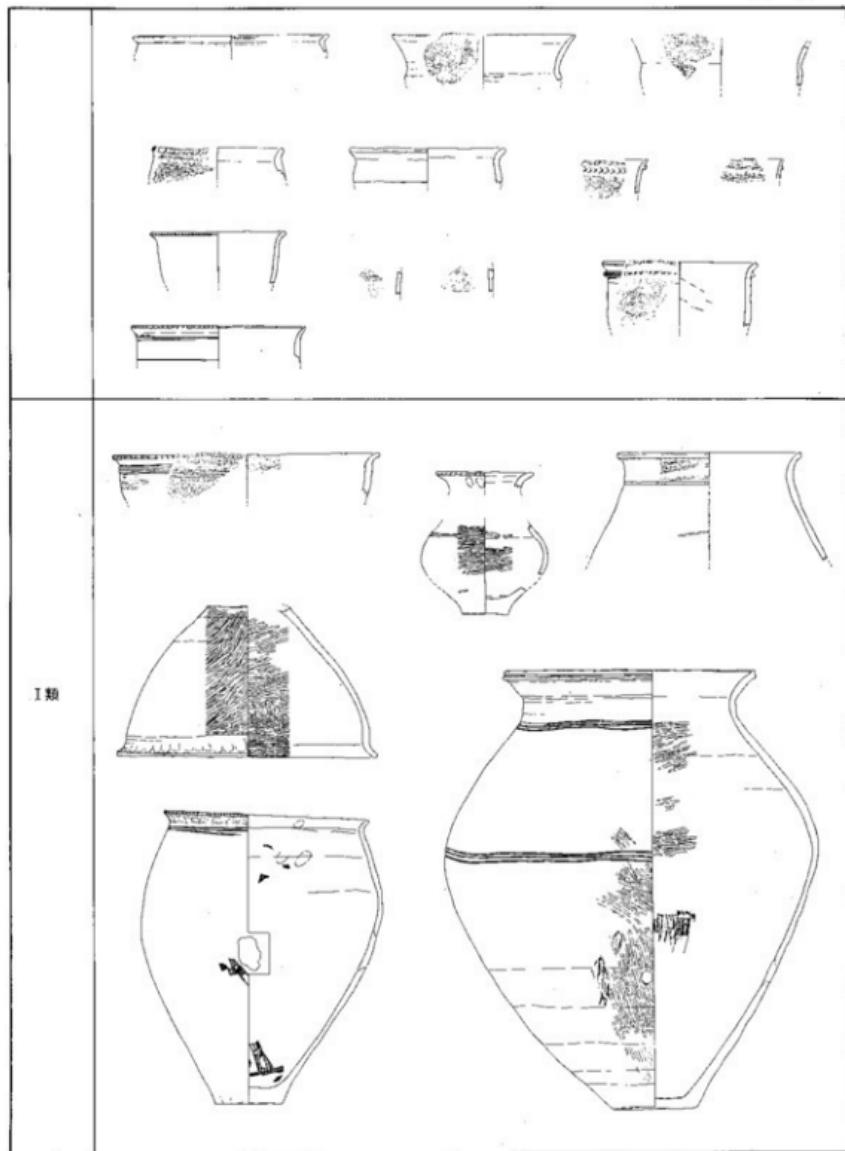
この図から、比較的单一の時期に集中して多くの遺構が形成される集落と、複数の時期にそれ程多くない数の遺構が形成される集落の2者の存在が見られる。前者を仮にA類、後者をB類とすると、A類は周囲で同時期に複数存在しないことから、恰も同一の主体が移動したというような有り様が想定できる。これは旭川東岸の沖積平野の集落遺跡の動向を把握する程調査が及んでおらず即断はできないが、仮定として畿内やその他の各地で認識されている弥生の拠点集落、母集落<sup>19</sup>と同様な意味を持つ集落と理解できるのではないかと思われる。

そうすると当調査地点の集落は調査区内の知見に基づく限りB類であるが、兼基・今谷遺跡等と比べてそれ程遺構形成の時期幅が長く無いという特徴があり、B類は遺構の形成時期幅の長短によってさらに分類できる可能性も予想される。ともあれ当調査地点の集落は付近にA類の集落が移動しながら存在しているのには並行して形成され、見掛上はA類原尾島遺跡の母村に対しての子村のような位置付けができるのではないかと思う。

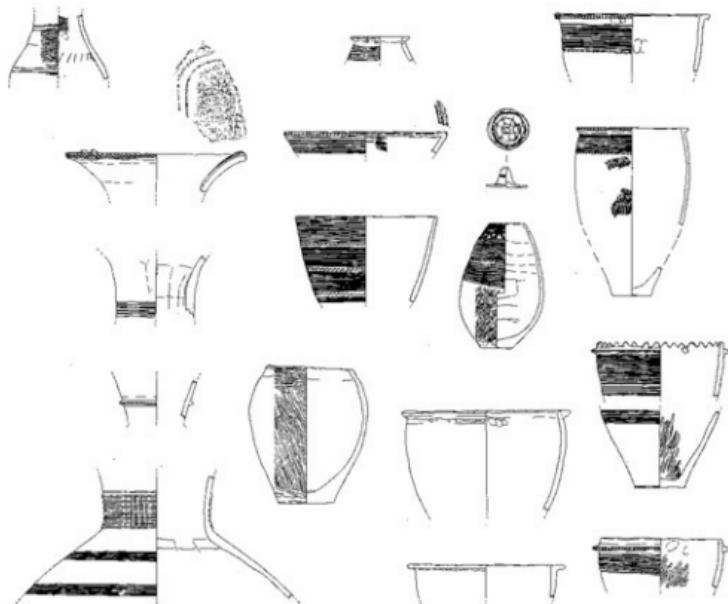
## 2. 弥生時代前期・中期

当該期のうち前期は本調査区で検出された遺構、遺物の量が最も多い。この状況は当調査区から南へ300m程の位置にある百間川河道敷内の沢田遺跡<sup>20</sup>の様相と似ており、異なる微高地間で並存するという当該期の集落構造の有り様も想像される。

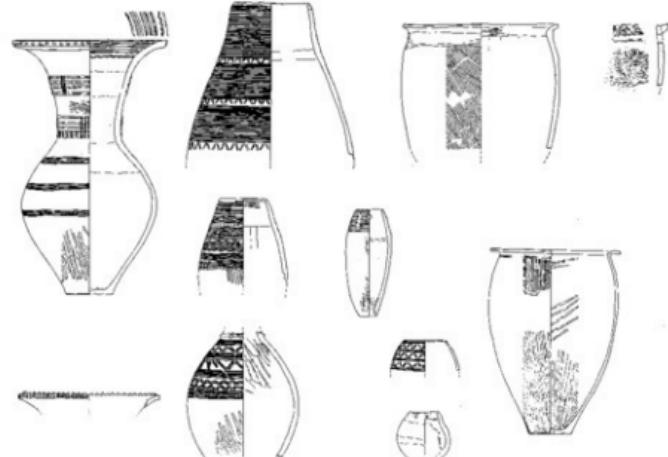
さて、まず断片的なものが大半が出土した土器を分類し、今までに行われてきた編年成果と照らし合わせて時間軸を設定し、それを基に遺構の時期ごとの変遷を整理してみる。



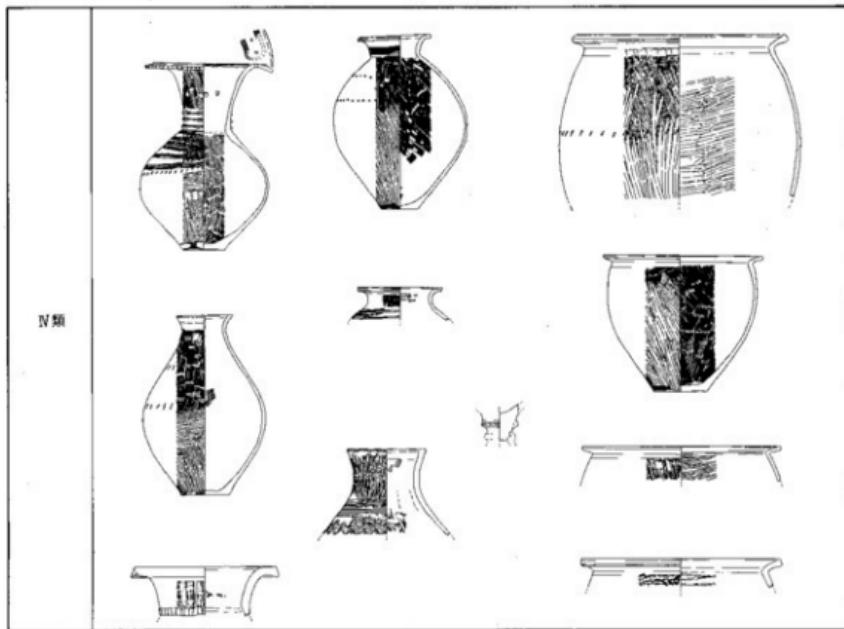
第125図 出土弥生前・中期土器分類図(1)



II類



第126図 出土弥生前・中期土器分類図(2)



第127図 出土弥生前・中期土器分類図(3)

### 土器

出土土器の分類は施文を主な指標とした。まずヘラ状工具で施文するものと、クシ状工具で施文するものに大別でき、前者はさらに3条程度を巡らすものとそれ以上の多条を巡らすものとに分けられる。後者もヘラ状工具とクシ状工具施文の土器が同一遺構内に存在するものとクシ状工具施文のもののみとに分けられ、全体として4種類に分けた。なお縄文晩期の土器とヘラ状工具による施文の行われない弥生土器も若干存在するが、それらは全て他時期の遺構内への混入か包含層出土で、明確な遺構がないことや量的にも僅かなことから分類には入れなかつた。ただ220の突帯文土器は器壁も厚く、器形も口縁端部をくの字に折り曲げており他の突帯文土器とはやや異なり、むしろ弥生土器に近い感じを受ける。百間川遺跡群内で似たような土器は原尾島遺跡丸田調査区の河道<sup>30</sup>で一点出土している。こういった土器は、九州の有明海北岸部を中心に分布する「亀ノ甲式」<sup>31</sup>、東九州から南九州に分布する「下条式」<sup>32</sup>や、紀伊半島を中心に分布する「紀伊形壺」<sup>33</sup>や、田能遺跡第4N調査区第20溝出土壺<sup>34</sup>などの縄文晩期刻目突帯文土器の系譜を引く弥生時代の土器といったものと同じ意味を持つ可能性もあると推定できる。なお220の土器はI類の土器と同じ溝内から出土した。

**I 類土器 (図125)**

器種は壺と甕のみで他は確認できなかった。施文は甕の頭部に3条のヘラ描き沈線、口縁端部にキザミを巡らす。壺は頭部に沈線化した段もしくは3条のヘラ描き沈線を施した頭部と胴部の境、また胴部最大径付近に3条のヘラ描き沈線、あるいは削り出し段上に沈線を施す。

**I 類土器**は断片的であるが「高尾式」に近い内容が看取され、高橋編年のIc期<sup>14</sup>、藤田編年の前期前半b期<sup>15</sup>、井藤編年のIc期<sup>16</sup>に相当すると考えられる。

なお壺177は頭部施文の上方で若干間隔をあけて屈曲し、口縁部外端に深い沈線を巡らすことや、外面の施文位置などに付近の地域ではあまり見られない特徴を有している。ただ愛媛県松山市の西野畠遺跡出土の壺棺<sup>17</sup>がやや丈高であるが非常に似ており同一系統の土器であることも推測される。

**II 類土器 (図126)**

調査区内で検出された遺構、遺物のうち最も多い。器種は壺、鉢、甕が確認された。甕は朝顔形に開く形態のものと、短くくの字状に外反するもの、胴部から緩やかに頭部へと移行するもの、胴部からそのまま窄まる無頸壺形のものがある。施文は胴部や頭部に2条程のヘラ描沈線から帶状沈線文を巡らすもの、貼り付け突帯やさらに棒状浮文を貼り付けるもの、口縁端部にキザミや沈線、内面にキザミを入れた貼り付け突帯や刺突文を巡らすものがある。無頸壺形のものは無文と多数の沈線で施文されたものの2者が存在する。後者は半截竹管による鋸歯文と、刺突文や太い沈線文と細い沈線文を交互に施す和泉地域で特徴的な「太細併用沈線文様」<sup>18</sup>に近い特色を持つ。また蓋には半截竹管による施文が2条巡らされている。

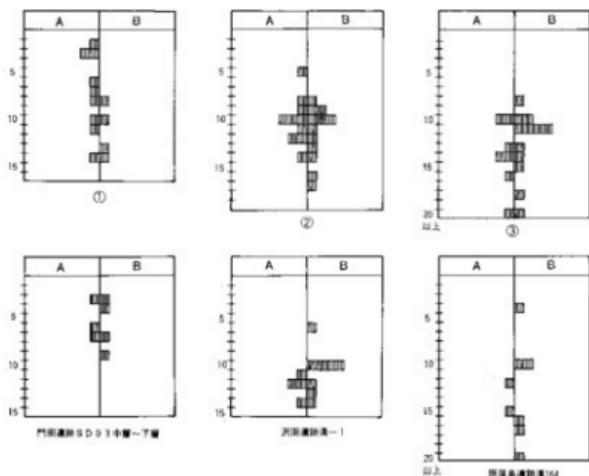
鉢は直口で外面に沈線文と刺突文を交互に施すものと、口縁端部内面に粘土紐を貼り付け上面に刺突文、外面に刺突文と沈線文を施すものがある。後者は今里幾次氏により東海地方の水神平式との関係を指摘された小山畠地点出土土器<sup>19</sup>と似ている。

甕は口縁部が端部を外反させるものと、粘土紐を貼り付けるものとがあり、前者にはさらにくの字状に外反するものと逆L字状に外反するものとがある。施文は口縁端部にキザミを巡らすもの、頭部以下にヘラ描沈線を多条巡らすもの、胴部に刺突文、円形浮文を巡らすものと、全く施文されないものとがある。また粘土紐を貼り付けて口縁部とするものには端部をやや下がった位置に付けるものと、さらに上面を波状に整形するものとがある。前者は邑久町船原梶ヶ端貝塚<sup>20</sup>に類例があり、他には兵庫県加古川市砂部遺跡<sup>21</sup>等がある。後者は器形が異なるが小山遺跡畠地点出土の壺<sup>22</sup>や兵庫県姫路市丁・柳ヶ瀬遺跡B地区出土の鉢<sup>23</sup>に見られる。両形態の土器は播磨から備前にかけての特徴であろうか。なお向形態の甕には縄文晩期の刻目突帯文鉢や波状口縁浅鉢の形態との類似点が指摘でき、縄文晩期系土器の情報を内包する弥生土器という見方もできる。

II類土器は極めて多様化したヘラ描沈線文や甕口縁部の形態、貼り付け突起手法の盛用などの特徴から高橋編年 II b期<sup>30</sup>、

藤田編年前期後半 b期<sup>31</sup>、井藤編年 II b期<sup>32</sup>に相当すると考えられる。

ところで I類と II類には若干の時間的な間隔が看守され、それを甕の



第128図 ヘラ描沈線文条数分布図

ヘラ描沈線の多様化の過程を指標に、比較的单一時期に近い状態で出土したと推定される周辺地域の資料と合わせてグラフ化して埋めてみる。まず口縁部の作り方から縁部を折り曲げたものをA、粘土紐を貼り付けたものをBとし、頸部以下に施されたヘラ描き沈線の度数を横軸に、縦軸に线条として記入したのが図128である。図128-1は南方遺跡<sup>33</sup>、図128-2は当調査区、図128-3は原尾島遺跡<sup>34</sup>の遺物で、図128-3には頸部にクシ状工具で施されたものが伴うことが指摘されている。図128の傾向を簡単にまとめると、1は5~10条の間が多い、2は10条前後に集中するのと15条以上の出現、3は7条以下の激減と20条以上の出現ということになり、これらは线条の多様化する段階を示しているということも言えそうである。またAとBの割合も1がA:B=6:4、2が5:6、3が7:12というように、端部に粘土紐を貼り付けて口縁部とする新しい手法が顕著になっていく傾向と一致することも指摘できる。それと沢田遺跡横田調査区溝1<sup>35</sup>は図128-2と、原尾島遺跡三ノ坪調査区溝164<sup>36</sup>は図128-3と、門田遺跡SD03中層～下層<sup>37</sup>は図128-1と傾向がほぼ似ており、上記の推定をさらに補足させられる。つまり〈I類〉→図128-1→〈II類〉→図128-3の段階がヘラ描き沈線多様化の過程として設定でき、それがヘラ描き沈線文の多様化を指標とする弥生前期後半の土器の編年序列に近いものであると思われる。

なお頸部以下にクシ状工具で施された甕は図220-3<sup>38</sup>や沢田遺跡高繩手A調査区土壤68<sup>39</sup>などでヘラ描き施文の甕に伴うものの、一方米田遺跡でクシ描き施文の土器に伴って存在するこ

とから、この種の壺は前期末から中期初頭にかけて主流となる壺とは異なる系譜で存在し、またそのことからこの壺を指標として時間枠を設定することは困難であると推定している。

### III類土器 (図126)

土器の量はそれ程多くない。器種は壺、鉢、甕が確認された。それぞれの器種にクシ描き文が観察される。器形的にも前期の器形を脱却しつつあり、過渡的な様相が伺われる。朝顔形に口縁部が開く形態の壺は胴部のヘラ描き沈線がクシ描き直線文に変わる。壺等に施文されるクシ描き文は単帯構成と複帯構成の両方が見られ、それぞれ直線文と波状文がある。甕は頸部以下にクシ描き文を施したものと、端部をくの字に折り曲げて口縁部とし外面に施文を行わないものがある。後者は次第に胴部が膨らんでくる傾向があり、また頸部以下の一定幅をヨコナデやタテハケを行って前期のヘラ描き文のあった部分を意識している点も看取される。口縁端部は面取りを行わず丸くおさめてある。

III類土器は断片的な資料であるが、内容的には「千代田II式」<sup>30</sup>に近いと考えられる。

### IV類土器 (図127)

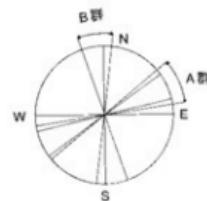
土器の量はそれ程多くない。器種は壺、鉢、高壺、甕が確認された。壺は断面台形の貼り付け突帯とクシ描き文を併用し、恐らくII類の壺の系譜を引くラッパ状に開く口縁を持つものや、短く外反する口縁部を持ち頸部にヨコハケ状の施文、胴部に刺突文を巡らしたもの、胴部から緩やかに口縁部へ移行し上端に面を持ち刺突文や直線文や波状文を巡らしたもの、頸部から急に大きく屈曲する口縁部で端部が下方にやや大きく拡張し頸部外面に押圧痕のある粘土紐を貼り付けるものなど器形、施文に様々なバラエティーが看取される。甕は外面上方タテハケ下方ヘラミガキ、内面ヘラミガキかハケ調整で、施文は胴部に刺突文を施すものが見られるのみである。端部はIII類と同じく丸くおさめるものと、面取りするもの、若干上方にナデ上げるものがある。

IV類土器は非常に断片的な資料であるが、南方遺跡（国立病院）B、C区間土器溜まり<sup>31</sup>や、門田遺跡 SD10<sup>32</sup>と近い内容と考えられる。

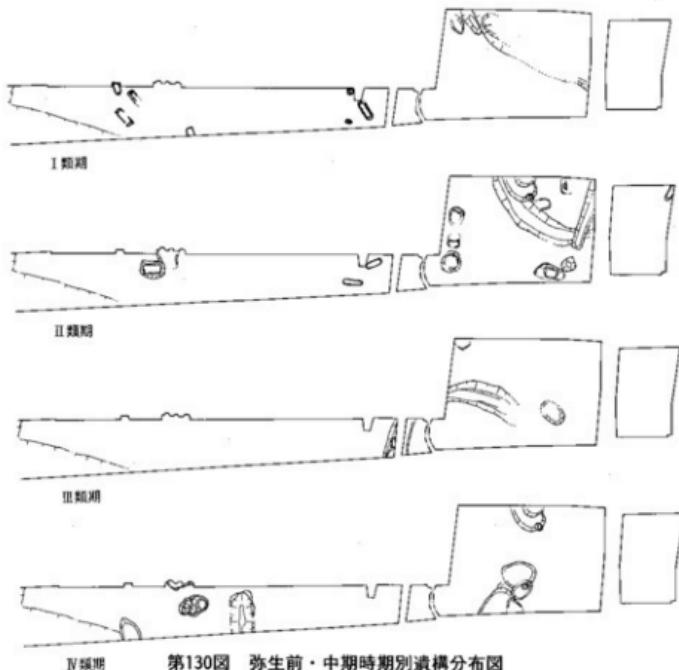
以上I～IV類の土器を概観したが、何分量的にも少なく不明瞭な点が多い。ただ簡単にまとめるとI類、II類が前期、III類、IV類が中期、段階的にはI類⇒O⇒II類⇒O⇒III類⇒IV類となり、I類とII類、II類とIII類の間にギャップがある。また一応の目安としてI類、II類を畿内第I様式、III類を畿内第II様式、IV類を畿内第III様式並行<sup>33</sup>と考えておきたい。

### 遺構

以上の分類を時間軸にし、検出された遺構の変遷を図化した（図130）。ただ棺痕跡を持つ土



第129図 墓壙長軸方向分布図



第130図 弥生前・中期時期別遺構分布図

墳墓や長方形プランの土塙墓については埋土内にも土器が殆ど検出されておらず、時期を決定することは困難であるので、墓壙長軸の方向性(図129)と遺構の切り合い関係から分けてみた。即ち長軸方向A類(図129)のP216がII類期のP86に切られていることや、長軸方向B類のうちP52にII類期の土器存在することや、B類(図129)のP219がA類(図129)のP220を一部切っていることなどの間接的な根拠からA類をI類期、B類をII類期と考えた。

### I類期

棺痕跡のある土塙墓とない土塙墓と土器棺墓が約12m程の空間を挟んで長軸方向を揃えて列状に南北に群をなす様に存在する。北群には南群と異なり土器棺墓が検出されていないが、後の削平を受けやすい微高地端部に位置することや、付近から土器棺墓の一部とも考えていいような甕片が検出されており、本来は北群にも南群と同様に土器棺墓が存在していたことも推測される。

### II類期

近世の掘削の著しい調査区南端以外の調査区全体に土塙墓が形成されている。土塙墓は形態

によって幾つかに分類できる。まず方形または梢円形のプランで断面縁形の深い掘り方を持ち、棺痕跡は確認されなかったが埋土から何らかの棺相当の施設が存在したものと推定されるものと、長方形のプランで比較的掘り方が浅いものと、棺痕跡のある土壙墓で周囲に円溝を巡らすものとがある。墓群の構成は限定された面積の調査であるので明確でないが、まずⅡ区からⅢ区にかけて上記の3タイプの墓が塊状をなして存在し、またその塊から10m程の間隔を空けて土壙墓が調査区東端で検出されており、同様な墓群が東にも存在することが予想される。つまりⅡ類期の墓群配置は幾つかの土壙墓の塊を単位として形成されていたことが推定できる。

### Ⅲ類期

Ⅱ区からⅢ区にかけて溝状の遺構と、Ⅲ区に土壙が2基検出された。遺構数は少ない。

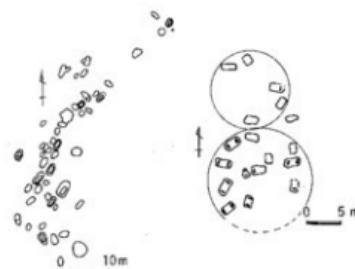
### IV類期

微高地端部とⅢ区に土壙が若干検出された。そのうち棺痕跡の存在するものが1基あり、周囲にやや纏まった土器の入る土壙が存在する。遺構数、出土した土器数共に少ない。

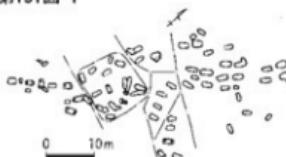
### 弥生前・中期の墓

今回確認された墓群の構造を少しでも理解するための中、四国地域の同時期の墓群と比較してみたいと思う。ただ同時期の墓については調査例もそれ程多いとは言えず、墓群全体を完掘した例も殆どないことから一部想定して整理してみた。

まず前期は鳥取県長瀬高浜遺跡<sup>28</sup>で、砂丘東側斜面に位置し、地形コンタに平行して墓壙長軸を描いて列状に分布する（図131-1）。同じく鳥取県のイキス遺跡<sup>29</sup>は墓壙の長軸方向にはらつきがあり、平面的にも環状に分布することが予想される（図131-2）。愛媛県西野Ⅲ遺跡は丘陵上に位置し、墓壙数も多いことや墓壙長軸方向から数単位に分けられることから、長瀬高浜遺跡の様な墓群が数単位集合したものと推定される。ただ長軸方向を合わせた墓群の他に何らかの枠組みの中に墓を形成した部分が見られ、福岡県中寺尾遺跡<sup>30</sup>などで確認されている前期の低墳丘墓であった可能性も考えられる（図131-3）。前期から中期<sup>31</sup>にかけては岡山県雄町遺跡<sup>32</sup>の墓群で、一部前期で大半が中期のものである。検出された墓壙約200基のうち約130基を



第131図-2  
第131図-1

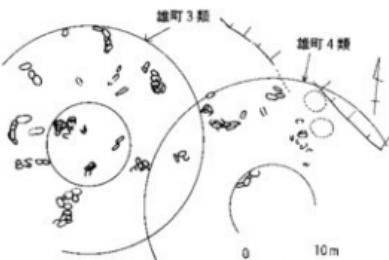


第131図-3  
第131図 土壙墓図(1)

発掘しており、他は保存されている。墓群は切り合って群在するものと、単独に存在するものとが確認されているが、ここでは2者の相違を時期差にも求められる可能性を考えて特に意識しないで、報告書で提示された遺構の検出面のレベル高と遺物の時期から図132の配置を推定した。切り合って群在する墓群が環状に分布しており、その中に求心的な墓は見られない様である。同じく岡山県の南方遺跡<sup>26</sup>では一部前期で大半が中期のものである。検出された墓群は同一微高地に展開する生活空間とはやや離れて形成されていたことが確認された。約250基の土塚墓が検出され、それぞれ切り合っているものの幾つかの単位が識別できる<sup>27</sup>。単位相互の配置関係は明確ではないが、やや広い空間地の存在を根拠に図133の様に推定した。

以上のことから簡単にまとめると、前期の墓群は列状、環状、墳丘墓状の配置をとる。列状、墳丘墓状は中寺尾遺跡<sup>28</sup>、塔ノ原遺跡<sup>29</sup>、ハサコの宮<sup>30</sup>遺跡など北九州地域でこの時期に見られ、当然北九州地域の影響を直接受けたことが推定できる。環状は木棺を用いるものの配置が円環状であることから、縄文時代の系譜を引く墓配置<sup>31</sup>であることが推定できる。つまり前期には2つの系譜を引く墓群があり、沢田遺跡Ⅰ類の墓群は調査区内の知見に基づく限り前者(列状)と考えられ、同じ様相の西野Ⅲ遺跡出土の土器棺と類似する土器棺を出土したことは示唆的である。前期後半は沢田遺跡Ⅱ類の例しかないが、円環状に配置する墓群の胚芽(図134)が見られ、この時期の土器にも縄文的な要素との融合表現<sup>32</sup>が主流となる。前期後半の前後に円形の溝を巡らす単位墓も存在するが、畿内の方形低墳丘墓<sup>33</sup>の様な世帯墓としての性格は顕在化しない<sup>34</sup>。中期になると円環状の配置をする墓群が安定、増大する傾向が見られる。

**水稻農耕の伝播、拡大の過程**  
底流には、大規模な労働力の投入を必要とする水田造成やその維持、管理に要する個別経営単位を越えた協業の必要性<sup>35</sup>という運動原理があり、一定段階まで常に集



第132図 土塚墓図(2)



第133図 土塚墓図(3)



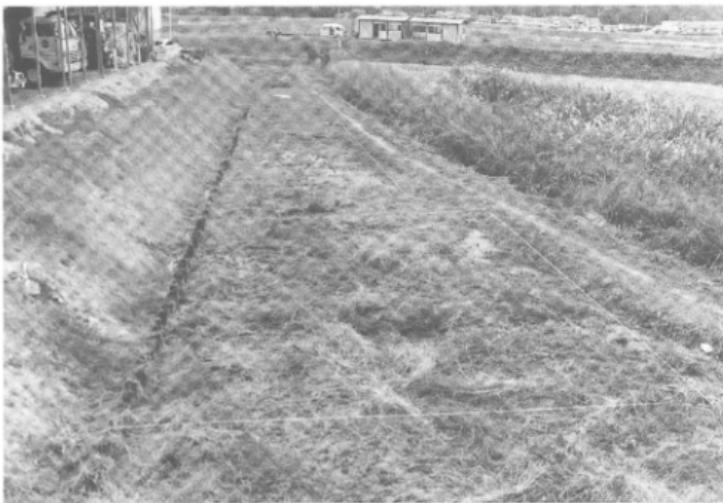
第134図 土塚墓図(4)

団構成の再編が伴っていたことが推定される。こうした集団構成の有り様は墓制にも直接的に反映されるものと思われる。そうすると、この地域でみられる前期から中期の墓制の変遷、即ち前期後半からの円環状の墓群配置と世帯墓、単位墓の潜在化が中期に於いて顕在化していくことは、いわば個人もしくは個別世帯的集団の突出を妨げるある種の共同体規制の強い集団関係が推定され、集団規模の拡大と生産域の拡大との相互作用によって生じる「余剰」が集団内へフィードバックされ、その繰り返しによる集団全体の向上、例えば生産性の向上をストレートに指向できる社会構造<sup>30</sup>が予想されるのである。

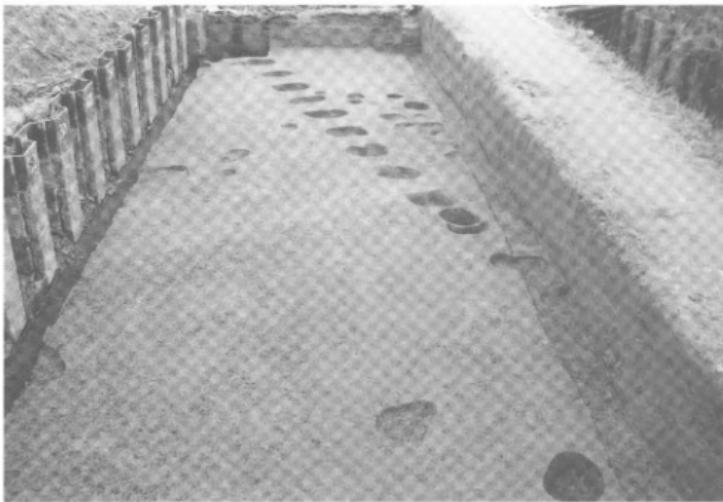
(草原孝典)

- 註1) 近藤義郎、河本清編『吉備の考古学—吉備世界の盛衰を追う』1987年福武書店  
 近藤義郎、河本清編『岡山県の考古学』1987年吉川弘文館  
 河本清「百間川遺跡群 水田が語る稻作技術」「原像日本5 発掘と復元」1988年旺文社
- (2) 岡田博他「百間川沢田遺跡2・百間川長谷遺跡2」岡山県教育委員会1985年
- (3) 高畠知功「0号発掘調査報告【1】藤原遺跡」「岡山県埋蔵文化財報告16」岡山県教育委員会1986年
- (4) これについては小地域性の問題もあり、ここでは供伴する甕の中に頭部屈曲点からヘラケズリするもののが存在するという意味で用いる。
- (5) 下澤公明「第3節弥生後期の土器」「百間川沢田遺跡2・百間川長谷遺跡2」岡山県教育委員会1985年
- (6) 岡田博他「百間川原尾島遺跡2」岡山県教育委員会1984年
- (7) 葛原克人他「百間川原尾島遺跡1」「岡山県教育委員会1980年
- (8) 葛原克人他「百間川原尾島遺跡1」岡山県教育委員会1980年  
 下澤公明他「百間川原尾島遺跡1・百間川今谷遺跡1」1982年  
 岡田博他「百間川原尾島遺跡2」岡山県教育委員会1984年  
 浅倉秀昭他「百間川沢田遺跡2・百間川長谷遺跡2」岡山県教育委員会1985年  
 平井勝他「百間川米田遺跡3」岡山県教育委員会1989年
- (9) 原口正三「大阪府安満遺跡と周辺の遺跡」「弥生文化の研究7」1986年雄山閣  
 都出比呂志「日本農耕社会の成立過程」1989年岩波書店  
 酒井龍一「弥生時代中期・畿内社会の構成とセトルメントシステム」「文化財学報第三集」奈良大学  
 田中義昭「南関東における初期農耕集落の展開過程」「島根大学法文学部紀要5-1」1982年
- (10) 藤尾慎一郎「弥生時代前期の刻目突帶文系土器—「亀ノ甲タイプ」の再検討—」「九州考古学第59号」
- (11) 森貞次郎「九州」「日本の考古学(4)」1966年
- (12) 井藤曉子「近畿」「弥生土器1」1983年ニューサイエンス社
- (13) 福井英治他「田能遺跡発掘調査報告書」尼崎市教育委員会1982年
- (14) 鎌木義昌・高橋謙「岡山県高尾遺跡」「日本農耕文化の生成」1961年
- (15) 高橋謙「山陽」「弥生土器1」1983年ニューサイエンス社
- (16) 藤田憲司「中部瀬戸内の前期弥生土器の様相」「倉敷考古館研究案報17」1982年
- (17) 長井数秋「西野(4)」「愛媛県営総合運動公園関係埋蔵文化財報告書(2)」1978年
- (18) 今里幾次「播磨考古学研究」1980年
- (19) 平井泰男「第7節船原塚ヶ籠貝塚」「熊山田散布地ほか」岡山県教育委員会1988年
- (20) 中溝康則他「砂部遺跡」加古川市教育委員会1978年
- (21) 同崎正雄他「丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書」兵庫県教育委員会1985年

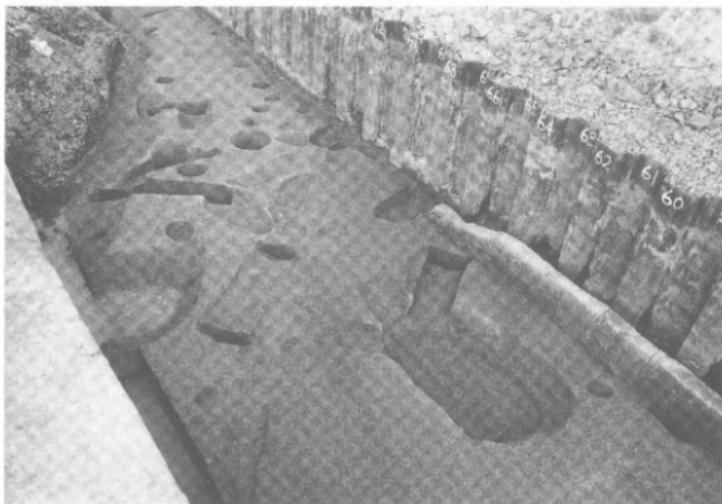
- ② 出宮徳尚他「南方遺跡発掘調査概報」岡山市教育委員会1971年
- ③ 下澤公明『百間川遺跡発掘調査報告書－百間川橋側歩道横設置工事に伴う発掘調査』『岡山県埋蔵文化財報告10』岡山県教育委員会1980年
- ④ 沢田博『門田貝塚』岡山県文化財保護協会1983年
- ⑤ 平井勝他「百間川米田遺跡3」岡山県教育委員会1984年
- ⑥ 杉原莊介・小林三郎「兵庫県千代田遺跡」「日本農耕文化の生成」1961年
- ⑦ 出宮徳尚・神谷正義・岡崎順子「南方（国立病院）遺跡発掘調査報告」岡山市教育委員会1981年
- ⑧ 小林行雄他「大和弥生唐古弥生式遺跡の研究」1943年  
佐原真「畿内地方」「弥生式土器集成本編2」東京堂出版1968年
- ⑨ 清水真一他『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書(5)』財団法人鳥取県教育文化財団1982年
- ⑩ 倉吉市教育委員会『イキス遺跡発掘調査報告書』1987年
- ⑪ 柳田康夫他「6集団墓地から王墓へ」『図説発掘が語る日本歴史6』1986年
- ⑫ 萩原克人他「雄町遺跡」「埋蔵文化財発掘調査概報」岡山県教育委員会1972年
- ⑬ 中間研志「塔ノ原遺跡」「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告(5)」福岡県教育委員会1974年
- ⑭ 上野精志「ハサコの宮遺跡」「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告(6)」福岡県教育委員会1974年
- ⑮ 泉拓良「縄文時代」「図説発掘が語る日本史4」1985年  
堀越正行「市川市株木東遺跡環状土壙墓群考」「史館18号」1985年
- 春成秀爾「土井ヶ浜集団の構造」「古文化論集上」1982年
- ⑯ 都出比呂志「日本農耕社会の成立過程」1989年岩波書店
- ⑰ 堂免遺跡で弥生時代中期の円形周溝墓が2基並んでいる（馬場昌一氏のご教示による）のが最も徳まつて検出された例である。
- ⑱ 後藤直「農耕社会の成立」『岩波講座日本考古学6』1986年岩波書店
- ⑲ 後期になると畿内を中心に主体となるナスピ形木製品が、中期後半に当地域で成立したことが南方笠田遺跡出土の木製品から観察されること等による生産具の先進性や、土器製塩やガラス生産の発達等が水稻耕作以外に見られる現象である。



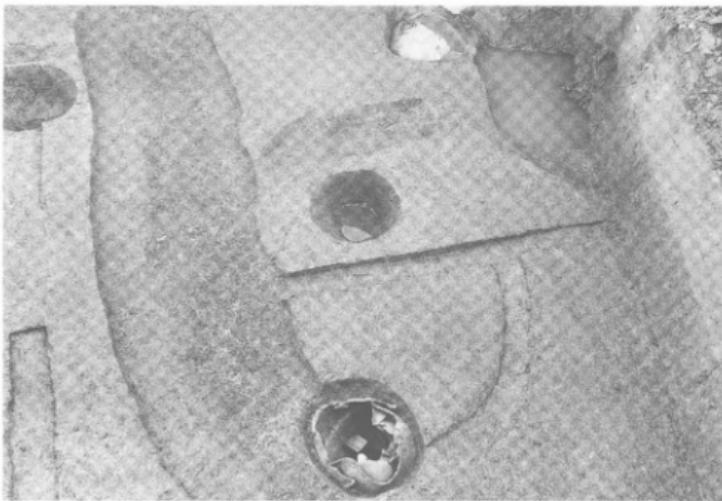
調査地（発堀直前）



I区南側 古代・中世面（北から）



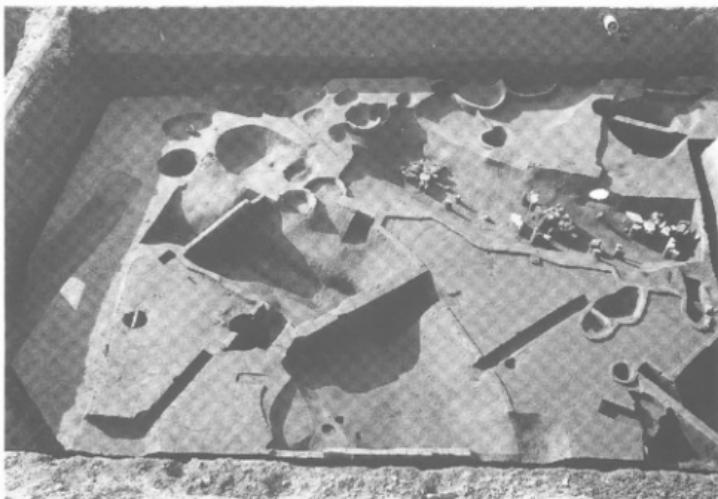
I区北側 弥生前期・中期面（南から）



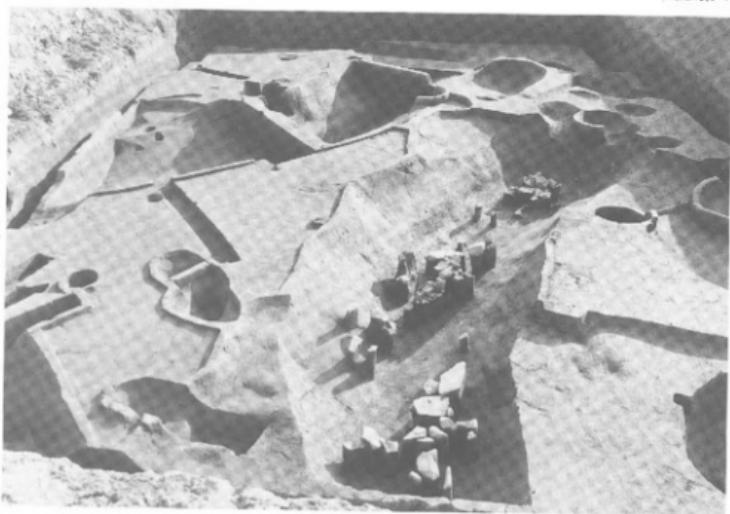
I区南側 弥生前期土器棺墓（東から）



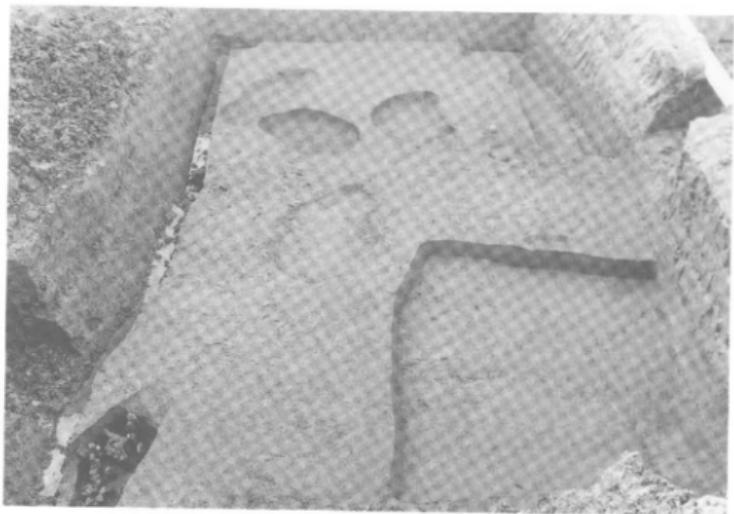
II区 弥生前・中期面（西から）



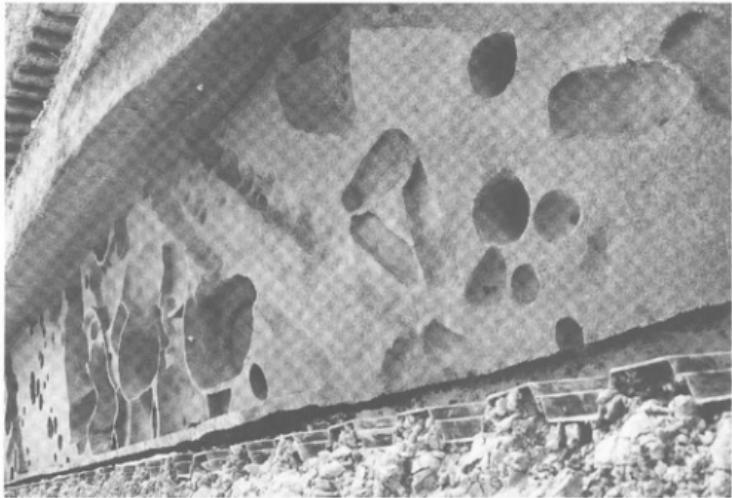
III区 弥生前・中期面（東から）



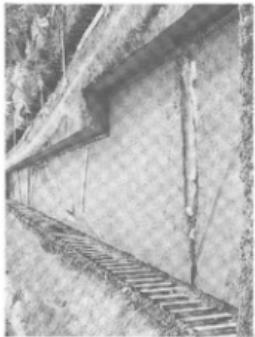
III区 弥生前・中期面（北から）



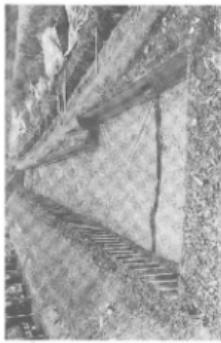
III区南側 弥生面（東から）



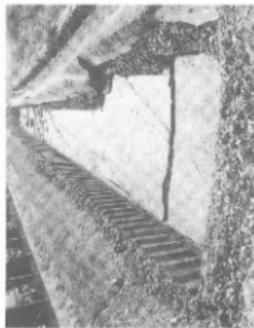
G層水田（北から）



I層水田（北から）

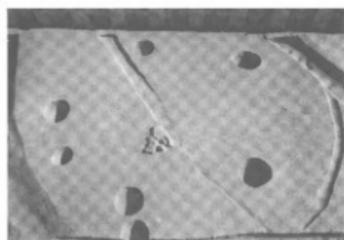


I層水田（北から）

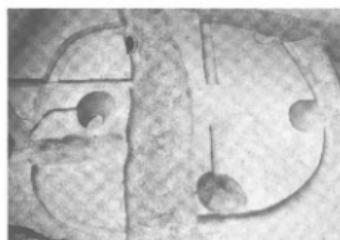


J層水田（北から）

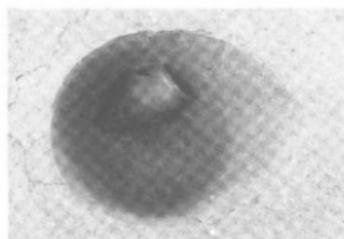
II区南側 弥生前・中期面（北から）



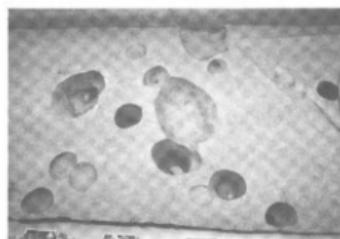
住 1



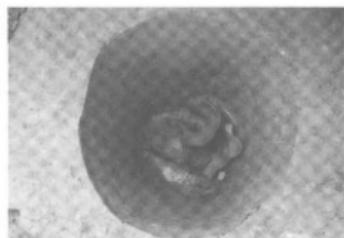
住 2



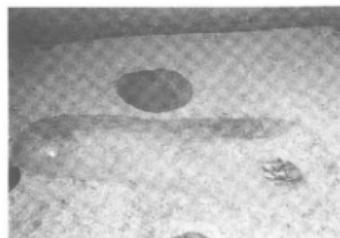
柱 穴 ③



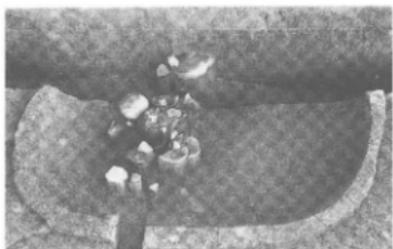
建 物



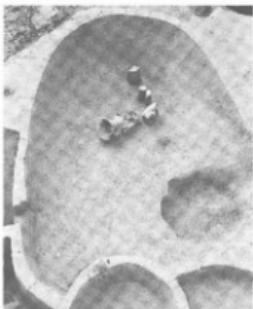
井 戸



P 52



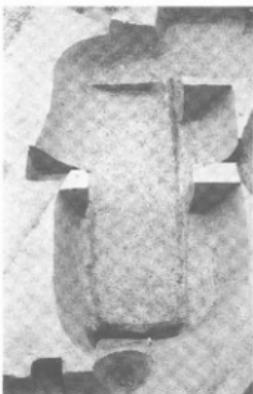
P139



P132



P88



P220



P50



P51

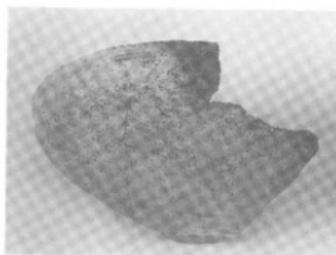
図版第 8



28



29



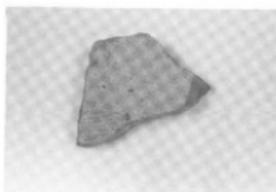
30



24



21



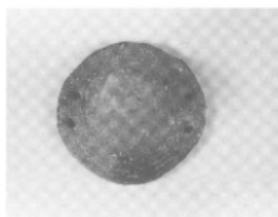
288



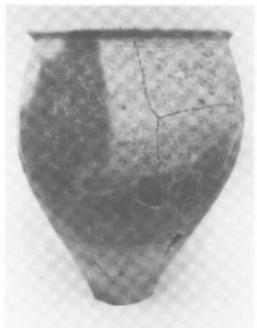
9



175



50



176



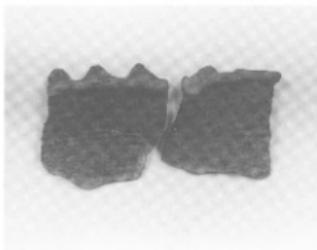
50



51



177



84

図版第10



112



71



110



72



174



180



181



## あとがき

現代社会をもたらせた先人達の不屈の営み——岡山市域においても数万年前から絶えることなく今日まで続けられています。その歴史の豊かさに比例して、多くの文化遺産が形成されており、今日まで継承されて来ていますが、これらは市民共有の先人達の遺産であり、子孫へ伝えなくてはならない財産であり、まさに文化財と呼ばれるものです。

最近の著しい都市開発と生活の近代化は、伝統ある文化や生活様式を喪失させ、自然環境の破壊や公害問題を引き起こしております、文化遺産に対しても極めて危険な状況を招来させています。岡山市教育委員会の文化課も文化遺産の保護と調査に努めていますが、土地と一体となっています埋蔵文化財の保護行政は開発か文化財の現存かのまさに二者択一の修羅場であります。こうした状況の内で、両者の整合を少しでも図るべく記録保存の発掘調査を実施していますが、その社会的要請は天井知らずの恐れさえ覚えさせられます。私は、各種の発掘現場に立つ都度にその奥行きの深さと掛け替の無さを痛感させられ、文化財保護行政の責務の重要性を改めて肝に銘じるところです。

此度の発掘調査は、百間川改修工事に付随した市道の新設に起因したもので、まさに現在の行政課題の縮図でした。調査は対策委員の先生方のご指導と、多くの関係者の皆様方のご尽力とご協力により無事終了し、ようやくここに報告書の刊行にまで漕ぎ着けました。寒風下での作業を思い出しながら、各位にここに感謝申し上げます。

発掘調査の成果はこの報告書にまとめましたが、今後の埋蔵文化財の保護保存と調査に、さらに私達の共有財産である郷土の文化財に対する理解と認識を深める一助となることを願うものです。

最後に、此度の発掘調査並びに報告書作成に、厳しい状況の下で精力的な取り組を遂行された文化課の関係職員の労を多とします。

平成4年3月31日

岡山市教育委員会社会教育部

文化課長 青山 淳

百間川沢田(市道)遺跡発掘調査報告

平成4年3月31日発行

製作・編集 岡山市教育委員会文化課

発 行 岡 山 市 教 育 委 員 会

岡山市大供1-1-1

印 刷 広 和 印 刷 株 式 会 社